

博士（保健学）学位論文

男性家庭科教員の現状から見る家庭科教育の革新の必要性

The Need for Innovation of Home Economics Contents
seen from the Present Situation
of Male Home Economics Teacher

2015 年

指導教員 橋本 紀子 教授

1202151

田 中 和 江
TANAKA, Kazue

女子栄養大学

目次

序章

I. 研究背景と研究目的	1
1. 研究背景と課題意識	1
2. 研究目的	5
II. 先行研究	5
1. 男性家庭科教員を対象にした研究	5
2. 男性養護教諭を対象にした研究	14
3. 女性職に就く男性についての研究	16
III. 作業課題	17
IV. 本研究のオリジナリティ	19
V. 本稿で用いる元・家庭科教員の定義	20
1. 元・家庭科教員とは	20
2. 元・家庭科教員を研究対象にした理由	20
3. 元・家庭科教員の抽出について	20

第1章 男性家庭科教員の現状と課題の検討

I. 目的	22
II. 分析視角	22
III. 研究方法	22
1. 世代区分法を用いる理由と世代別の特徴	22
2. 研究対象者とデータ収集方法	24
3. 調査項目	24
4. データ収集期間と所要時間	25

5. データの分析方法	25
6. 真実性の確保	25
IV. 倫理的配慮	26
V. 結果	
1. 元・家庭科教員と継続者との比較	26
2. 世代別による比較	32
VI. 考察	
1. 元・家庭科教員と継続者について	36
2. 世代別による比較	42
VII. まとめ	47
VIII. 本研究の限界と今後の課題	53

第2章 女性家庭科教員からみた男性家庭科教員の現状と男性家庭科観

－男性家庭科教員の認識との検証－

I. 目的	54
II. 研究方法	54
1. 調査対象者の抽出方法	54
2. 調査内容	54
3. 分析方法	55
III. 倫理的配慮	56
IV. 結果	
1. 対象者の属性	56
2. 男子学生および男性家庭科教員との学習・勤務経験	57
3. 男性家庭科教員の採用について	58
4. 男性家庭科教員が増えない理由	58

5. 男性家庭科教員に対する見解	59
6. 女性家庭科教員のジェンダー観	61
7. 女性家庭科教員の捉える男子生徒の見解と 男子生徒との経験	62
8. 男性家庭科教員の様子が書かれた手紙	63
V. 考察	
1. 男性家庭科教員との勤務経験と 男性家庭科教員が増えない要因について	64
2. 男性家庭科教員の採用について	65
3. 男性家庭科教員に対する見解について	66
4. 女性家庭科教員のジェンダー観について	67
5. 女性家庭科教員が行う男女共修家庭科	69
6. 家庭科が好きな男子が生まれにくい環境	71
VI. まとめ	72
VII. 本研究の限界と今後の課題	74
第3章 学校長からみた男性家庭科教員の現状と男性家庭科観	
—男性家庭科教員の採用を中心に—	
I. 目的	75
II. 研究方法	76
1. 研究対象者とデータ収集方法	76
2. 調査内容	77
3. 分析方法	77
4. 真実性の確保	78
III. 倫理的配慮	79

IV. 結果

1. 小・中学校の学校長による質問紙調査・・・・・・・・・・ 80
2. 小・中学校の学校長によるインタビュー調査・・・・・・・・ 83
3. 高等学校の管理職によるインタビュー調査・・・・・・・・ 86

V. 考察

1. 男性家庭科教員が増えない理由について・・・・・・・・ 96
2. 男性家庭科教員の採用について・・・・・・・・・・ 98
3. 男性家庭科教員に対する見解とジェンダー観について・・ 100
4. 家庭科教員に期待する役割について・・・・・・・・ 102

VI. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103

VII. 本研究の限界と今後の課題・・・・・・・・・・・・ 105

終章

I. 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106

II. 結語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 109

III. 今後の課題－家庭科教育の革新のために－・・・・ 110

謝辞

引用文献

序章

I. 研究背景と研究目的

1. 研究背景と課題意識

家庭科に対して、多くの人はどんなイメージを持っているだろうか。河村¹の調査によると、教育学部の学生は、「『料理』『裁縫』『調理実習』『保育』『花嫁修業』『女の先生』『お母さん』など家事や裁縫に関わるイメージが根強い」と述べている。恐らく、多くの人も「家庭科＝女性」といったステレオタイプのイメージであると思われる。

2010年告示の中学校学習指導要領解説 技術・家庭における家庭分野の内容²や、高等学校の学習指導要領の教科の目標³をみると、確かに家庭科は、料理・裁縫・保育を教えているが、家族・消費生活・環境といった領域も取り扱っており、家庭科は、家事・育児に留まらない、社会に関する幅広い知識と生活技術の習得が可能な教科であると言える。

多くの研究者もまた、家庭科は家事・育児だけの教科ではないと述べている。例えば田部井⁴は、「衣食住・家族・保育・家庭経営等の家庭生活を営むために必要な内容を系統的・科学的・実践的に児童・生徒に体得させ、その学習を通して家庭・社会の構成員として望ましい資質を培うことにより、人間形成に寄与する教科」だと述べている。また、良⁵は、「家庭科は、衣、食、住、消費生活や環境といった個人を取りまく生活空間に関する学び(空間軸)と、家族を含む身近な他者と関わりながら、子どもから高齢者まで、人間がどのように心身の変化を遂げるか、そして各ライフステージにおける社会システムはどのような現状かといった学び(時間軸)の、大きく2つの学びを通して、子どもたちが自らの生活と結びつけて、社会的な存在としてこれからどのようにライフスタイルを築いていくか、つまりはどう生きるかを考える教科であり、『生活者』

を育てる教科」であると述べている。この「生活者」について鶴田⁶は、「家庭生活の営みに価値をおき、それにかかわる者」であり、「他人と共同して生活課題の解決にとりくむ人」だと解説している。

従って、家庭科は、人間として豊かに生きるために必要な知識と技術の習得を通して、「生活者」の育成を目指す非常に重要な教科だと捉えることができ、それを学習する者は、性別を問わず、すべての人に当てはまると言える。

「生活者」の育成をめざし、男女が共に学ぶ家庭科が実現して 20 年が経過しても、なぜ人々は、「家庭科＝女性」というステレオタイプなイメージを持ち続けるのだろうか。その背景には、戦前の「家庭科」は、「良妻賢母主義教育」としての機能を果たしたという歴史がある⁷。戦後直後、新憲法と「教育基本法」の制定を契機に、男女が学ぶ教科として保障された⁹時期があったが、戦後の「職業・家庭科」は、1958 年の中学校学習指導要領改訂から「技術・家庭」に名称が変更され、技術分野は男子、家庭分野は女子に分けられたのである。高等学校も 1960 年の学習指導要領から、「すべての女子に原則として履修させるもの」となり、中学校・高等学校の家庭科は、男子から家庭科に関する学習の機会を奪い、また、女子から技術科に関する学習の機会を奪う形となり、戦前の性差を前提とした家庭科教育に逆戻りしたのである。この出来事について鶴田¹⁰も、「教育基本法の『教育の機会均等』『男女共学』に照らすと、まったくの後退」であると批判し、「男は外、女は内という性別役割分業を徹底していくのには、充分」であり、「日本人の性別役割分業意識がほかの先進国と比して強いのは、『男女別教育課程』という教育が戦後も約 40 年続けられたことに、最大の要因がある」と述べている。この時、高度経済成長を陰で支える「専業主婦」が誕生し、家庭科教育は、

人々の性別役割分業意識を肯定させる一端を担ったと考えられ、「家庭科＝女性」イメージをさらに強固にする機能を果たし、今に続いている。

家庭科の男女共修化が実現した経緯は、1975年に国際連合で国際婦人年世界会議が開催され、1979年に女子差別撤廃条約が採択されたことである。それによりわが国は、当時の家庭科が女子差別撤廃条約に違反するとして、中学校では1993年、高等学校では1994年から家庭科の男女共修が実現し、家庭科教育は、表向きではあるが、人々の性別役割分業意識を正統化する象徴的機能を失った。男女共修家庭科の実施は、女子差別撤廃条約を批准するための「外圧」^{a11}によるものだと評価する人がいるが、そうではない。条約を採択する以前から国内では、1974年に発足した市民組織「家庭科の男女共修をすすめる会」¹²による強い要求がすでにあり、1960年の学習指導要領改訂以降も、男女共修家庭科を実施してきた京都府や長野県の教育実践が、それを後押ししていたのである。

こうして家庭科は、男女ともに開かれた教科に生まれ変わり、1985年の「男女雇用機会均等法」の制定によって、看護師・保育士といった、これまで女性の領域とされてきた職業に参入する男性が認知されるようになった。また近年、家事・育児に関心を持つ男性を象徴する言葉として、育児に積極的な男性「イクメン¹³」や、自分のお弁当を作る「弁当男子¹⁴」という言葉が出現し、性別役割分業観や男女特性論などに変化が見られ、男女共同参画社会の実現は、ゆっくりではあるが、進んでいるかのように思える。

しかし、未だに教育の場において、社会的文化的性役割を固定化する

^a 鶴田によれば「新しい歴史教科書をつくる会」の高橋史郎氏は、男女共修家庭科の実現について「生徒の立場から考えられたものではなく、女子差別撤廃条約という圧力が加わり…」と評価している。

ジェンダーの再生産は行われている。例えば、木村¹⁵は、幼児教育の現場において、『男の子はブルー、女の子はピンク』というように、それぞれの性別にステレオタイプ化された色やシンボルをあてはめる行為が日常的に繰り返されて」といると指摘している。さらに、教科を教える教員は、教科ごとの性別不均衡があり、「知識領域の性別適性の考え方や進路の性別分化につながっていく」と述べ、これは、「学校文化の中に埋め込まれた『隠れたカリキュラム』とみなすことができる」と分析している。このような報告は、国内外の数多くの研究者¹⁶¹⁷¹⁸¹⁹²⁰²¹も論じている。

教科による教員の性別不均等との関連は明記されていないが、教科によって子ども達の学習意欲に性差があることが海外の先行研究で明らかにされており、例えば、Clark ら²²や Alloway²³らは、国語に関して、子どもの読み書きや学習態度に男女差があり、特に男子に問題が多いと指摘している。また Geen²⁴は、家庭科について、カリキュラムの中で必修教科ではない家庭科を選択する生徒に男子が少ないことを明らかにしている。

家庭科の男女共修化から約 20 年が経過しても尚、家庭科教員は圧倒的に女性であり続けていることから、今日の家庭科は、男女平等の象徴としてふさわしい「生活者」の育成ができているのかどうか、性別に関係なく、学習意欲が湧く教科になっているのかどうかについて、今一度問い直し、今後、どうあるべきかを検討する時期に来ていると考える。筆者は、その一つの切り口として、家庭科を教える側である教員の性別に着目した。現在に至っても、男性家庭科教員が増加しない要因について分析し、真の「男女共修家庭科」の実現のための課題は何かを明らかにする。ここでいう真の「男女共修家庭科」とは、単に家庭科教員の男

女比が均等になれば良いと言うようなことではない。家庭科教育の内容が、男女両方の生徒の生活者としての自立を促すものへと作り変えられることを意味しているのである。新しく参入してくる男性家庭科教員は、これをこなせる人材であることは、当然、求められる。

2. 研究目的

本研究の目的は、男女共修家庭科が実現して約 20 年が経過したのにも関わらず、男性家庭科教員がなぜ増えないのかを、男性家庭科教員の現状とその周辺の課題を明らかにすることで把握し、真の「男女共修家庭科」の実現のための課題を検討することである。

II. 先行研究

これまで「女性の職業」とされた領域に参入する男性を焦点にあてた先行研究は、看護の領域を中心に蓄積されつつある。ここでは、男性家庭科教員の先行研究を踏まえた上で、近年、教育現場の一人として増加しつつある男性養護教諭にも焦点をあて、何が議論されてきたのかを検討すると共に、海外の先行研究も参考にし、女性の職業に参入する男性の困難について明らかにし、作業課題を具体化するための知見を得ることとする。

1. 男性家庭科教員を対象にした研究

1) 男性家庭科教員と家庭科教員養成を専攻する男子学生の統計調査

田中²⁵は、男性家庭科教員の採用状況を調査し、中学校教員で 1976

年に群馬県で、高等学校教員では 1977 年に岩手県で、それぞれ 1 名採用していることを明らかにしている。しかし、1999 年の調査では、両県共に 0 になっていることから、退職もしくは他教科へ異動したものと推測されるが、定着しにくい厳しさがあつたのではと推測している。

一方、1996 年に行った上里ら²⁶の調査によれば、中学校家庭科担当の男性教員は、5%にも満たないことを明らかにしている。このことから、男女共修以前の中学校において、家庭科教員として採用されていなくても、男性が家庭科を教えていたと考えられる。

麓・松井²⁷は、2004 年に公立中・高等学校の家庭科教員の人数を男女別に調査したところ、中学校では 45 都道府県中 27 都道府県で 19 名 (0.6%)、高校では 31 都道府県中で 36 名 (0.9%) いたことを明らかにしている。また、近畿地方の私立中学・高校では、正規・非正規の家庭科教員に占める男性教員の割合は、5.3%だった。さらに、男性家庭科教員の採用人数と合格率については、平成 14~16 年の 3 年間のうち家庭科教員になった男性は、全国の中学校・高等学校合わせて 5 名で、女性が 394 名と比べてもわずかであること、合格率については、女性が 7.7%であるのに対し、男性は 2.7%と低いことから、「女性の方が男性より家庭科に対する能力が高いと言わざるをえない」と述べ、性別による能力差があることを指摘している。

大竹・鈴木²⁸が行った高等学校の男性家庭科教員数の調査では、回答のあつた 34 都府県中で最も多い県は埼玉県の 17 名 (4.7%)、続いて東京都の 10 名 (3.0%) だが、他の県は 1 人であることが多く、14 県は 0 人だったことを明らかにしている。この 2 つの都県が 2 桁だったことについて、男女共修家庭科を実施する際に、この都県の教育委員会が他教科の教員から希望者を募り、1 年間の講習を実施して、家庭科教員を養

成した経緯があり、その時に家庭科に転科した男性教員が一定数いたからではないか、と分析している。大竹らが調査した時期と家庭科に転科した男性教員の人数が明記されていないため、講習後、何年が経過したのかは、確認することはできない。しかし、吉野ら²⁹によると、東京都の家庭科教員養成事業に参加した男性の人数は30名中16名であることを明らかにしている。ちなみに愛知県でも、家庭科の教員養成事業を行っており、伊藤³⁰によれば、30名中22名は男性だったと述べている。愛知県の研修事業に参加した香村³¹は、3年間のみ本来の教科と家庭科を半々に教えるという計画だったと述べていることから、この県の男性家庭科教員の誕生は、限定的なものと考えられる。従って、大竹らが調査した時期までに、東京都では6名以上、愛知県では19名以上が、家庭科の教員を中断した可能性があり、男性の家庭科教員は、やはり、継続しにくいと推測される。

1989～2010年の中学・高等学校の学校基本調査をまとめた筆者の調査結果³²では、男性家庭科教員の割合は、中学校において一番多い年が2010年度の0.3%、高等学校では、2007年度の0.2%であり、どちらも1%に満たしていなかった。この数字は、家庭科の教員免許取得者を示しており、実際に家庭科を教えていない教員も含まれているため、実際に家庭科を専任としている教員は、これよりも少ないと考えられる。

このことから、男女共修以前から男性家庭科教員は存在しているものの、その割合は極めて少なく、男女共修後も、急激な増加傾向を示しておらず、男性家庭科教員は継続するのが困難であると考えられる。

次は、家庭科教員養成課程を専攻する男子学生の統計調査の先行研究を検討する。津止³³が行った家庭科教員養成課程に関する調査によると、

1992年度の家庭科を専攻する男子学生は、53校中26校に在籍し、その数合計63名と報告している。そのうち、家庭科教員としての就職した人数は、小学校で9名、中学校で1名、高校で3名、合計13名であり、家庭科の教員免許を取得してもそれを活かす男性が少ないことを明らかにしている。養成校側からみる男性家庭科教員の実態は、「受験者は毎年おり、積極的に男子学生を受け入れたいと考えていても合格しない」、「被服の裁縫技術で苦勞しており、カリキュラム上、履修に困難がある」、「女子の中で小さくなって学習に参加している」、「採用枠が少ないために教員志望に向かう意欲を失っている」などであった。

筆者³²は、1989～2012年の学校基本調査報告書から、文部科学省が示す家庭科教員養成校の主な学部³⁴を選択し、男子の割合を算出した。家政学部³⁴に在籍する男子学生に着目すると、その割合は、1989～1993年までは2%以下だった。男女共修を経験した男子学生が大学に進学する年の1998年以降から増加傾向を示し、2007～2011年では1割程度となったが、家政学部³⁴に在籍する学生は、以前として圧倒的に女子学生が占めていた。その要因を検討するため、家庭科教員養成校における女子大の占める割合を調査した。文部科学省が示す、中学校・高等学校教員（家庭）の免許資格（一種・二種）を取得することができる大学・短期大学の通学課程を参考に、国公私立の共学大と女子大の数と男子の入学が可能な大学の数を計上したところ³⁵、男性が入学できる家庭科教員免許の取得可能な養成校は、一種・二種共に6割以上あり、男子にも開かれていると考えられる。しかし、一種の教員免許が取得可能な私立大学を見ると、7割以上が女子大であり、男子学生が家庭科教員を志望しても、私立の養成校を見つけるのは女子より困難であることが示された。このことから、男女雇用機会均等法が制定されて30年が経過している

が、これまで女性職として養成してきた教育機関では、男子を受け入れないという機会の不平等が存在していることが考えられる。

本研究でも、男性家庭科教員が増えない要因として同じことが言える結果が得られるのかどうか、これからの課題としたい。

2) 男性家庭科教員および家庭科教員養成の男子学生の質的研究

男性家庭科教員および家庭科教員養成の男子学生を対象にした研究はいくつかあるが、その中でも代表的な 4 つの先行研究に焦点をあて、分析方法等について検討する。

はじめに、堀内³⁶の調査に注目する。対象者は、すでに他教科の教員免許を取得し、家庭科を兼担している 3 名の男性教員と、家庭科を専攻している大学院生・大学生 3 名の学生である。ライフヒストリーによる分析を行ったところ、両者とも、中学・高校で家庭科を学んでいないが大学等で家庭科を学習したことで、この教科に興味をもち、自分が今生きている「存在価値」を体現するだけではなく「ジェンダーの転機^{ママ}をもたらし」ことを明らかにしている。

小高³⁷もまた、男性家庭科教員のアイデンティティの変遷という視点から一人の男性を中心にライフヒストリー分析を行っている。堀内氏の対象者は、男女共修化に伴い立ち上げられた養成事業制度を利用して、家庭科の教員免許を取得した教員であるのに対し、小高の対象者は、男女共修化以前に家庭科を学ぶ場を求めて開拓し、英語から家庭科に転科するために、再度、教員採用試験を受け直した南野忠晴氏である。南野氏は、1992 年に「家庭科教員をめざす男の会（以後、男の会）」を旗揚げするなどし、言わば、男性家庭科教員の先駆者でもある。南野氏が直

面した困難は、「現職の男性教師が家庭科教師を目指す時、教員養成制度において正規に免許取得のために在籍できる大学の門戸は開かれていない」という「制度的なバリア」であること、そして、「女性ばかりびっしり詰まった中に僕一人」という「心理的バリア」乗り越えることによって、家庭科教員としてのアイデンティティを形成する、と述べている。

阿部³⁸は、1997年に、男性家庭科教員3名と家庭科教育を学ぶ福島大学の男子学生に対してインタビュー調査を実施し、家庭科に対する見解の変容について、以下のように述べている。男性家庭科教員の場合、家庭科教育に対する軽視や男性が家庭科を教えることに戸惑いつつも、家庭科の重要性に気づいていると述べている。男子学生については、多くの女子学生に囲まれて家庭科を学ぶことに戸惑い、本来の自分の存在を主張できずに委縮するものの、「男性が家庭科を教えることが、生徒たちにとって男も女も家庭科をすることを認識させる効果があると考えている」と報告している。

麓・杉井²⁷は、2004年に中学校の男性家庭科教員1名、高校の男性家庭科教員3名にインタビュー調査を行ったところ、「男性が家庭科教師として教壇に立つだけでも、『家庭科の先生は女性』という教師に対するジェンダー意識をなくしていける効果がある」と語り、男性が家庭科を教えることの意義を明らかにしている。

これら4つの研究対象者はすべて、男女共修家庭科以前の教育課程を修めたものであり、家庭科教員を中断した男性は一人もいなかった。そして、調査人数も5名以下とわずかであるため、ライフヒストリーに着目した分析が多かった。調査の結果は、家庭科に関与したことで家庭科の重要性を認識し、男性が家庭科を教えることの意義を認識していた。そして、他者からのジェンダー・バリアのまなざしにさらされ、心理的

ストレスを少なからず感じていることも明らかになった。男性が家庭科教員として継続するためには、どうやらジェンダー・バリアを乗り越えることが重要であると推察される。また、家庭科に関与した男性は、家庭科の重要性を認識すると言う。それならば、なぜ、共修以降、急激に男性家庭科教員が増えていないのだろうか。その理由を追及することこそ、本研究の課題である。

3) 男性家庭科教員本人以外の視点から見る男性家庭科教員の存在についての研究

吉野・深谷²⁹や、麓・松井²⁷の先行研究によれば、男子生徒が男性家庭科教員の授業を受けると家庭科を好む男子が増加することを明らかにしている。さらに、「家庭科＝女性」というイメージを変えることが出来る固定観念を修正することの可能性についてと述べ、男性家庭科教員の必要性を述べている。

倉盛³⁹は、小学校のベテラン教員による家庭科の実践研究を見学した大学生の反応を分析したところ、「男性の家庭科教師の養成が、男女共修問題のひとつの突破口として大きな意味をもつ」と考察している。さらに倉盛は、家庭科の相互乗り入れに関する意識調査を和歌山県下の公立中学校の家庭科・技術科教員に行ったところ、抽象的には性差意識への批判動向が高まっているが、家庭科教師＝女性教師というイメージを固守・固持しているのは女性であることを明らかにしている。

佐藤⁴⁰は、1990年代に掲載された男性家庭科教員に関わる新聞記事を分析し、男性家庭科教員は、『『女性の領域』からの脱却をはかる『新しい家庭科』イメージの広告塔としての役割を担って』おり、『『新しい家庭科』にインパクトを与える存在』だと報告している。そして、男子が

家庭科を学ぶことへの「新しさ」がなくなれば、広告塔としての必要性を示す機会が減ると推測している。この論文は、2004年に発表されたものだが、2015年現在、男子が家庭科を学ぶことの「新しさ」は、なくなったと言えるだろうか。教室で男女が共に学ぶという、カリキュラム上の新しさはなくなったと言えるかもしれないが、男性家庭科教員が増えていないという現状から、未だに男子生徒が当然のように家庭科教員を職業の一つとして選びとっていないと考えられる。また、家庭科に対するイメージは伝統的な家庭科観のままであることから、男性家庭科教員は今も、「新しい家庭科」としてインパクトを与える存在であることには変わりがないと推測される。

多々納⁴¹は、1986年に島根県の公立小学校の男性教員を対象に、家庭科指導の実態について質問紙調査を行った。その結果、5・6年の学級担任中、家庭科を経験したものは1/5強しかなく、家庭科の担当に、性別役割意識が作用している可能性を示唆している。しかも、男性教員は実技面において自信がなく、特に、被服領域を苦手としていると述べている。

松木⁴²は、青森県の無作為抽出した小学校5・6年の担当教員と、校長、保護者に質問紙調査を行ったところ、教科および学年を担当する教員の性別による不均等があることを明らかにしている。その理由は、男性教員は、家庭科を単なる技能教科とみなして敬遠すると共に、女性なら誰でも担当できると家庭科を極めて軽く扱っていること。さらに、学校運営にあたる校長が、行事や他教科の遅れを取り戻すために家庭科の時間を使っており、教育現場において、家庭科に対する軽視があることを指摘している。保護者を対象にした、家庭科を教える教員の性別に関する調査では、「男性教員も家庭科を教えた方が良い」との回答者が5割以

上であり、小学校児童・中学校卒業生・高校生でも6割以上いることを明らかにしている。この論文は、調査期間が明記されていないので定かではないが、1974年に発表されていることから、男女共修家庭科が実施される以前から、保護者や生徒から、家庭科教員に性別は関係ないという見解があったと推測される。今日、学校現場においても、家庭科に対する軽視があるのかどうか、「家庭科＝女性」イメージを継続しているのかどうか、継続している要因は何かを明らかにする必要がある。

4) 男性家庭科教員自身の経験を述べた小論等

自身の家庭科教員になった動機について中西⁴³は、小学校の教員免許が取得できればどこでも良いと思い、家政科を専攻したところ、家庭科は小学校以来学んでこなかったために一時は転科を考えるほど「苦悩」した、と述べている。だが、クラスメイトの支援と、大学の家政系の講義を学び、「今までの視野がいかに狭く、偏見に凝り固まっていたものであったか思い知らされ」、「将来を決定する重要な中学・高校生の時期に家庭科を学べなかったことが残念でならなくなった」と述べ、生涯、家庭科に携わることを決心したという。生徒の反応について、「(女子生徒は)男の家庭科教員に対して何の違和感もなくなったと全員が口をそろえる。男が当然のように家庭科を教えていた光景そのものが、彼女たちにとって一つの情報になっていたのだと思う」と述べ、女性家庭科教員との違いがあるとすれば、それは性差以前に一人一人の教員が抱いている家庭科観、家庭科ママ、人生観によると、考察している。

2008年に開催された家庭科教育研究者連盟主催の夏季研究集会のテーマ別分科会の様子について、鈴木⁴⁴は、以下のように述べている。男性家庭科教員6名から、家庭科教員になった経緯や授業の様子などが語

られ、参加者とともに質疑・討論を行った。その内容は、「中学の家庭科が男女必修になって10年以上になるが、未だにジェンダーを乗り越えられておらず、また、男性教員も増えていない」、「家庭科の免許が取得できるのは教育学部を除くと女子大が中心であり、男子生徒が家庭科の教員を目指しても、男子生徒の受け入れ先がない」、「男子生徒が家庭科の先生になりたいと思うような内容の家庭科をつくらなければならないのではないか」などであり、いくつかの課題が確認されたとのことである。

現在、この報告から約10年が経過しても尚、これらの課題が克服できていないのはなぜなのかを検討する必要がある。そして、男性家庭科教員に関する研究・報告の多くは、その本人による質的調査が中心である。男性家庭科教員の実像に迫るためには、多様な視点から男性家庭科教員の実態を捉える研究も必要であると考えられる。

2. 男性養護教諭を対象にした研究

1) 生徒の意識調査

男性養護教諭を焦点にあてた研究の多くは、生徒の意識調査である。そこでは、半数の生徒が男性養護教諭を受け入れており、生徒は同性の養護教諭を求める傾向があるため、多角的な視点から子どもを支援する養護教諭の必要性を述べている⁴⁵⁴⁶⁴⁷⁴⁸。さらに、男性養護教諭の勤務校と非勤務校とを比較した場合、勤務校の生徒の方が、養護教諭の性別に関してこだわりがないことも明らかにしている⁴⁹。医者は身体に関する相談や医療行為を、性別問わず行っており、相談相手に性差は問題ないと述べ⁴⁶、男性養護教諭との出会いによって、「養護教諭=女性」という

イメージを変える契機になると考察している。このことから、研究者の多くは、男性養護教諭の増員が子どもの支援の充実に繋がると期待していることが、明らかになった。

2)女性養護教諭および教育委員会の意識調査

女性養護教諭を対象にした男性養護教諭の採用に関する調査によると、大野ら⁵⁰は、教育現場では女性がほとんどを占めており、男性養護教諭の利点が想像できないため、男性養護教諭の採用に関心を持っていなかった。また、否定的な意見のある教員は、年齢が高くなるほど多く、複数配置や男子校であればという条件付きなら、男性養護教諭の配置は可能だという意見が寄せられたことを明らかにしている。

津村ら⁴⁸の調査では、半数以上が男性養護教諭の採用に賛成しているが、女子への対応が困難だという理由で、7割の女性教員が男性養護教諭は難しいと判断していた。津村らは、教育委員会に対する調査を行っており、「成績が良ければ採用する」という回答が6割あり、十分な成績があれば採用することを明らかにしていた。しかし、男性が採用試験を受験する可能性について考えたことがない県や、校種に限定して採用する意見もあり、女性養護教諭や教育委員会側のジェンダー・バイアスがあることが明らかにされている。

3)男性養護教諭の研究

川又⁵¹は、男性家庭科教員の質的研究と同様、ライフヒストリー研究を行っている。小高が調査対象にした南野のように、川又の調査対象者も「男性養護教諭友の会」を結成し、養護教諭としてのキャリアアップを目指した男性である。性別で採用が決まる訳ではないとしながらも、

採用実績が乏しい状況下で横のつながりがほとんどなく、孤独であり、周囲からの好奇の目にさらされるなどの「ハードル」があることを、述べている。

松下⁵²は、男性養護教諭の抱える困難の多くは、養成時代の男子学生の少なさからくる不便をあげた。職場の同僚からの評価は、男性養護教諭が配属されたおかげで保健室に来る男子が増え、それを「良いこと」と評価していた。加えて、男性養護教諭は子どもたちに対し、従来の「男性イメージ」を変えるきっかけや、母子家庭の子ども達のロールモデルとしての役割を果たす存在になることを示唆しており、男性養護教諭の重要性についても明らかにしている。

3. 女性職に就く男性についての研究

Williams⁵³は、ジェンダー・マイノリティとして男性職/女性職に参入する女性/男性の経験を分析しており、男性が女性職に就いた場合、ゲイではないかというネガティブなステレオタイプや偏見の目でみられ、自己肯定感を奪われて辞職することもあると推察している。Evans⁵⁴もまた男性看護師を対象にした調査で同様の結果を得ており、このような偏見が、看護に参入しようとする男性を阻む要因になると述べている。Paul⁵⁵は人数の少ない小学校の男性教員について、「男性教員は、常に小児愛者ではないかという疑いのまなざしで監視されることが多い」ことを明らかにしている。Smith⁵⁶は、小学校の教員を目指して入学する男子学生は増えているにも係わらず、卒業する男子生徒が少なくなっている要因について、実習をして初めて小学校の男性教員の少なさによる孤立や、養育的な場所としての小学校文化を知り、教員志望を取りやめる

ことを明らかにしている。

以上の先行研究から、男性の家庭科教員と養護教諭の共通点として、彼らの存在自体が生徒のジェンダー観を変える役割をもっていること、そのことを本人たちも感じており、特に、男子生徒に高い教育的効果があることが確認された。

さらに、養護教諭の採用に関して、性別で判断することはしていないが、採用者側にジェンダー・バイアスがあり、男子校なら・複数配置なら配置するといった条件があることが推察された。これまで、男性家庭科教員に関する先行研究において、採用者だけではなく、同僚である女性家庭科教員を対象にした研究報告はされていない。採用者側および女性家庭科教員のジェンダー・バイアスはあるのかどうか、加えて、男性家庭科教員を採用する場合、条件があるのかどうかを明らかにする必要がある。

Ⅲ．作業課題

そこで、本研究の作業課題を整理する。男性家庭科教員が抱える課題には、男性が入学できる養成校が限定されていること、家庭科教員になった動機、男性が家庭科教員を中断・継続する理由、周囲の人間関係のほかに、男性教員の身近な存在である女性家庭科教員と学校長から見た、男性教員に対する見解について検討する必要がある。さらに、男性・女性家庭科教員、学校長の三者のジェンダー観および家庭科観についても調査する必要がある。加えて、これら3者を取り巻く国の教育政策と社会における家庭科観は、男性家庭科教員がこれまで増員しなかった要因

と関係があるのかどうかについても、検討を試みたい。

そこで、図 0-1 に示すように、本研究の概念図を作成し、3 つの作業課題を設定した。(図 0-1 : 本研究の概念図)

作業課題 1 : 男性家庭科教員と元・家庭科教員に対して半構造化面接を行い、彼らが抱える課題を把握し、男性家庭科教員が増えない要因を検討する。さらに、男女別で体育や家庭科を学び、性差のあるカリキュラムで育った年代とそうでない年代との違いによって、男性家庭科教員にどのような特徴が見られるのかを検討する。

作業課題 2 : 現職女性家庭科教員に無記名自記式質問紙調査を行い、女性家庭科教員からみた、男性家庭科教員が増えない要因と彼らに対する見解、さらに、女性家庭科教員自身が持つ性役割観について明らかにする。加えて、男性家庭科教員本人が認識している男性家庭科教員の特徴や、女性家庭科教員との関係は、女性家庭科教員からみてもうなずけるものかどうかを検討する。

作業課題 3 : 採用する側である学校長に対し、無記名自記式質問紙調査および半構造化面接を行い、学校長からみた男性家庭科教員が増えない要因と学校長自身が持つ性役割観について明らかにするとともに、作業課題 1・2 で得られた知見を確認し、男性家庭科教員が増えない要因と家庭科教育全体の問題点は何かを検討する。

IV. 本研究のオリジナリティ

①研究手法について

男性家庭科教員に関する先行研究は、男性家庭科教員の存在意義や教育的効果について、本人もしくは生徒に対する意識調査によって明らかにされたもの以外なかった。本研究では、男性家庭科教員の他に、女性家庭科教員と学校長を加えることによって、男性家庭科教員が認識している存在意義等について、妥当かどうか客観的に判断している。この3者の視点から実像に迫る研究手法は、本研究のオリジナルな点である。

②世代別による男性家庭科教員の調査

これまで、男性家庭科教員を焦点化した質的研究の調査人数は、10名以下と少ない。それ故、その多くがライフヒストリーによる分析であるため、個人的な現象として捉えることしかできなかった。本研究では、調査人数は20名とこれまでの倍であり、一定程度ではあるが、男性家庭科教員の傾向として一般化することが可能になった。さらに、世代別で比較・分析することで、時代による家庭科教育の違い（女子のみか、あるいは男女共修か）と男性家庭科教員の家庭科観との関係を探ることについても可能になったのである。従って、世代別で男性家庭科教員を比較している点も、本研究のオリジナルである。

③元・男性家庭科教員を対象にした調査

男性家庭科教員を対象にした質的研究の大部分は、現役の家庭科教員もしくは家庭科教員を目指す男子学生が対象である。本研究では、現役の男性家庭科教員に加え、家庭科教員を中断した元・家庭科教員を対象にしたことによって、これまで男性家庭科教員が急激に増えてこなかった

た要因を明らかにすることが可能になった。研究対象者に現職だけではなく、中断者を加えている点も、本研究のオリジナルだと言えよう。

V. 本稿で用いる元・家庭科教員の定義

1. 元・家庭科教員とは

1994年の男女共修家庭科に伴い、いくつかの都県では、高等学校の家庭科教員を増やすため、他教科の教員を1年間で家庭科の教員免許を取得させる「家庭科教員養成事業」「養成制度」（以後、研修）を開催した。作業課題1の研究対象者である「元・家庭科教員」とは、そこに参加して家庭科教員となり、その後、中断した教員を指している。

2. 元・家庭科教員を研究対象にした理由

元・家庭科教員を研究対象にした理由は、これまで現役の家庭科教員もしくは男子学生を対象にした調査はあるが、元・家庭科教員を対象にした調査は行われていない。一度家庭科を教えたことのある男性教員が、なぜ、元の教科に戻ったのかの原因を調査することによって、男性家庭科教員が増えない理由と課題をより鮮明にすることができると考えたからである。

3. 元・家庭科教員の抽出について

A大学（以後、A大）の同窓会誌によれば、S県の教育委員会からの要請を受けて、1992年度と1993年度の2回にわたり家庭科教員養成研修を開講し、1年間で家庭科教員免許の取得単位を与え、55名の家庭科教員が誕生した。小高³⁷によると、このような研修は、家庭科に転科し

でも5年後に元の教科に戻るチャンスがあった、と述べていることから、家庭科教員を中断した教員がいれば、そのまま継続した教員もいたと考えられる。そこで、A大同窓生が集まる家庭科ネットワークの協力を得て、男性教員に往復はがきを送り、研修後も家庭科教員を継続したかどうかを伺うと共に、インタビュー調査の協力を募り、承諾を得ることができた元・家庭科教員を調査対象とした。

第1章 男性家庭科教員の現状と課題の検討

I. 目的

本章では、男女共修家庭科を機に家庭科に転科した男性教員（以下、継続者）と途中で中断した男性教員（以下、元・家庭科教員）が抱える課題を把握し、男性家庭科教員が増えない要因は何かを検討する。また、家庭科の学習指導要領の変遷によって、男性家庭科教員にどのような特徴が見られるのかを検討する。

II. 分析視角

このインタビュー調査においては特に以下の2点を分析視角とする。

1. 元・家庭科教員と継続者との比較。
2. 世代別による男性家庭科教員の比較。

III. 研究方法

1. 世代区分法を用いる理由と世代別の特徴

世代別区分法を用いる理由は、世代によってジェンダー平等をめぐる社会制度や家庭科の学習指導要領が異なるため、男性教員が家庭科に向かう見解や抱える課題に違いがあると考えたからである。例えば、高校の男女共修家庭科を経験した教員と経験していない教員、高校で家庭科を学習していなくても中学生の時に家庭科と技術科の相互乗り入れを経験し、学習した教員とでは、家庭科教員になる動機や家族や同僚、生徒の反応には、違いがあると推測される。

橋本・茂木ら⁵⁷が作成した世代別区分法は、学習指導要領を基準に世代別に区分しており、本研究を分析するのに最適であると考え、採用し

た。

橋本らは、世代別による家庭科の学習指導要領の特徴について、以下のように述べている。

「①第一世代（1940～1946年度生まれ）：1年生から国民学校ではなく、新制小学校に入学し、戦前の教育制度は経験していない世代。1956年改訂高校学習指導要領で「女子については『家庭科』の4単位を履修させることが望ましい」とされていたため、家庭科を履修していない女性もいる。

②第二世代（1947～1956年度生まれ）：1960年高校学習指導要領改訂（1963年施行）で「家庭科については（中略）女子には原則として『家庭一般』を必修」とされる。中学校では、1958年学習指導要領改訂（1962年施行）によって、男子向きと女子向きに二系列化された「技術・家庭科」が誕生する。

③第三世代（1957～1965年度生まれ）：1970年高校学習指導要領改訂（1973年施行）で普通科では「『家庭一般』は、すべての女子に履修させるものとし、その単位数は、4単位を下らないようにすること」となる。中学校の技術・家庭科は男女別の二系列のまま。

④第四世代（1966～1977年度生まれ）：1977年中学校学習指導要領改訂（1981年施行）で技術・家庭科の相互乗り入れが開始される。高校の家庭科は女子のみ必修のまま。

⑤第五世代（1978～1986年度生まれ）：1989年の学習指導要領の改訂で、高校では1994年から『家庭一般』『生活一般』『生活技術』中から1科目が選択必修となり、男女とも家庭科が必修となる。中学校では1993年から技術・家庭科の男女の区別がなくなり、学習指導要領上の男女差別が解消。」された。

次の学習指導要領改訂は 1998 年であり、次の世代は、⑥第六世代(1987~1996 年度生まれ)となる。この改訂により高校では、2003 年から 4 単位だったカリキュラムに 2 単位の「家庭基礎」が新たに加わり、「家庭総合」(4 単位)、「生活技術」(4 単位)の 3 科目の中から 1 科目選択必修になったことが特徴である。

2. 研究対象者とデータ収集方法

分析視角 1 の調査対象者は、A 大学で開講された家庭科教員養成（以後、研修）を受講した現役の教員（以後、継続者）5 名と、元・家庭科教員 5 名の計 10 名であった。なお、すべて高等学校の教員である。

分析視角 2 の調査対象者は、第二世代 7 名、第三世代 5 名、第四世代 5 名（中学校・中高一貫校の教員各 1 名）、第五世代 6 名、第六世代 2 名の計 25 名であり、2 名以外はすべて高等学校の教員であった。なお、第二・第三世代について、A 大学の研修生は 10 名、B 大学の科目等履修生は 2 名であった。調査対象者の平均年齢は、45 歳であった。

データ収集方法は、インタビューガイドを用いた半構造化面接⁵⁸である。

3. 調査項目

調査項目は、家庭科教員自身について（年齢・取得している教員免許・教員歴）と、男性家庭科教員を対象にした先行研究を参考に、家庭科教員を志した動機について聞き、さらにジェンダー形成と家庭科教育（生まれ育った家族について・自分が受けた家庭科教育・教える立場からの家庭科について等）とした。研修後、中断した元・家庭科教員には、元の教科に戻った理由を、継続者には、継続した理由を尋ね、調査を行う

た。(表 1-1：インタビューガイド参照)

4. データ収集期間と所要時間

2013年4月4日～12月21日に行った。調査所要時間は調査対象者の都合等に合わせて30分～3時間であった。

5. データの分析方法

面接内容のデータ分析は、マトリックス抽出法を用いて内容分析を行った。具体的には、①面接によって得られた語りを、対象者ごとに逐語録を作成し、逐語録全体を把握できるまで繰り返し精読した。②インタビューガイドに即して「家庭科教員になった動機」「生徒の反応と影響」「女性の教員養成時の同級生と家庭科教員の反応と関係」「女性の教員養成時の同級生と家庭科教員以外の周囲の反応」「人間関係以外の困難」の5点で整理し、内容的にまとまりのあるデータに区切った。A大研修生には、家庭科教員を「中断した理由」「継続した理由」の2点を追加した。③逐語録の内容を損なわないよう要約し、マトリックス表を用いて分類した。このとき、明らかに本研究とは関係ないと思われるものは分析の対象から外した。④それぞれに共通するテーマを命名し、それぞれについて分析した。

6. 真実性の確保⁵⁹

データの分析過程において、研究者の解釈の偏りを小さくするため、教育分野の学識経験者1名、家庭科教育分野の学識経験者1名、保健学専攻の研究者2名、大学院生と解釈と分類について議論を重ね、信用可能性と明解性および確認可能性の確保を行った。更に、質的研究に精通

した指導教員から定期的に指導を受け、真実性の確保に努めた。

IV. 倫理的配慮⁶⁰

調査対象者へは、調査依頼時に本研究の目的、方法、個人情報保護方針、及び、本研究が自由意志に基づく参加であり、参加拒否により不利益を被ることは一切ない点についての説明を口頭並びに文書で行い、同意の得られた者のみを対象とした。インタビュー実施は、プライバシーが確保でき、かつ対象者が希望する場所で行った。記録は、対象者の同意を得て IC レコーダーによる音声録音を行った。音声録音の同意が得られない場合は、その場で書き留める許可を得た。録音および記録した内容は、個人が特定できないよう全て ID 化し、個人が特定できない形でデータの管理・解析を行い、研究終了後は破棄することを説明した。また、調査の途中であっても不都合がある場合は中止できることを事前に説明した。本研究は、香川栄養学園実験研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した。【承認番号第 236 号・平成 25 年 3 月 13 日】

V. 結果

先に述べた 5～7 の焦点から、それぞれ見いだされたテーマは【】の中に表記した。対象者の語りは、「ゴシック体」で表した。以下、それぞれのテーマと語りについて、説明する。

1. 元・家庭科教員と継続者との比較

1.1 家庭科教員になった動機

家庭科教員になった動機に関するデータを分類した結果、【逃避】【受

動的】【男女平等への共感・風潮】【未知への好奇心】【前の教科に対する物足りなさ】【家庭科の重要性・可能性】【生育歴・家族の影響】の7つのテーマが見出された（表 1-2）。

元・家庭科教員の特徴は、現実からの【逃避】の語りが継続者よりも多く、元・家庭科教員にのみあったテーマは、校長からの指示で【受動的】に研修に参加したものと、【未知への好奇心】であった。さらに、【生育歴・家族の影響】をみると、性別役割意識が強い家庭環境で育った語りが継続者よりも多く見受けられた。

一方、継続者の特徴は、【男女平等への共感・風潮】の語りが多く、継続者にのみあったテーマは、【前の教科に対する物足りなさ】、【家庭科の重要性・可能性】であった。

両者に共通していたテーマは【生育歴・家族の影響】であり、結婚・子どもの誕生がきっかけだと語った。そのほか、病気のため将来の夢を断念し、高校受験の失敗という経験から、「人と違ったことをすれば自分は勝てることを学」び、家庭科教員に転科することに全く抵抗を感じないと語った継続者がいた。

以上の結果から、家庭科教育に対する関心には、両者に大きな違いがあり、元・家庭科教員の場合は、強い関心を持っていた訳ではなかった。一方、継続者の場合は、研修以前からこれまで教えていた教科に限界を感じ、家庭科教育に強い関心を持っていたことだった。

1.2 中断した理由

中断した理由は、【受動的】、【女性家庭科教員との関係】、【業務が大変】、【他教科への異動】、【家庭科への軽視】の5つのテーマが見出され

た（表 1-3）。

中でも多く語られていたのは、【業務が大変】と【他教科への異動】である。2003年（平成15年度）から高校の教育課程に新設された情報科の教員免許を取得するため、異動したと語った。

そのほか、異動先の学校の事情や家庭科のカリキュラムが変わったこと、家庭科教員に転科したのは一時的なものだという、【受動的】な理由も多く語られた。

家庭科に転科し、周囲の【家庭科への軽視】があることを知り、【女性家庭科教員との関係】において、男性家庭科教員の実践を見た女性家庭科教員から「家庭科ではない」「小学生以下レベル」だと批判され、認めてもらうことができず、良好な関係を築けなかったことを理由にあげた中断者もいた。その他、女性から家庭科教員の経験が少ないにも関わらず「男だから」と役員を押しつけられた経験を語り、負担だったことも確認された。

継続者にもこうした「男性役割の押しつけ」があるのかどうか、次に分析を進めていく。

1.3 継続した理由

継続した理由には、【家庭科が好き・やりがいがある】、【担任を続けたい】の2つのテーマが見出された（表 1-4）。

実際に家庭科を教えてみると、家庭科はすべての教科の「扇の要」であり、生活体験が減少している今の子どもたちにとって、家庭科のもつ役割は非常に重要であるとの認識を持っており、元の教科よりも、【家庭科が好き・やりがいがある】と感じていた。また、担任を継続する手段

をあげた語りもあった。

1.4 生徒の反応と影響

生徒の反応には、【驚き】【不安】【受容】【「家庭科」らしくない】【存在自体が教材】の5つのテーマが見出された（表 1-5）。

元・家庭科教員と継続者に共通していたのは、【驚き】、【受容】、【「家庭科」らしくない】の3つだった。

生徒は、最初は男性である家庭科教員に【驚き】、エプロン姿の男性教員を「かわいい」と言い、からかいの対象にした。しかし、生徒の多くは、すぐに男性を家庭科教員として【受容】したとの語りを得た。

元の教科をベースに家庭科を教えていたためか、生徒から【「家庭科」らしくない】と言われた経験をもつ者もいた。

継続者にのみあったテーマは、男性が家庭科を教えられるのか【不安】だと言われたことや、男性の家庭科の教員がいるだけで、ひとつの教材になるといった【存在自体が教材】であった。継続者は、生徒から不安に思われることがあっても、それを跳ね返すだけの手応えを感じていたことから、自身の存在が生徒にとって、この上ない教材になっていることに自信をもっていたことが示唆された。

1.5 女性家庭科教員との関係

女性家庭科教員との関係については、【拒否】【警戒】【男性役割の押しつけ】【良好・受容】【男性側の気づかい】【気が合わない人もいる】の6つのテーマが見出された（表 1-6）。

両者とも、家庭科教員としてのプライドからか、女性家庭科教員から

【拒否】される反応があった。しかし、「わからないことを質問しても丁寧に教えてくれた」という【良好・受容】もあり、相対する語りがあった。しかし、やや元・家庭科教員に【拒否】の語りが多く見られた。

元・家庭科教員にのみあったテーマは、女性家庭科教員と2人きりにならないように【男性側の気づかい】をしたことや、女性家庭科教員からの【男性役割の押しつけ】があった。

継続者にのみあったテーマは、【警戒】、【気が合わない人もいる】だった。

このことから、男性家庭科教員は、女性家庭科教員から最初は拒否・警戒されるが、次第にその態度は変わり、両者ともに、女性家庭科教員とそれなりに良好・受容な関係を築いていたと考えられる。

1.6 女性家庭科教員以外の周囲の反応

女性家庭科教員以外の周囲の反応には、【反対】【笑いが起こる】【転科した理由】【驚き】【受容・応援】【わからない】【広告塔】の7つのテーマが見出された（表 1-7）。

元・家庭科教員と継続者との共通点は、研修そのものに反対する語りや、家族や周囲の家庭科に対する軽視から、男性が家庭科に転科することの反対の他に、保護者からの男女共修家庭科に対する【反対】があった。一方で、男性が家庭科教員に転科することに対する【受容・応援】もあり、また、【広告塔】として活動することを要求されており、周囲の人々は、男女共修家庭科を好意的に迎えてもいた。当時は男性家庭科教員に対し、また、男女共修家庭科に対し、一部の人から十分な理解を得られず、様々な感情があったと推測される。

元・家庭科教員にのみあったテーマは、【転科した理由】であり、継続者にのみあったのは、【笑いが起こる】、【わからない】だった。

1.7 人間関係以外の困難

人間関係以外の困難には、【特定領域の教授】【実技の力不足】【学習期間の短さ】【女子向き家庭科の名残】【助手がない】【ネットワークがない】【特にない】の7つのテーマが見出された（表 1-8）。

元・家庭科教員と継続者との共通点は、研修時に苦労した被服に関する【実技の力不足】だった。これまで被服製作どころか裁縫の経験がなかったため劣等感を抱くなど、継続者は辛い思い出として記憶していた。しかし、「毎年、最初の授業の時には、生徒に（手作りの）コーデュロイのベストを着て見せ」ており、研修生の多くは、生徒に作品を見せられる、または、教えられる一定程度の技術を習得したものと思われる。事実、教員になってから同じ事で悩む語りは、両者ともなかった。

元・家庭科教員にのみあったテーマは、保育分野に関する【特定領域の教授】と、「選択科目の被服を男子が学ぼうとすると、（男子の）型紙が少なく大変」だとする【女子向き家庭科の名残】の2つだった。保育分野に関する教授困難について、出産経験のない女性でも保育の分野を教えられるのだから教えられない訳ではないとわかっているにもかかわらず、出産経験のできない「男性ならでは」の困難だと捉え、「飛ばした」と語った。

継続者にのみあったテーマは、1年間という【学習期間の短さ】や、業務が忙しいのに【助手がない】、【ネットワークがない】があり、継続しているからこそその悩みがあった。

2. 世代別による比較

2.1 家庭科教員になった動機

世代別の動機では、【逃避】【受動的】【男女平等への共感・風潮】【未知への好奇心】【前の教科に対する物足りなさ】【家庭科の重要性・可能性】【生育歴・家族の影響】【男性家庭科教員の可能性】【教員になる手段】の9つのテーマが見出された（表 1-9）。

第二・第三世代にあった【未知への好奇心】【前の教科に対する物足りなさ】は、第四世代から語りが消えてなくなった。この第二・第三世代は、他教科から転科した教員であるため、この2つのテーマが第四世代からなくなったと考えられる。

第四世代から新たに加わったのは、【教員になる手段】であった。その実情は、家庭科に魅力を感じて家庭科の教員を志望したのではなく、あくまでも教員になる手段として利用したに過ぎていなかった。

最初から【男性家庭科教員の可能性】を感じ、家庭科教員を志した教員は、13人中3人であり、第四世代に1名、第五世代に2名だった。

【生育歴・家族の影響】について、第二・第三世代は、男性教員自身が家事をしても、父親が家事をする語りは一切なく、そのような父親が現れるのは、第四世代からだった。第六世代になると、「アニメや通っていた保育園で男性保育士の存在」に憧れたという語りがあり、従来の男性モデルとは違う男性モデルが身近にいたことが示された。さらに、第五・第六世代は男女共修家庭科の履修者であるため、家庭科教員を志望した動機において、家庭科の授業で褒められた経験を挙げていた。その影響だろうか、従来、女性の領域だと思われていた服飾関係の仕事に関心をもった教員が数名存在していたことから、「家庭科教員」という職業

も、ごく自然に職業の選択肢の一つとして捉えていたと考えられる。

2.2 生徒の反応と影響

生徒の反応と影響は、【驚き】【認識がない】【不安・不信・拒絶】【わからない】【受容】【「家庭科」らしくない】【性役割の強化】【職業選択の質問】【多様な生き方のモデル・理解者】の9つのテーマが見出された(表1-10)。

どの世代でも共通してあったのは、【驚き】【受容】【多様な生き方のモデル・理解者】の3つのテーマである。

生徒は男性家庭科教員に初めて出会った時は、男性の家庭科教員が存在することに【驚き】、そもそも男性の家庭科教員が存在することに【認識がない】ため、自習監督や教室を間違えているのではといった反応を示すが、すぐに【受容】したことが示された。第二～第四世代によれば、現在、生徒達の家庭科教員に対する女性イメージは以前より少なく、また、すでに男性家庭科教員に教えてもらった経験のある生徒が存在していることを語る者がいた。

保育分野の教授に関する生徒の反応は、第三世代以降は、女子生徒からも男性家庭科教員が教えることに違和感なく、【受容】したと言う。そして、男性家庭科教員は、女性家庭科教員が教える場合について、男子生徒は「他人事に捉えがちになる」「理想論に感じる」が、男性家庭科教員の場合は、保育分野以外でも、性別を理由に言い訳することができなくさせる効果がある、と語った。

その他、家庭科の先生になった教え子(男性)がいることや、生徒から「先生なら分かってもらえるのでは」と、自らの性について打ち明け

られた経験をもつ教員もおり、男性家庭科教員は【多様な生き方のモデル・理解者】になっていた。

しかし、女子生徒から「私より上手かったら嫌」といった発言や、スカートをはいた経験がないのに教えられるのかといった【不安・不信・拒絶】の語りが第三世代を除く全ての世代にある。【性別役割の強化】において、女子生徒から「男性家庭科教員と結婚したら家事しなくて良い」と言われた経験をもつ男性家庭科教員がいた。このことから、偏ったジェンダー観をもつ女子生徒がいることが確認された。

【「家庭科」らしくない】に関する語りは、第二世代にのみあった。前述したように、第二・第三世代は他教科から転科した教員だからである。

2.3 女性の家庭科教員養成時の同級生と家庭科教員との関係・反応

女性の家庭科教員養成時の同級生と家庭科教員との関係・反応は、【拒否】【警戒】【男性役割の押しつけ】【疎外感】【良好・受容】【男性側の苦手意識・気づかい】【女性でもできない】【気が合わない人もいる】の8つのテーマが見出された（表 1-11）。

【拒否】【警戒】のテーマは、第二・第四世代にあったが、第五世代から、このテーマに当てはまる語りが消えた。

世代に関係なく、教員養成時に、「調理実習では足を引っ張り、被服実習では採寸が出来ず、女子の集団に入っていくのが辛く、また、女性同級生も腫れ物にさわる感じだった」ため、【疎外感】を感じた教員もいれば、自分から意識的に話しかけ、【良好・受容】な関係を築く努力をした教員もおり、世代別というよりも個人差であることが考えられる。

第五・六世代は、女性から特別視されることがないとしながらも、「ゼミの代表者を決める時、男子がやるという暗黙の空気のなものがあつたり、家庭科の教員としての経験が少ないにも関わらず、「何か発言を求められたり、役員を押しつけられたりする」といった【男性役割の押しつけ】があつたことを語つた。このような出来事は、第三・四世代でも同様の語りを得ている。

第三世代のある教員は、教員免許を取得するためのスクーリングに通つていた際、【女性でもできない】ことに気づいた、と語つた。この世代は、男女共修以前の世代である。スクーリングは、「女性なら誰でもできる」という自身のジェンダー規範に疑問をもつきっかけになつたと考えられ、男女共修家庭科の意義を確認するものであつた。

2.4 女性の家庭科教員養成時の同級生と家庭科教員以外の周囲の反応

女性の家庭科教員養成時の同級生と家庭科教員以外の周囲の反応は、【反対】【笑いが起こる】【職業選択の質問】【驚き】【受容・応援】【わからない】【認識がない】【広告塔】の8つのテーマが見出された(表 1-12)。

家庭科に対する軽視やジェンダー・バイアスからくる家族や周囲からの【反対】があり、特に、第二・三・四世代に見られた。家庭科教員になることには反対されてはいないものの、男性でも家庭科教員が務まるのか疑問視する語りが、第五・六世代にはあつた。

その他に、男性でも家庭科教員になれることに【認識がない】ため、反対する両親が存在していた。しかも、学校現場において、男性が家庭科教員になれることを認識していない教員が現在も数多く存在していることも示された。

2.5 人間関係以外の困難

人間関係以外の困難には、【特定領域の教授】【実技力の不足】【学習期間の短さ】【施設不足】【採用】【特にない】【女性向き家庭科の名残】【助手がない】【男性が少ない】の9つのテーマが見出された(表 1-13)。

出産・母乳に関する【特定領域の教授】による困難は、第三世代にあったが、第四世代以降は性別を言い訳にしておらず、積極的に学ぼうという姿勢があり、一人の教員として未熟であることに悩む姿が見受けられた。

その他、第四世代以降は、男性が家庭科教員を目指したとしても、男性が入学可能な家庭科教員養成の【施設不足】があり、選択肢が限られていた。そして、入学後についても、浴衣は女性物しか作らなかったため、着付けの時は、男子は見学者扱いであり、【女性向き家庭科の名残】が存在していたと語った。多くの高等教育は、未だに家庭科を学ぶ男性は存在しないと見なされており、男子は学習の機会を奪われていると考えられる。

第四世代の一人は、【採用】試験の段階においても、男性だけ「質問が露骨に違った」と語り、不利である可能性を示唆していた。事例は一つしかないが、採用段階で性別を理由に振り落とされてしまうことは、問題である。これからのことから、個人の力では解決できない困難が男性には存在することが示唆された。

VI. 考察

1. 元・家庭科教員と継続者について

1.1 家庭科教員になった動機について

元・家庭科教員にのみあったテーマは、【受動的】と【未知への好奇心】であり、【逃避】については継続者よりも多くの語りが得られたことから、元・家庭科教員は、家庭科教育に関心があり、教科の重要性を認識した上で「家庭科」に転科した訳ではないと言える。この結果は、堀内³⁶や井上⁶¹が調査した男性家庭科教員の動機と共通している。井上の調査対象者は、立身出世のため、比較的合格しやすいという理由から文検家事科（家庭科）の教員免許を取得しており、堀内の調査対象者は、最初から家庭科教育に関心があった訳ではない。しかし、養成課程での家庭科の学びが「ステレオタイプな〈男〉としてのジェンダー役割を脱出するための契機」になったと述べており、家庭科は性別に関係なく、重要であることを学び取ったと考えられる。

【生育歴・家族の影響】では、結婚・子どもの誕生といった家族のライフイベントがきっかけだとする語りが元・家庭科教員と継続者に共通しており、先に述べた堀内と小高³⁷が研究対象にした男女共修家庭科以前に家庭科教員を目指した男性教員の南野氏の動機と一致していた。男性が積極的に家事に取り組むようになるきっかけの多くは、「わが子の誕生」である⁶²。核家族化が進み、男性でも家事や子育てに関わらざるを得ない状況になり、加えて、国際婦人年を迎え、世の中の男女のあり方についての議論が社会で高まっていた当時の状況から、家庭科に男性が興味をもつようになったのは、必然であったと考えられる。

その他、【生育歴】の中で、家庭科教員になる抵抗感を持たなかった理由について、病気によってスポーツ選手の夢を断念し、高校受験を失敗した経験から、「人と違ったことをすれば自分は勝てることを学んだ」

と語った継続者がいた。

「男らしさ」の形成について多賀⁶³は、スポーツは「男性たちに、『男はスポーツに秀でていなければならない』という社会的圧力をもたらす」作用があると述べ、浅井⁶⁴も「勉強での競争やスポーツでの勝負は、“男らしさ”を体得するためのトレーニングとしての側面を持っている」と論じている。

よって、継続者の「競っては負け、競っては負け」てきた経験は、継続者の「男らしさ」が傷ついた出来事であり、男と「違ったことをすれば自分は勝てることを学んだ」ことにより、自分が勝てる場所として、自身の「男らしさ」が守られる家庭科を選んだという側面が考えられる。この継続者は、婚姻の際、姓はどうするのか決定する時に、妻が継続者の姓を選択すると申し出てくれたので、「内心ほっと」したという。しかし同時に、男女平等を教える立場として、そのように感じるものが「すごい嫌」だと語った。この継続者の家庭科教員になった動機は、「社会科の教員なら格好つける必要があるが、家庭科なら飾らなくてもいい。自分を出せ」る、と発言した。この継続者は、家庭科教員に転科するのを機に、自身の中にある「男ジェンダー」から解放され、「自分らしく」生きようとはしているが、本当の意味での「男ジェンダー」からの解放には、まだ至っていないことが考えられる。

1.2 中絶した理由について

小高の研究によると、家庭科教員養成事業で家庭科に転科した教員は、いずれは元の教科に戻ってもらう取り決めがあったことが述べられている。本研究においても、「家庭科教員は一時的なもの」や「いずれ戻るこ

とが前提」だったという語りは、【受動的】のテーマの中で多くあり、最初から継続するつもりがなかったことを確認する結果となった。

元・家庭科教員は、家庭科教員としての身分は「一時的なもの」で、「いずれ戻ることが前提」であり、さらに家庭科に対して漠然とした好奇心程度だった。子どもの誕生を機に家事をするようになっていたこともあり、恐らく、元・家庭科教員の中に「家事・育児（家庭科）は誰でもできる」という家庭科への軽視が少なからずある可能性が示唆された。

1.3 継続した理由について

継続者から、実際に家庭科を教えてみると、元の教科より【家庭科が好き・やりがいがある】と感じた語りが多くあった。

継続者の動機をみると、始めから家庭科に対する意識が非常に高かった。継続者の中には、「共修以前から、家庭科教員になる手だてを校長に相談」していたほどである。県と「家庭科教員は一時的なものである」という取り決めがあったとしても、最初から戻る気がなく、さらに、元の教科よりも家庭科にやりがいを感じたことが、家庭科教員を継続する大きな要因だと考えられる。

1.4 生徒の反応と影響について

生徒は、最初は男性である家庭科教員に【驚き】の反応を示すが、すぐに【受容】していた。「未だに、食事に誘われたり、結婚式に呼ばれたりしている」という語りが示すように、元・家庭科教員と継続者の両者とも、生徒との関係は良好だったと推測される。

生徒から【「家庭科」らしくない】と言われた男性家庭教員がいた。この生徒達が言う「家庭科らしさ」とは、何を意味するのか明確にはできないが、これまでのものとは違う授業が展開されていたことは、確かである。現在も「家庭科＝女性」のイメージは根強いことから、男性家庭科教員が行う授業は、「女子向き家庭科」とは違っていただけと考えられる。男性家庭科教員は従来の家庭科イメージを変え、ジェンダーの再生産をさせない家庭科を創造する可能性があることが示唆された。家庭科で教える内容は、学習指導要領である程度、指定されているにも関わらず、男性家庭科教員の家庭科の授業は、女性家庭科教員とどう違うのかについて、今後、授業実践を分析していく必要があると考えられる。

生徒の反応で、継続者にのみあったテーマは、【不安】【存在自体が教材】があった。継続者は、自分の存在自体が教材であるとの自負がある。だからこそ、生徒から不安を持たれたとしても、それを払拭できるのであり、それが、家庭科教員の継続を後押ししていると推測される。

1.5 女性家庭科教員および周囲の反応について

【拒否】と【受容】の語りは、元・家庭科教員と継続者に共通していた。

武藤⁶⁵は、1991年に東北6県の高等学校の家庭科教員を対象に、男女共修家庭科の実施に賛成かどうかを調査した結果、20%の教員が賛成していないことを明らかにしている。「家庭科の男女共修をすすめる会」には、多くの家庭科教員が会員として参加していたが、一部の家庭科教員から、家庭科の男女共修化への賛同が得られない状況下でのスタートだったと考えられる。さらに、当時の女性家庭科教員にとって、1年間の

研修で「促成栽培」された男性家庭科教員を認めることは、家庭科教員のプライドとして受け入れられず、これまで女性の領域とされた家庭科に参入する「変わり者」として、男性家庭科教員を【警戒】したと考えられる。

元・家庭科教員の一人は、元の教科に戻った最大の理由に、女性家庭科教員から授業内容を否定され、「『犬猿の仲』になった」ことを挙げた。確かにこの出来事は、元・家庭科教員にとって、これまでの教員としてのプライドを傷つける屈辱的な出来事であり、家庭科教員を中断する要因になったと考えられる。しかし、授業内容を否定されたのなら、先輩である女性家庭科教員に、どういう内容にしたら良いのか、教えを請うても良かったのではないだろうか。しかし、それには至らなかった背景は、女性に頭を下げることができない、元・家庭科教員の「男ジェンダー」によるものと推測される。この教員の家庭科教員になった主な動機は、困難校からの【逃避】であり、家庭科に対する意義や強い思い入れは持ってはいないと語っていた。そのため、周囲から「何だ、有名大学を出て家庭科かよ」と言われても、それを跳ね返すだけの情熱は持つておらず、また、教科として地位の低い家庭科の教員と同列に見られることは、「男ジェンダー」に縛られている元・家庭科教員にとって、非常に耐えられないことだった、と推測される。このことから、元の教科に戻ったのは、必ずしも、女性家庭科教員と良好な関係が築けなかったことが最大の原因だとは言えないのではないだろうか。この元・家庭科教員によれば、生徒には受け入れられており、家庭科を教えるだけの技量は持ち合わせていたと考えられる。もし、彼が従来ジェンダー規範に捕らわれず、新しい家庭科観を持っていれば、職場の異動が可能なことを利用して、新たな職場で家庭科教員を継続していた可能性が高いと考え

られる。

新しい本当の意味での「男ジェンダー」から解放されてはいないものの、「男ジェンダー」に縛られていない継続者を始めとする他の継続者と比較すると、家庭科を教える技量があるかどうかよりも、ジェンダー規範から解放され、「家庭科＝女性」という偏見がなくなり、家庭科に対する意義を見出しているかどうかが大きな要因になることが示唆された。

男性家庭科教員は【広告塔】として活躍し、周囲の人は概ね家庭科の共修化を好意的に迎えていた。しかし、家庭科教員の中でも一部の人から男性家庭科教員は歓迎されておらず、周囲においても、男性家庭科教員への風当たりは当時、強かったものと考えられる。その中でも、男性家庭科教員を継続したと言うことは、継続者の家庭科への思いは並々ならぬものだったと推測される。

2. 世代別による比較

2.1 家庭科教員になった動機について

【生育歴・家族の影響】について、第四世代から父親が家事をする語りが現れ、さらに第六世代では、男性保育士の存在を知り、従来の男性像に変化が現れていることが示された。第五・第六世代は、男女共修家庭科を経験した世代であり、家庭科の授業で褒められた経験があった。そのためこの世代は、これまで女性の領域だと思われていた職業に抵抗感を持っておらず、「家庭科教員」という職業についても、自然に選択肢のひとつとして捉えていたと考えられる。実際に筆者は調査時に、この世代から、男性と言うだけでなぜ家庭科教員になった理由を聞かれるのか、その質問自体が古いのではないかとの指摘を受けた。この世代にと

って、「性別に捕らわれない多様な生き方のモデル」は、ごく普通に存在しており、自身も当たり前を選び取っているのである。松下⁵²は、男性養護教諭が出現した要因について、「学校教育の中で、家庭科の男女共修、男女混合名簿の導入、男女共生教育、性教育などが実施されてきた一つの成果なのかもしれない」と述べている。原田⁶⁶もまた、「男らしさ」という社会的抑圧が減少している背景として、中学・高校での家庭科の男女共修化があると分析していることから、両性の平等の象徴である男女共修家庭科の成果は大きく、確実に人々のジェンダー意識は変化していると言える。

2.2 生徒の反応と影響について

多くの生徒は、男性家庭科教員を【受容】していたが、女子生徒による【不安・不信・拒絶】の語りが、第三世代を除く全ての世代にあり、中には生徒から、「オトメン^b」「草食系男子^c」なのかと聞かれた男性教員がいた。これらの言葉は、「男らしくない」ネガティブなニュアンスで使用されており、拒絶とまではいかないが、男性家庭科教員に対して、違和感、あるいは抵抗感を表すことで、同性愛嫌悪（ホモフォビア）を表現していたことが示唆された。こうした偏見は、国内外の看護研究でも報告されており⁵⁴⁵³⁵⁵、北林ら⁶⁷は、「このような偏見は、看護に参入しようとする男性を阻む要因となり好ましくない」と論じ、女性職に男性が増えない要因になっていることを明らかにしている。偏見をなくす

^b 「オトメン」とは、もともとマンガから生まれた言葉。趣味思考は乙女チックながら、対外的には男らしく振る舞うのが特徴。

^c 「草食系男子」とは、家庭的で優しいが、恋愛やセックスに消極的な40歳前後までの男性のこと。(bcともに原田曜平:女子力男子 女子力を身につけた男子が新しい市場を作り出す.p17-18, 宝島社, 東京(2014)より参照)

ことは、人権を守る意味でも必須である。生徒のみならず、女性家庭科教員にもこういった偏見があると考えられることから、人々のジェンダー平等を目指す教育の必要性があると言える。

偏見ではないが、女子生徒から「男性家庭科教員と結婚したら家事しなくて良い」と言われた経験をもつ男性家庭科教員がいた。この女子生徒は、家事はどちらか一方がやるものだという刷り込みがあり、これまでの、どちらか一方の性に役割を決めようしてきた考え方から抜け出すことができていないと考えられる。

2.3 女性の家庭科教員養成時の同級生と家庭科教員との関係・反応について

第三・第四・第五世代から、女性家庭科教員からの「男性役割の押しつけ」があったと語られた。女性教員は、女性ばかりの領域に参入した男性教員を、歓迎と配慮の意味で「男性を立てた」のかもしれない。だがそれは、「男性役割の押しつけ」であり、「女ジェンダー」からくる行動だと考えられる。女性家庭科教員のジェンダー観は偏りがあるのかどうか、調査することが不可欠であると考えられる。

教員免許を取得するためのスクーリングに通っていた際、「女性でもできないこと」を知った第三世代は、男性が家庭科を学んでいない世代である。恐らく、第二・第三世代の女性も、「男性でもできる人がある」ことに気づき、「できる・できない」は性別で判断できないことを知る良いチャンスだったと思われる。筆者も、高校で家庭科の非常勤講師として勤務した際、男子生徒から同様の感想を聞いた経験がある。子ども達の生活経験はますます減少しており、今後、性別による生活経験の差は

さらに少なくなっていくと推測される。このことは、様々な意味で問題ではあるが、どんな教科においても性別に関係なく、共に学び合える環境を整えることが重要である。

2.4 女性の家庭科教員養成時の同級生と家庭科教員以外の周囲の反応について

男性が家庭科教員になることに反対する理由に、男性でもなれることについて【認識がない】ため、両親をはじめ、学校関係者も認識していないことが示された。第五世代から、男性家庭科教員の存在をアピールするための【広告塔】になった語りはなくなり、男性も家庭科を職業の選択肢の一つになってはいるが、まだまだ広告塔として PR の必要性があると考えられる。

その他、周囲による家庭科への軽視があったが、これは、元・家庭科教員が中断した理由の一つに数えられているが、それ以上に家庭科として非常に重要な問題である。家庭科はなぜ、軽視されるのだろうか。

木村⁶⁸は、「男性の役割や男性の特性とされるものはことごとく女性のものよりも上位におかれて」おり、例として、「男性の従事する社会的労働は女性の役割とされる家事労働よりも重要」だとし、「男性-女性のタテの序列化は、ひとびとの意識の中に目にみえないかたちで存在する」と指摘している。堀内³⁶が1997年に行った小学校の教員に対する調査によると、家庭科教員は、〈母〉のメタファーを持つと述べている。また河村¹も、教育学部に通う生徒の家庭科教員のイメージは、「ちょっと勉強した主婦」であり、「学問的な知的な雰囲気を出すにはいた」らず、「技能に習熟しているわけでもなさそう」と分析している。さらに河

村は、「家事に関する料理や裁縫が一通りなんでもできることは、当たり前のこと」なので、家庭科教員は生徒から「上級の主婦レベル」だとみなされている、と述べている。家庭科は本当に、「上級の主婦レベル」のことしか教えていない教科なのだろうか。家庭科の教科書を生まれて初めて見た重松清⁶⁹は、家庭科教育について、次のような感想を述べている。「…まいった。おもしろいのだ、すごく。料理や裁縫や掃除といった“家事”作法のレベルを超えて、高齢化社会をどう生きるか、消費者としての意識をどう高めるか、環境保護にどう取り組むか、など“市民”教育の範疇にまで踏みこんで」いる専門教科であることに気づき、「もしかしたらこの教科は現役の中高生よりも、むしろ（略）家庭科を知らない（略）われらの世代にこそ必要なのかもしれない」と、家庭科の必要性を示している。

家庭科は、「ちょっと勉強した主婦」になれる教科では終わらない、人と人がどうより良く生きるかを考える専門性のある教科である。だが、そのように捉えている者は少なく、そういった認識をもたせる授業をしてこなかった家庭科教員の教育実践の結果であり、反省すべき点である。「ちょっと勉強した主婦」から脱した教育実践を確立し、家庭科の地位を向上させることが、これまで女性の役割とされた領域全体の地位を高めることにも繋がると考える。そして、「男性の特性とされるものは女性のものよりも上位」だと思っている人々の差別意識を変えるため、男性家庭科教員の更なる参入が必要不可欠であることが示唆された。

2.5 人間関係以外の困難について

【特定領域の教授】による困難は、第三世代と第五世代にあったが、第五世代は積極的に学ぼうという姿勢を見せていた。男性が家庭科を学

んでいない世代は、「出産・母乳は女性の聖域」というジェンダー規範が強く、また、育児に積極的に関わる男性が少なかったこともあり、男性家庭科教員にとって、保育分野を教えにくい領域だと捉えていたことが推測される。

出産・育児の分野を男性家庭科教員が教える教育的効果については、2.2「生徒の反応と影響」の結果で述べた通りであり、男性家庭科教員の参入によって、これまでの保育分野で不十分だった「男性視点」を補うことができると思う。これまで出産を含む男子の性の学習は対象になっておらず、女子の「月経指導」が中心だったことを、多くの研究者や医療関係者が指摘している⁷⁰⁷¹。学校で月経・妊娠・出産に関し、女子に主眼を置いた教育をすることは、ジェンダーの再生産の機能を持つことになると考えられる。産婦人科医の早乙女⁷²は、確かに男性は子どもを産むことはできないが、生殖機能に関する男性向けの情報が不足していると指摘しており、男子に対する性の学びを保障する重要性についてもまた、多くの研究者が提言している。看護師の世界においても周産期領域における父性看護の必要性は、近年、認識されつつあり⁷³、リプロダクティブ・ヘルス・ライツは、女性だけのものではないと言える。男性養護教諭の研究からも、思春期の男子生徒にとって、男性教員の必要性を述べている。同性同士の気持ちを共感しあい、男子生徒が知りたい正しい情報を伝達するために、また、女子生徒にとって、異性の性を学び、新たな男性モデルを知る機会となるためにも、男性家庭科教員が存在する意義は十分あると確信している。

VI. まとめ

最初に、元・家庭科教員と継続者の特徴を整理する。

1. 元・家庭科教員の動機は、自分の意思ではなく、多くは、現実からの逃避のため、研修を利用していた。以前から家事はしているが、新しい家庭科観は構築しておらず、未知への好奇心からのスタートだった。

家庭科教員を中断した理由は、家庭科教員として勤務してみると、業務が元の教科よりも大変だったこと、周囲に家庭科に対する軽視があること、加えて、女性家庭科教員と良好な関係が築けず、さらに男性役割を押しつけられたことが挙げられる。もともと家庭科教員は一時的なものだったことから、家庭科に対する意義はもっていないことも要因の一つである。新しく情報科の科目が設置され、そちらに異動したことも、中断する大きなきっかけにもなっていた。

生徒との関係は良好ではあるが、家庭科を教えていて継続者ほどの手応えはあまり感じてはいなかった。

女性家庭科教員から拒否され、あまり良好な関係ではなかった。当時、家庭科共修化に反対するものが多く、1年間で促成栽培された男性家庭科教員を認めることができなかつたためと推測される。

周囲の反応は、女性家庭科教員と同様、一部の人から男女共修家庭科の実現に理解が得られず、家庭科に転科した理由を聞かれることがあった。しかし、多くの人は男女平等を象徴する男性家庭科教員を好意的に受け止めており、広告塔として活躍した教員もいた。

人間関係以外の困難として、保育分野に関する教授困難や女性向き家庭科の名残があることをあげ、男性が家庭科を教えることに限界を感じていた。

2. 継続者の家庭科教員になる動機は、社会的な男女平等への共感をも

っていたこと、前の教科に対する物足りなさを以前から感じていたこと、そして、家庭科の重要性と可能性を感じていたからである。継続者は、最初から家庭科に対する関心が、元・家庭科教員よりも高かったのである。

継続した理由は、家庭科教員として勤務してみると、自分の存在自体が教材になっていることを感じ、元の教科よりも家庭科にやりがいを感じたからである。もともと家庭科に対し、関心を持っていたため、途中で辞めるつもりがなかったことも、理由の一つでもある。

生徒との関係は良好である。生徒から不安に思われても男性家庭科教員の存在自体が「生きている教材」だという大きな自信をもっていた。

女性家庭科教員との関係は、最初は警戒されたり拒否されたりもあったが、一緒に勤務していくうちに、受容へと変化した。

周囲の反応は、一部の人から男女共修家庭科について理解が得られず、家庭科に転科する際、周囲から笑われたこともあった。しかし、冷笑ではない。周囲の反応が気にならなかった教員もあり、概ね好意的に迎えられていた。

人間関係以外の困難について、性別を理由にした困難ではなく、研修の短さや業務が忙しい割に助手がいない、家庭科教員同士のネットワークがないことを挙げた。中には特に困難を感じていない教員もいた。

次に、家庭科を学んでこなかった第二・第三世代と、家庭科の相互乗り入れを経験した第四世代、そして、男女共修家庭科を経験した第五・第六世代の3つにわけて世代別による男性家庭科教員の特徴を整理する。

1. 家庭科を学んだ経験のない第二・第三世代の男性家庭科教員は、他教科から転科した教員である。従って、家庭科教員になった主な動機は、先に述べた研修生と同様、現実からの逃避や受動的なもの、前の教科に対する物足りなさや、家庭科という未知の教科への関心からだった。第二・第三世代の多くが、家事は母親を始めとする女性が担当している封建的な家族環境の中で育っていた。

生徒の反応は、男性の家庭科教員に初めて会うため驚きの反応を示すが、すぐに受容し、概ね良好な関係を築いていた。男性教員は、家庭科を教えていて、自分自身を、ジェンダー・フリーの「生きた教材」であるとの認識をもっていた。第二世代は、他教科から転科した教員であるためか、「家庭科らしくない」と言われた経験があった。

女性家庭科教員の反応は、同僚の男性家庭科教員に対し、拒否や警戒の反応を示すことが多かった。

女性の同級生と家庭科教員以外の周囲の反応は、家庭科に転科するのを反対する者も存在した。その理由は、家庭科に対する軽視や、ジェンダー・バイアスからくるものである。しかし、家庭科の男女共修化は多くの人から好意的に迎えられており、生徒だけではなく、社会に対してもジェンダー・フリーの広告塔として、活躍した世代でもあった。

人間関係以外の困難については、研修時において、特に被服実習に関する実技力不足を強く感じていた。第二・第三世代はすでに教員として採用されていたため、ほとんどの男性家庭科教員は、男子が入学できる家庭科教員養成校を探すことに困難を感じていない。しかし、勤務先や養成校の校舎に男子トイレがないことについては、不便を感

じていた。

2. 第四世代の動機は、第二・第三世代にあった逃避、受動的、前の教科に対する物足りなさ、未知への関心ではなく、教員になる手段として自ら家庭科教員を選択し、男性家庭科教員の可能性を感じて、志望していた。家庭内の性別役割分業に変化が訪れており、父親が家事をする姿を見て育った教員がいた。

生徒との関係は、第二・第三世代と同様、存在自体がジェンダーの説得力になっていると感じていた。第三世代までは、出産・母乳に関する教授困難があったが、第四世代はむしろ、男性がこうした内容を教えることに効果があると感じ、男子生徒への教育的効果を認識していた。

この世代もまた、女性の同級生や家庭科教員から拒否や警戒をされ、疎外感を感じる教員がいた。しかし、中には受容され、サポートを受けるまでの関係を築く教員もいた。

女性の同級生や家庭科教員以外の周囲の反応もまた、男性が家庭科教員になることに反対する者もいた。まだ、男性が家庭科教員になれることについての認識はされてはいないが、家庭科の男女共修化は理解され、ジェンダー・フリーの広告塔として活躍していた。

この世代以降、他教科から転科した教員ではないため、男性が入学可能な家庭科教員養成校が見つからず、採用試験の段階において、男性は歓迎されていないと感じる出来事があり、個人の力ではすぐに解決できない困難があることが確認された。

3. 第五・第六世代は、第四世代と同様、男性家庭科教員の可能性を感じて家庭科教員を志望しており、父親が家事をする姿を見て育った教員も多くいた。特に第六世代は、男性保育士との出会いもあり、従来の男性モデルに変化が見られている。第五・第六世代は男女共修家庭科の経験者であるため、家庭科教員や同級生から褒められた経験がある。こうしたことから、家庭科教員は、職業の選択肢の一つとして捉えていると考えられる。

これまでの世代と同様、男性家庭科教員は生徒にとって、ジェンダー・バイアスに囚われない多様な生き方のモデルであると認識していた。

女性の同級生や家庭科教員の関係は、依然として男性は少数で疎外感を感じることもあるが、概ね良好であり、「男性だから」という特別視はされてないと感じていた。

女性の同級生や家庭科教員以外の周囲の反応では、家庭科教員になることに反対する親が依然として存在した。その理由は、家庭科に対する軽視からではなく、男性でも家庭科教員になれることの認識不足からだった。

人間関係以外の困難は、第四世代と同様、男性が入学できる養成校が少なことを挙げた。入学後は、女性ものの浴衣を製作し、着付けについては、男性は見学者扱いである。多くの高等教育機関の家庭科は、それを学ぶ学生に男性は存在しないと見なされていることが確認された。

VIII. 本研究の限界と今後の課題

本研究において、男性家庭科教員ならではの教育的効果は、生徒の「家庭科＝女性」イメージを変え、多様な生き方のモデルとして存在することが示された。しかしそれは、質的調査の結果である。加えて、本研究の対象者は、多くが高等学校の男性家庭科教員であるため、ここで示された結果は、男性家庭科教員の現状として一般化するには、限界がある。

吉野・深谷²⁹や、麓・松井²⁷の先行研究によれば、男性家庭科教員に教えられた経験のある生徒は、「家庭科＝女性」という固定観念を修正することの可能性について示唆しているが、具体的にどういったことが要因で生徒の固定観念を変えたのかについては、明らかにされていない。

このことから今後は、生徒を対象に、男性家庭科教員の教育的効果を再検証するとともに、生徒が「女子向け家庭科」だと感じている場合、教員の性別によるものなのか、それとも取り扱う内容なのかについて、具体的に質的・量的調査の両方を用いて調査を行い、これまでの家庭科の授業内容について検討したい。さらに今度は、中学・高等学校両方の男性家庭科教員の現状を量的調査で検証し、一般化できるようにすると共に、世代ごとの変化について、本研究で示された結果との検証を試みたい。

第2章 女性家庭科教員からみた男性家庭科教員の現状と

男性家庭科教員観 —男性家庭科教員の認識との検証—

I. 目的

女性家庭科教員が考える男性家庭科教員に対するイメージや勤務経験、女性家庭科教員のジェンダー観について調査し、これまで男性家庭科教員が増えてこなかった要因を明らかにする。

また、男性家庭科教員が認識している教育的効果の女性家庭科教員の認識の差異について検証する。

II. 研究方法

1. 調査対象者の抽出方法

全国学校総監に記載されている関東地方の高等学校（東京都 433 校、神奈川県 236 校、埼玉県 203 校、千葉県 185 校、茨城県 129 校、群馬県 83 校、栃木県 81 校）計 1350 校の家庭科教員に宛て、無記名自記式質問紙調査の協力の依頼文書と調査用紙を郵送した。依頼文書には、男性の家庭科教員が受け取った場合を考慮し、本調査の対象者は女性であるため、女性の家庭科教員に渡してもらえるように依頼した。

2014年7月1日から9月30日の期間中に回答を得られた女性家庭科教員 434 名を対象とした。回収率は 32%で、有効回答率は 98.8%であった。

2. 調査内容（表 2-1）

調査の内容は、①属性（年齢・家庭科教員としての教員歴と取得免許・出身大学・勤務校について）、②女性家庭科教員自身について（男性家庭

科教員との勤務経験・男性家庭科教員に対する見解・性に対する平等観・男子生徒への興味をもたせる工夫)、③男性家庭科教員の課題(男性家庭科教員が増えない要因、採用について)とした。

男性家庭科教員自身が認識している教育的効果をはじめとする男性家庭科教員の見解については、女性家庭科教員との認識に差異があるかどうかを検討するため、1章で得られた調査結果を基に調査項目を作成した。また、性に対する平等観については、学識経験者や教育学専攻の研究者、大学院生と議論を重ね、伊藤⁷⁴が考案した「性差観スケール」を採用した。

3. 分析方法

回収したデータの全体像を単純集計によって把握した。変数同士の関連については χ^2 検定を用いた。

「性差観スケール」の回答方法は、「そう思わない」「どちらかというと思わない」「どちらかというと思う」「そう思う」の4件法で行った。本研究では、「そう思わない」を1点、「どちらかというと思わない」を2点、「どちらかというと思う」を3点、「そう思う」を4点として単純集計を行い、その平均値を尺度得点とした。この尺度得点は、得点が高いほど性に対する平等意識が低い傾向があることを示している。

男性家庭科教員に対する女性教員の見解における因子の探索には、探索的因子分析を用いて分析し、信頼性係数(Chronbachの α 係数)によって、因子分析の信頼性の検証を行った。

女性家庭科教員の性差観に影響する要因を探るため、重回帰分析を行

った。性差観と男性教員に対する女性教員の見解との比較については、
t 検定を行い、年代との比較については、多重比較検定を用いた。これ
らのデータの欠損値は、除外した。

これらの統計処理には、エス・ピー・エスエス株式会社 PASW
Atatistics Base 18.0 for Windows を使用した。

Ⅲ. 倫理的配慮

調査対象となる現職の女性家庭科教員には、質問紙の冒頭に本研究の
目的、方法、個人情報保護方針、および、調査は自由意志に基づく参加
であり、個人情報保護されること、答えにくい質問は回答しなくても
良いこと、調査に参加しないことによって、不利益が生じないことを明
記した。任意による回答を依頼し、プライバシー保護のため本人が回答
用紙を封筒に入れて封をし、投函していただいた。

調査によって得られたデータは統計処理を行い、研究以外の目的には
使用せず、すべてのプロセスが終了次第破棄すること、個人情報が特定
されないように慎重に配慮することも、質問紙の冒頭で説明した。

本研究は実施前に香川栄養学園実験研究に関する倫理審査委員会の
承認を得て実施した。【承認番号第 298 号・平成 26 年 4 月 16 日承認】

Ⅳ. 結果

1. 対象者の属性（表 2-2~8、図 2-1）

対象者の平均年齢は 50 歳であり、教員歴は平均 21 年だった(表 2-2、2-3)。なお、教員歴の区分わけは、都道府県等の教育委員会が実施する教員研修の実施体系を参考にした。

出身学部は、家政学部が 67.0%、教育学部が 15.7%、その他の学部は 17.3%だった(表 2-4)。その他の学部の内訳は、図 2-1 の通りである。

勤務形態は、正規採用が 82.9%、臨時採用が 5.5%、非常勤講師が 11.5%だった(表 2-5)。

勤務校について最も多かったのは、校種別では公立学校の 66.0%、学科では普通科の 74.0%であり、共学か別学かについては、共学が 84.7%だった(表 2-6)。

教えている科目で最も多かったのは、2 単位の家庭基礎が 60.8%である(表 2-7)。

2. 男子学生および男性家庭科教員との学習・勤務経験(表 2-8~10、図 2-2)

出身大学は、女子大が 80.6%であり(表 2-8)、男性と学んだ経験は、「ない」が 84.5%であった(表 2-9)。

男性家庭科教員と一緒に勤務した経験が「ある」と答えた女性家庭科教員は 21.7%だった(表 2-10)。この「ある」と答えた教員に、いつ頃一緒に勤務したのか聞いたところ、1992 年に 1 名だったが 1996 年には 7 名に増加した。その後は横ばいとなり、2002 年には 4 名に減少した。だが、翌年から 1 名ずつ増加し、2006 年には 12 名に再び増加した。2009

年は10名とやや減少したものの、以降、増加傾向を示し、2014年においては24名であった（図2-2）。

3. 男性家庭科教員の採用について（表2-11~12）

能力があっても男性だと採用されにくいと思うか聞いたところ、「はい」が8.5%、「いいえ」が64.8%、「分からない」は26.7%だった（表2-11）。

「はい」と答えた理由を自由記述で（複数回答）聞いたところ、最も多かった回答は、「採用する側の問題」で13名、次いで「男性は生活経験が少ない」「家庭科＝女性イメージがある」がそれぞれ8名、「女子生徒の採寸が困難」「女子校だから」がそれぞれ2名、「採用試験に通らない」「時期尚早」「保護者が心配する」がそれぞれ1名という結果だった。（表2-12）。

4. 男性家庭科教員が増えない理由（表2-13）

男性家庭科教員が増えない理由について聞いたところ（複数回答）、最も多かったのが「家庭科教員になりたい男子が少ない」が66.1%、次いで、「家庭科教員養成校が少ない」が58.2%、「授業時間が減少し、採用人数が少ない」が56.3%、「『家庭科＝女性』イメージ」が37.7%だった（表2-13）。

5. 男性家庭科教員に対する見解（表 2-14~18、図 2-3）

家庭科の領域に男性が参入することに居心地悪いと感じるかどうかが聞いたところ、居心地「悪い」と答えたのは、3.4%とわずかだった（表 2-14）。そこで、男性が家庭科に参入することの意識と、男性と一緒に学んだ経験および一緒に勤務した経験とに関連があるか、加えて、年代別と関連があるかについて、Fisher の直説法または χ^2 検定を行ったところ、一緒に学んだ経験は $p=0.357$ 、勤務経験については $p=0.180$ 、年代別は $p=0.605$ と、いずれも有意差が認められなかった（表 2-15、2-16）。

次に、居心地「悪い」と答えたのは、女性家庭科教員自身のジェンダー・バイアスによるものなのか検証するため、男性が参入することに居心地悪いと答えた人と、そうでない人の性差観スケールの得点を t 検定で比較したところ、居心地悪いと答えた人の方が尺度得点は高く、有意差が認められた ($t(412) = 2.669$, $p=0.008$)（表 2-17）。

男性家庭科教員自身が認識している教育的効果とイメージは、女性家庭科教員の認識と差異があるのかを検討する。男性家庭科教員のインタビュー調査の語りから見いだされた 14 項目に、女性看護師が男性看護師に対して期待する項目を参考⁷⁵に「PC 操作等の機器に詳しい」の 1 項目を加えて、合計 15 項目を設定し、それぞれについて「全くそう思わない」「あまりそう思わない」「少しそう思う」「全くその通りだと思う」の 4 件法で回答を求めた。「少しそう思う」「全くその通りだと思う」と回答した割合を合計した結果、上位 3 位は、「『家庭科＝女性』イメージを変えることができる」が 88.9%、「性別を理由にした言い訳をさせな

い」が 81.1%、「男女平等を語る際、説得力がある」が 73.4%であった。男性家庭科教員と女性家庭科教員の認識は、ほぼ共通しており、多くの女性家庭科教員は、男性家庭科教員に対してポジティブなイメージをもっていることが示唆された。

男性家庭科教員のインタビュー調査において「保育分野で女性の体を教えるのが困難」だと回答した教員がいたが、女性家庭科教員の認識では、「保育分野で女性の体を教えるのが困難」は 45.2%という結果だったことから、女性家庭科教員の半数以上は、男性でも保育分野で女性の体を教えることに問題ないと捉えていることが明らかになった（図 2-3）。

男性家庭科教員に対する女性家庭科教員の考えや見解に関する因子構造を調べるため、因子分析を行った。因子負荷量が 0.4 に満たない 3 項目「性別による特徴はない」「先駆的な学校であるイメージが得られる」「パソコン等の機器に詳しい」を除いた 12 項目について、一般化最小二乗法による因子抽出と直接オブリミン回転を用いて分析を行った。その結果、第一因子は、伝統的な男性主導的な見解を示す内容の 3 項目が集まったため、「伝統的な男性主導型因子」と命名した。回転後の固有値は 1.900 で、信頼性係数は 0.746、解釈度得点は 1.9033 であった。

第二因子は、男性家庭科教員に対する困難や不安をイメージや見解を示す内容の 5 項目が集まったため、「ネガティブイメージ因子」と命名した。回転後の固有値は 2.456 で、信頼性係数は 0.787、解釈度得点は 2.0505 であった。

第三因子は、男性家庭科教員の教育的効果や好意的なイメージを示す

内容の 4 項目が集まったため、「ポジティブイメージ因子」と命名した。回転後の固有値は 1.954 で、信頼性係数は 0.756、解釈度得点は 3.0586 であった。以上の結果から、伝統的な男性主導型因子、ネガティブイメージ因子、ポジティブイメージ因子の 3 因子に明確に区分され、信頼性係数 α は 0.746~0.787 であり、内的整合性が認められた (表 2-18)。

このことから、女性家庭科教員の質問紙調査で示された 3 つの因子は、男性家庭科教員のインタビュー調査で得られた結果と、矛盾なく一致した。

6. 女性家庭科教員のジェンダー観 (表 2-19~20)

女性家庭科教員の性差観に影響する因子を探るため、重回帰分析 (ステップワイズ法) を用いて、従属変数を性差観スケールの平均値 (尺度得点) とし、独立変数は、属性の 7 項目、女性家庭科教員自身についての 9 項目と「男性家庭科教員に対する女性家庭科教員の見解」を因子分析した 3 因子を含む合計 19 項目について、分析を行った。

その結果、性差観に影響していたのは「男性家庭科教員に対するネガティブイメージ因子」(標準化係数 0.215、 $p=0.000$)、「男性家庭科教員が増えない理由で『女性イメージ』がある」(標準化係数 0.154、 $p=0.002$)、「性別によって重要な分野・領域があると思う」(標準化係数 0.326、 $p=0.000$)、「男性家庭科教員に対する伝統的な男性主導型因子」(標準化係数 0.151、 $p=0.001$)、「勤務校が私立」(標準化係数 0.156、 $p=0.004$)、「年齢」(標準化係数-0.006、 $p=0.017$)、「男子生徒から『家庭科の教員

になりたい』と言われた経験がある」(標準化係数 -0.139 、 $p=0.020$)、
の7変数であった(表 2-19)。

年齢について、さらに年代と性差観に有意差が認められるかどうかを
検証するために、多重比較(Tukey法)を用いて分析したところ、20
代と50代の組み合わせについて、平均値は20代では2.0200、50代で
は1.7870であり、20代の方に性差観の尺度得点が高く、有意差が認め
られた($p=0.049$)。その他の年代の組み合わせについては、有意差は認
められなかった(表 2-20)。

7. 女性家庭科教員の捉える男子生徒の見解と男子生徒との経験

(表 2-21~28)

生徒の性差によって学習意欲に違いがあるか聞いたところ、「違いがな
い」が80.6%(337名)であり、生徒の性別によって重要な分野・領域
があるかどうか聞いたところ、「ある」は11.0%(44名)だった(表 2-21、
22)。

男子生徒に対して興味を持たせるための工夫について、「している」
人は43.1%おり、その代表例は、「実習・実験」を取り入れる、「『性別
に関係ない・男性も生活的自立の時代だ』と話す」、「科学的・理論的に
説明」、「家事・育児に積極的な男性モデルを提示」などだった(表 2-23、
24)。そこで、性差観スケールを用いて、男子生徒に対して興味を持た
せるための工夫を「している」とそうでない人をt検定で比較したと
ころ、「している」と答えた人の方に尺度得点が高く、有意差が認められ

た。(t (395) =4.266、p=0.000) (表 2-25)。

男子生徒から家庭科教員になりたいと言われた経験について、「ある」と答えたのは 19.8%だった (表 2-26)。そこで、「家庭科教員になりたいと言われた経験」と「男子生徒に対して興味を持たせるための工夫」とに関連があるかについて χ^2 検定を用いて分析したところ、p=0.206 であり、有意差は認められなかった (表 2-27)。

家庭科が好きな男子は変わっていると聞いたことのある経験については、「よく聞く」が 1.9%、「たまに聞く」が 30.5%、「聞いたことがない」67.6%だった (表 2-28)。

8. 男性家庭科教員の様子が書かれた手紙

質問紙の回答とは別に、男性家庭科教員の様子について書かれた手紙を同封した女性家庭科教員がいた。手紙にあった文の引用は、「ゴシック体」で示した。

男性家庭科教員は、幼少期から生活経験を積んできた女子生徒とは違うため、男性家庭科教員の行う授業内容のレベルは低く、「指導や研修をしてもどうにもならない」と書かれていた。その他、理由をつけて授業準備をしない、新年度 10 時間の契約で非常勤講師をお願いしたが一度も連絡せずに辞めてしまったという、社会人としての資質に問われるエ

ピソードを寄せ、もっと「現場を知って欲しい」との思いをぶつけるものがあつた。こうした男性家庭科教員への不満や、家庭科に対する姿勢への疑問の矛先として、「大学で真剣に取り組んで指導しているのか。質が高く、本当にやる気のある人が教員になっているのか」と、家庭科教員養成校に対する疑問や不満も書かれていた。

しかし、もっと男性家庭科教員が増えて欲しい、増えれば家庭科が改善されると期待し、歓迎する気持ちを伝える内容の手紙もあり、質問紙ではあぶり出すことが出来ない現場の声を、間接的ではあるが、知ることが出来た。

V. 考察

1. 男性家庭科教員との勤務経験と、男性家庭科教員が増えない要因について

男性家庭科教員と一緒に勤務した経験のある女性家庭科教員人数の変動をみると、1994年頃から増加し始めた背景は、同年に男女共修がスタートしたからだと考えられる。2002年に減少したのには、2003年にこれまで4単位だった家庭科のカリキュラムに2単位の家庭基礎が出現し、家庭科教員の採用そのものが減少した影響であると考えられる。その後、2003年以降からは増加傾向を示すようになったが、これは、2000年から男女共修家庭科を経験した男性が大学を卒業し、家庭科の教員免許をもつ男性が増えたからである。あくまでもこの人数は、男性家庭科教員と一緒に勤務する女性家庭科教員であり、男性家庭科教員そのもの

の人数を示しているものではない。しかし、こうした家庭科の変遷によって、男性家庭科教員と一緒に勤務する女性家庭科教員もそれに合わせて変動していたことから、男性家庭科教員の人数も、これと同様である可能性がある。このことから、男性家庭科教員が増えてこなかった要因は、2単位の家庭基礎の出現である可能性が高い。しかし、2010年以降、男性家庭科教員との勤務経験の多い女性家庭科教員が増加傾向を示すその意味は、家庭科教員という職業は、男性にとって選択肢の一つになったと考えられ、男性家庭科教員のインタビュー調査を裏付ける結果となった。

女性家庭科教員が捉える男性家庭科教員が増えない要因の主な要因は、「家庭科教員になりたい男子が少ない」である。確かに家庭科教員になった女子と比較すれば、男子はわずかである。しかし、この推移を見れば、家庭科の教員免許をもつ男性は確実に増えており、その認識を女性家庭科教員は持っていないと考えられる。加えて、女性家庭科教員自身も「授業時間数が減少し、採用人数が少なくなった」ことを増えない要因に挙げていることから、国の教育政策が大きなカギとなる可能性があると考えられる。

2. 男性家庭科教員の採用について

能力があっても男性だと採用されにくいと思うか聞いたところ、「はい」と答えた女性家庭科教員は約8%とわずかしかなかった。その理由は、「採用する側の問題」が最も多かったが、性別を理由に挙げた女性

家庭科教員もおり、特に、女子生徒への対応について、男性は家庭科教員に向いていないと捉えている者がごく少数存在した。養護教諭を対象にした調査⁷⁶や、看護師を対象にした調査⁷⁷⁷⁸でも、男性職員の困難点として女性への対応を挙げており、これまで「女性の職業」だとされる職業に男性が参入する困難として、共通する事項である。しかし、このような問題は、「男性の職業に対する認識が一部の閉鎖的な考えから、心配だから拒否する等根拠に乏しい結果」であると大野ら⁵⁰は述べており、家庭科教員の採用においても、性別を理由に拒否することは性差別に値すると言える。

津村らは養護教諭の領域で、石川⁷⁹は保育士の領域において、採用側である教育委員会や保育所長の男性職員の採用に関する調査を実施し、採用側にジェンダー・バイアスがあることは明らかにされているが、それが採用の妨げになるかについては、明らかにされていない。本研究でも、採用側のジェンダー観について調査すると共に、採用の妨げになるのか検討する必要がある。このことについては、第3章で述べることとする。

3. 男性家庭科教員に対する見解について

男性家庭科教員の認識している教育的効果は、女性家庭科教員の認識とほぼ共通しており、多くの女性家庭科教員は、男性家庭科教員に対してポジティブなイメージをもっていた。

しかし、家庭科の領域に男性が参入することに居心地が悪いと感じる

割合は、約 3%とわずかではあるが存在し、その要因を分析したところ、男性と一緒に学んだ経験や一緒に勤務した経験、年代ではなく、その人自身のジェンダー・バイアスによる可能性があることが明らかになった。

前田らは看護師の領域において、生田は養護教諭の領域において、男性職員と共に働いた経験のある女性のほうが、男性職員の評価が消極的な評価から肯定的に変わったことを明らかにしている。しかし、本研究では、この 2 つの先行研究とは異なる結果となった。質問紙の回答とは別に同封された手紙からも、男性家庭科教員に対する評価は、非常に低いものだった。ジェンダー・バイアスの強弱に関わらず、男性家庭科教員との勤務経験から得た低い評価は、男性家庭科教員の印象を悪くし、もともとジェンダー・バイアスが強い場合は、さらにその人のジェンダー・バイアスを強固にすることに繋がると考えられる。しかし、裏返せば、力量があり、非常に意欲的な男性家庭科教員との出会いによって、男性家庭科教員の印象を変える、もしくは中和する可能性は十分ある。統計的に見れば、家庭科の領域に男性が参入することに反対の意見をもつ女性家庭科教員はごく一部であることから、全ての人々が男性家庭科教員に対して好意的に捉えるようになることは、不可能ではないと考えられる。

4. 女性家庭科教員のジェンダー観について

女性家庭科教員の性差観に影響する因子は 7 変数あり、性差観を高める項目は「男性家庭科教員に対するネガティブイメージ因子」、「男性家

家庭科教員が増えない理由で『女性イメージ』がある」、「性別によって重要な分野・領域があると思う」、「男性家庭科教員に対する伝統的な男性主導型因子」、「勤務校が私立」の 5 項目であり、性差観を弱める項目は、「年齢」、「男子生徒から『家庭科の教員になりたい』と言われた経験」の 2 項目であった。

性差観を高める 5 項目のうち、因子分析で明らかになった「男性家庭科教員に対するネガティブイメージ因子」、「男性家庭科教員に対する伝統的な男性主導型因子」の 2 項目が含まれていたことから、男性家庭科教員のインタビュー調査から導き出された、これらの反応は、ジェンダー・バイアスによるものだったと考えられる。

そして、「男性家庭科教員が増えない理由で『女性イメージ』がある」、「性別によって重要な分野・領域があると思う」と答えた女性家庭科教員は、性差観が高いことから、性差を前提にした家庭科の授業を展開している可能性についての示唆が得られた。

また、性差観を高める因子として「勤務校が私立」が挙げられており、男性保育士の採用において石川ら⁷⁹は、私立よりも公立の方が肯定的であることを明らかにしている。男性家庭科教員の採用において、女子生徒への対応の困難を理由に、男性は家庭科教員に向いていないと捉えている者が、わずかに存在していたことから、採用側においても、「私立」で「女子校」であると、男性家庭科教員の採用は困難なのかについて、検討を試みたい。

一方、性差観を弱める項目に「男子生徒から『家庭科の教員になりたい』と言われた経験」が挙げられた。恐らく、男子生徒から「家庭科の

教員になりたい」と言われた経験のある女性家庭科教員の家庭科教育は、「家庭科＝女性」イメージを払拭する、非常に魅力のある家庭科教育を実践していたと推測される。今回は、女性家庭科教員のジェンダー観を明らかにするのが目的であり、授業実践を明らかにする質問項目は設定しなかった。そのため、女性家庭科教員が行う男子生徒に対して興味を持たせるための工夫は何かを明らかにすることは、できなかった。

男性が家庭科に参入する見解と年代には有意差が認められなかったが、年代と性差観に有意差が認められるかどうかを検証したところ、50代よりも20代の方が性差観の尺度得点が高く、有意差が認められた。

近年における若者の性別役割意識は、性別特性論を肯定する傾向にあり、本調査においても、その傾向は共通していたことになる。家庭科はこれまでの性別役割意識を問い直す科目であり、教員の見解が反映しやすい教科でもある。家庭科を通してジェンダーの再生産につながることは、両性の平等を目指す立場として、あってはならないことである。男性家庭科教員のインタビュー調査の結果、「男ジェンダー」から解放されていることが推進要因のひとつになっていることに鑑みると、家庭科の教員養成課程において、ジェンダー・セクシュアリティの学びは今後も不可欠であることが示唆された。

5. 女性家庭科教員が行う男女共修家庭科について

8割の女性家庭科教員が、学習意欲に男女に「違いがない」と回答し、

性別による重要な分野・領域は「ない」と回答したのは、約 9 割だった。そして、男子生徒に対して興味をもたせるための工夫をしている女性家庭科教員は約 4 割である。半数以下の女性が、これまでのやり方では男子生徒が興味を持たないと感じ、様々な方法で工夫しているものと考えられる。これらの結果から、一見、女性家庭科教員の行う家庭科教育は、平等的な教育実践を展開しているように思われる。しかし、工夫を「している」人に性差観が高いと言う結果から、その工夫は、残念ながら性別を前提にしたものである可能性が高いと考えられる。

男子に対する工夫で最も多かったのは、「実験・実習」だった。食物の授業において、高校の家庭科教員である川辺⁸⁰は、「分子構造の違いまで示すと、男子の目が輝き出す」と述べていることから、確かに「実習・実験」を取り入れることは、男子生徒にとって有効な方法であり、多くの人を取り入れているのだろう。倉持らが行った進学校の男子生徒を教える家庭科教員のインタビュー調査⁸¹でも、化学や生物と関連させることで、生徒は家庭科を興味深く受講する、という結果を得ている。だが、この方法には注意が必要で、化学で学習したことと違う場合、教員が質問に答えられないと、生徒から「家庭科はその程度なのか」といった発言があると言う。この場合、アカデミックな知識で立ち向かうよりも、生活の中でどのように対応していくのかを教えるといった対処法が良策であると述べている。これでは、家庭科はアカデミックな学問ではないことを証明してしまう危険がある。「その程度」と思われたいためには、ある程度のアカデミックな知識の習得が重要であり、科学と生活がどう結びついているのかを説明することが、家庭科の地位の向上につながる

のではないだろうか。もし、生徒からの質問にその場で説明出来ない場合は、後日、改めて説明できるように、化学を担当する教員にその知識を確認するなどの努力をすることが、求められる。性別を前提とした「実験・実習」にならないためにも、科学的根拠を示した授業を行うことが必要であると考えられる。

その他の工夫として、「家庭科ができるのカッコいい・モテる」というような、これこそジェンダー・バイアスのかかった発言があった。恐らく、思春期の男子生徒にフィットした方便として、現場の家庭科教員が家庭科に興味をもたせるための工夫の一つとして、使用しているものと考えられる。

男子生徒はもちろん、女子生徒にとっても興味関心を引く確かな工夫とはどんな事なのか、男女に開かれた新しい家庭科とは何かを明らかにすることが、今後の課題であるということを見いだすことが出来た。

6. 家庭科が好きな男子が生まれにくい環境

家庭科が好きな男子は変わっていると聞いたことのある経験について、「よく聞く」と「たまに聞く」を合わせると 3 割以上だった。男子にとって、「家庭科が好き」だと気軽に言えない空気があり、今も、家庭科が好きな男子が生まれにくい環境であることが示唆された。質問紙の欄外に、「肯定的な意味で、『女子力が高い』という発言があった」と回答した者がいたが、そもそも「女子力」とは、性別役割分業を肯定する意味を含んだ言葉であり、生徒の中に、「家庭科＝女性」イメージを持っ

ていることを確認できる発言である。人々の性別役割分業意識は根強く、年齢が低いほど、その傾向があることが本調査でも明らかにされた。男性家庭科教員の調査からも、生徒から、上記に示した好意的ではない言葉をかけられた語りがあったことから、ジェンダー平等を目指す学習を保障すると共に、多様な生き方のモデルである男性の家庭科教員が生徒にとって身近に存在することに意義があることが、確認された。

VI. まとめ

①調査対象者の8割が女子大出身であり、男性と学んだ経験についても、8割が共に学んでいなかった。男性家庭科教員と一緒に勤務した経験が「ある」と答えた女性家庭科教員の人数の推移をみると、家庭科の変遷（男女共修化と2単位の家庭基礎の導入）によって、男性家庭科教員と一緒に勤務する女性家庭科教員もそれに合わせて変動しており、現在、家庭科の教員免許を取得している男性は増加している。このことから、現在、家庭科教員という職業は、男性にとって選択肢の一つになったことが、女性家庭科教員を対象にした調査でも、確認することが出来た。そして、男性家庭科教員が増えない要因は、授業時間数の減少により、家庭科教員全体の採用人数の減少を招いた国の教育政策にあるという示唆を得ることが出来た。

②男性の採用について、多くの女性家庭科教員は、男性であっても家庭科教員としての資質があり、能力があれば性別は関係ないと捉えていた。しかし、女性家庭科教員のジェンダー・バイアスから、男性は家

庭科教員に向いていないと捉えている者がごくわずか存在した。

- ③多くの女性家庭科教員は、男性が家庭科教育に参入するのを歓迎しており、男性家庭科教員自身が認識している教育的効果と男性家庭科教員のイメージする特徴は、ほぼ共通であり、8割の女性家庭科教員は、男性家庭科教員に対してポジティブなイメージをもっていた。このことから、多くの女性家庭科教員は、男性家庭科教員を好意的に捉えていると考えられるとともに、男性家庭科教員のインタビュー調査で得られた結果は、女性家庭科教員の質問紙調査においても、矛盾なく一致した。
- ④女性家庭科教員の性差観に影響する因子は7変数あり、性差観を高める項目は「男性家庭科教員に対するネガティブイメージ因子」、「男性家庭科教員が増えない理由で『女性イメージ』がある」、「性別によって重要な分野・領域があると思う」、「男性家庭科教員に対する伝統的な男性主導型因子」、「勤務校が私立」の5項目であり、性差観を弱める項目は、「年齢」、「男子生徒から『家庭科の教員になりたい』と言われた経験」の2項目であった。「家庭科の教員になりたい」と言われた経験のある教員の授業実践は明らかに出来なかったが、恐らく、「女子向き家庭科」を払拭する新しい家庭科教育をしている可能性がある。
- ⑤年代と性差観に有意差が認められるかどうかを検証したところ、50代よりも20代の方が性差観の尺度得点が高く、有意差が認められた。
- ⑥生徒の性差によって学習意欲に違いがあるか聞いたところ、8割の女性家庭科教員が男女に「違いがない」と答えている。そのため、男子

生徒に対して興味を持たせるための工夫を「していない」人は約 4 割である。しかも、工夫している方に性差観が高かったことから、その工夫は、性差を前提にした工夫である可能性がある。

- ⑦家庭科が好きな男子は変わっていると聞いたことのある経験について、「よく聞く」と「たまに聞く」を合わせると、3 割以上いた。男性教員のインタビュー調査においても、好意的ではない語りがあったことから、ジェンダー平等を目指す学習を保障すると共に、男性家庭科教員が存在することに意義があることが、確認された。

VII. 本研究の限界と今後の課題

ここでは、高等学校の女性家庭科教員を対象に、男性家庭科教員自身が認識している教育的効果は、女性家庭科教員も同様に捉えているのかどうか、さらに、女性家庭科教員のジェンダー観を明らかにすることを目的に調査を行ったため、女性家庭科教員がもつ家庭科観と授業実践の中身との関係については、考察を深めることができなかった。

今後は、多様な世代の女性家庭科教員の家庭科観と授業実践を検討すると共に、女性家庭科教員の授業実践と生徒の家庭科観との関連についての調査をすることが、今後の課題である。

第3章 学校長からみた男性家庭科教員の現状と男性家庭科教員観

－男性家庭科教員の採用を中心に－

はじめに

1章では、男性家庭科教員を対象にインタビュー調査を実施し、現状と課題を把握した。その結果を受けて2章では、女性家庭科教員を対象に、男性家庭科教員自身が認識している男性ならではの教育的効果は、女性家庭科教員も同じように認めているのか否か、男性家庭科教員が増えない要因は何かについて、質問紙調査を用いて明らかにした。その結果、男性家庭科教員が増えない要因について、教員を採用する側の男性家庭科教員に対する見解についても検討する必要性が見いだされた。本章では小・中・高等学校の学校長を対象に、男性家庭科教員に対してどのような見解をもっているのか、さらに、男性家庭科教員の採用についてどう思うのかを、質的・量的調査の両方を用いて検討する。

I. 目的

本章の目的は、以下の3つである。

- ①小・中・高等学校の学校長が考える男性家庭科教員が増えない要因を明らかにする。
- ②男性家庭科教員の採用について、どのように考えているのかを明らかにする。
- ③男性家庭科教員が認識している教育的効果は、小・中・高等学校の学

校長においても妥当な見解なのかどうかを検討する。

Ⅱ．研究方法

1. 研究対象者とデータ収集方法

A 県の公立の小・中学校長に、調査用紙と調査協力の依頼文書を同封したものを B 市の学校長会を通して 21 枚配布し、無記名自記式質問紙調査を行った。2015 年 1 月 6 日から 2015 年 1 月 18 日までの期間中に回答を得られた学校長 20 名（元・学校長 1 名を含む）を対象とした。回答数（率）は 20 名（95%）で、有効回答率は 100%であった。

調査用紙にインタビュー調査への協力を募り、協力を得られた学校長 5 名に対し、事前に準備したインタビューガイドを用いた半構造化面接⁵⁸を行った。所要時間は、1 人当たり約 60 分であった。

さらに、これまで質的・量的紙調査を行った対象者の多くが高等学校の教員であることから A 県立高等学校の学校長（専攻・生物）と、A 県に所在する国立高等学校の副校長（専攻・家庭科）2 名にインタビュー調査の協力を依頼し、小・中学校の学校長の調査結果と差異があるかを中心に半構造化面接を行い、考察を深めるための資料にした。インタビュー調査の実施期間は、2015 年 1 月 19 日～3 月 23 日であり、調査時間は、1 人当たり約 60 分～120 分であった。

2. 調査内容

1) 質問紙調査

調査内容は、①属性（誕生年度・教員歴・性別・勤務校について）、②学校長自身について（男性家庭科教員との勤務経験・男性家庭科教員に対する見解・性に対する平等観）、③男性家庭科教員について（男性家庭科教員が増えない要因、採用について）とした。

2章と同様、男性家庭科教員に対する見解は、男性家庭科教員のインタビュー調査から得られた結果を元に作成し、性に対する平等観については、伊藤が考案した「性差観スケール」を採用した（表 3-1：調査枠組み）。

2) インタビュー調査

調査内容は、①採用側の「家庭科＝女性」イメージとその理由について、②私立の女子校の場合も力量があれば採用に性別は関係ないか、③男性家庭科教員の存在意義と効果について調査した。

3. 分析方法

1) 質問紙調査

回収したデータの全体像を単純集計によって把握した。

「性差観スケール」の回答方法は、「そう思わない」「どちらかという」と「そう思わない」「どちらかという」と「そう思う」「そう思う」の4件法で行った。本研究では、「そう思わない」を1点、「どちらかという」と「そう

思わない」を 2 点、「どちらかというと思う」を 3 点、「思う」を 4 点として単純集計を行い、その平均値を尺度得点とした。この尺度得点は、得点が高いほど性に対する平等意識が低い傾向があることを示している。

質問紙の統計処理には、エス・ピー・エスエス株式会社 PASW Atatistics Base 18.0 for Windows を使用した。

2) インタビュー調査

小・中学校の学校長に対する面接内容のデータ分析は、マトリックス抽出法を用いて内容分析を行った。具体的には、面接によって得られた語りを対象者ごとに逐語録を作成し、逐語録全体を把握できるまで繰り返し精読した。個々の逐語録はその文脈に沿って、「男性家庭科教員が増えない要因」、「男性家庭科教員の採用」、「家庭科教員に期待する役割」の 3 つに焦点を当て、内容的にまとまりのあるデータに区切った。それぞれにおける各データの要点を抽出し、マトリックス表を用いて共通するテーマに分類し、それぞれのテーマについて分析した。

4. 真実性の確保

インタビュー調査のデータの分析過程において、研究者の解釈の偏りを小さくするため、教育分野の学識経験者 2 名、保健学専攻の研究者 2 名、大学院生と解釈と分類について議論を重ね、信用可能性と明解性とおよび確認可能性の確保を行った。更に、質的研究に精通した指導教員

から定期的に指導を受け、真実性の確保に努めた。

Ⅲ. 倫理的配慮

1) 質問紙調査

調査対象者には文書で本研究の目的、方法、個人情報保護方針、および、調査は自由意志に基づく参加であり、個人情報は保護されること、答えにくい質問は回答しなくても良いこと、調査に参加しないことによって、不利益が生じないことを明記した。任意による回答を依頼し、プライバシー保護のため本人が回答用紙を封筒に入れて封をし、投函する方法を用いた。

調査によって得られたデータは統計処理を行い、研究以外の目的には使用せず、すべてのプロセスが終了次第破棄すること、個人情報が特定されないように慎重に配慮することも、文書で説明した。

2) インタビュー調査

調査対象者へは、調査依頼時に本研究の目的、方法、個人情報保護方針、及び、本研究が自由意志に基づく参加であり、参加拒否により不利益を被ることは一切ない点についての説明を口頭並びに文書で行い、同意の得られた者のみを対象とした。インタビュー実施は、プライバシーが確保でき、かつ対象者が希望する場所で行った。記録は、対象者の同意を得て IC レコーダーによる音声録音を行った。録音および記録した内容は、個人が特定できないよう全て ID 化し、個人が特定できない形でデータの管理・解析を行い、研究終了後は破棄することを説明した。

また、調査の途中であっても不都合がある場合は中止できることを事前に説明した。

本研究は、香川栄養学園実験研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した。【承認番号第 342 号・平成 27 年 1 月 14 日】

IV. 結果

1. 小・中学校の学校長による質問紙調査

1.1 属性 (表 3-2～3-6)

調査対象者の年齢は、60 代以上が 5.3%、59～55 歳が 73.7%、54～50 歳が 21.0%で、平均年齢は 56 歳だった (表 3-2) (表 3-3)。性別は、女性が 15.8%、男性が 84.2% であり、教員歴は、平均 34 年だった (表 3-4)。

勤務校は、小学校が 63.2%、中学校は 36.8%であった (表 3-5)。担当教科については、小学校全科が 4 名で、数学・算数、社会がそれぞれ 3 名であり、家庭科はいなかった (表 3-6)。

1.2 男性家庭科教員との勤務経験と採用について (表 3-7～3-10)

男性家庭科教員と一緒に勤務した経験が「ある」と答えた学校長は、皆無だった (表 3-7)。

能力があっても男性だと家庭科教員として採用されにくいと思うか聞いたところ、「はい」が 11.1%、「いいえ」が 55.6%、「わからない」は 33.3%だった (表 3-8)。「はい」と答えた理由を自由記述で聞いたところ、

「採用する側の『家庭科＝女性』というイメージが払拭できるか疑問だから。同じ力量なら女性を採用するのではないか」という回答があった。

学校長個人の考えとして、家庭科教員としての力量があれば、男性でも採用するかどうか聞いたところ、「採用する」が 89.5%であり(表 3-9)、その理由は、「力量・指導力・教育愛があれば」が最も多く、その他に、「男性視点の授業が可能」「男女平等に繋がる」などであった(表 3-10)。

1.3 男性家庭科教員が増えない理由 (表 3-11)

男性家庭科教員が増えない理由について(複数回答)、最も多かったのは、「『家庭科＝女性』イメージ」で 26.0%であり、次いで、「授業時間が減少し、採用人数が少ない」と「家庭科教員になりたい男子が少ない」がともに 24.0%だった。「男性が入学できる家庭科教員養成校が少ない」が 18.0%、他、「生活経験が少ない」「女性家庭科教員と良好な関係が築けない」がともに 2.0%だった。

1.4 男性家庭科教員に対する見解とジェンダー観(表 3-12～3-13、図 3-1)

男性家庭科教員自身が認識している教育的効果と男性家庭科教員の特徴は、学校長の認識と差異があるか検討する。

男性家庭科教員ならではの教育的効果について、自由記述で聞いたところ、「男女に差がない」が 5 名、「男子への影響・理解」が 3 名であり、「食に関する見解を高める」「授業規律の確保」「男子の関心が高まる」

「性別役割意識がなくなる」「差別意識がなくなる」がそれぞれ 1 名だった（表 3-12）。

次に、女性家庭科教員を対象にした男性家庭科教員の特徴を示す質問項目の中から、「会議の時に意見が通る。発言力が得られる」を除く 14 項目について、それぞれについて「全くそう思わない」「あまりそう思わない」「少しそう思う」「全くその通りだと思う」の 4 件法で回答を求めた。女性家庭科教員の質問紙調査にあった「会議の時に意見が通る。発言力が得られる」を除いた理由は、採用者の立場から見た場合、「役員等は男性の方が任せることができる」と重複していると考えたからである。

「少しそう思う」「全くその通りだと思う」と回答した割合を合計した結果、「性別による特徴はない」が 85%、「男女平等を語る際、説得力がある」が 80%、「『家庭科＝女性』イメージを変える」が 75%、「性別を理由にした言い訳をさせない」「保育分野で女性の体を教えるのが困難」がともに 65%、「授業に対する生徒のモチベーションが高まる」が 50%であった。男性家庭科教員と学校長および女性家庭科教員との認識はほぼ共通しており、学校長も男性家庭科教員に対してポジティブイメージを持っていた。しかし、ネガティブイメージである「保育分野で女性の体を教えるのが困難」について、「少しそう思う」「全くその通りだと思う」と回答した割合は、女性家庭科教員は 4 割以上だったことに対し、学校長は 6 割以上おり、女性家庭科教員と差異がみられた（図 3-1）。

そこで、学校長の性差観は、女性家庭科教員の性差観よりも高いのか t 検定で比較したところ、女性家庭科教員と比較すると学校長の性差観は低く、有意差は認められなかった（ $t(452) = 0.201$ 、 $p = 0.840$ ）（表

3-13)。

2. 小・中学校の学校長によるインタビュー調査

半構造化面接において、先に述べた「男性家庭科教員が増えない要因」、「男性家庭科教員の採用」、「家庭科教員に期待する役割」の3点から、それぞれ見いだされたテーマは【】の中に表記した。対象者の語りは、「ゴシック体」で表記した。以下、それぞれのテーマと語りについて、説明する。

2.1 男性家庭科教員が増えない要因

男性家庭科教員が増えない要因に関するデータを分類した結果、【養成校の問題】【男性家庭科教員の認知不足】【志望する男性が少ない】【授業時間数の減少】【伝統的な家庭科観】【前例・実績のなさ】【今後に期待】の7つのテーマが見出された（表 3-14）。

男性家庭科教員が増えない要因で多く語られたのは、男性が入学可能な私立の家庭科教員養成校が少なく、仮にあっても、PRが足りず、周知されていないという【養成校の問題】があることを指摘し、「門戸を開いていれば、今の男の子は抵抗なく、どんどん参画してくる」と予想されることから、養成校の変革を求める語りがあった。

また、この調査を機に、改めて家庭科教員に男性がいないことに気づいたという学校長がおり、【男性家庭科教員の認知不足】を指摘する語りや、そもそも、【志望する男性が少ない】ことも、男性家庭科教員が増え

ない要因だと語る者もいた。

その他、家庭科の【授業時間数の減少】から教員の数が少なくて済むことや、これまでの【伝統的な家庭科観】が今でも変わっていないことが挙げられた。

これらの要因はすべて、【前例・実績のなさ】からくるものであり、「『卵が先か～』ではないが、男性（家庭科教員）が増えれば、変わる（JH2）」との語りを得た。

【今後に期待】について、元・学校長である JH3 は、今の 40 代以下の教員はジェンダー・バイアスに囚われていないと感じることから、その教員が学校長になる 10 年後に期待できる、と語った。

2.2 男性家庭科教員の採用

男性家庭科教員の採用に関するデータを分類した結果、【受け入れる側の見解】【力量があれば性別は問題ない・抵抗ない】【他の職業と同じ・比較】の 3 つのテーマが見出された（表 3-15）。

【受け入れる側の見解】について、「公立学校の場合」は、法律によって男性の参入の門戸は開いており、家庭科教員の採用に性別は問題ないとの語りが多かったが、教員採用試験の際、採点する人のジェンダー・バイアスが採点に影響する可能性を示唆する語りもわずかだかあった。

「私立の女子校の場合」について、男性でも問題はないと語る一方で、「若くてカッコ良い場合、女子生徒の憧れの的」となり、授業が成り立たない可能性を示唆する者もいた。その他、学校の「建学の精神」、「校

訓」「伝統」から、その象徴として「家庭科教員は女性」という趣旨が影響している可能性についての示唆も得た。

多くの学校長は、【力量があれば性別は問題ない・抵抗な】く、制度的・社会的にも男性が家庭科教員になることを歓迎しており、宮大工や調理師、デザイナーといった職業を例に出し、【他の職業と同じ】である理由から、性別は全く問題ないと語った。加えて近年、男性の養護教諭が増えていることに触れ、養護教諭と【比較】すれば、男性家庭科教員は採用されやすいと捉えていることも、確認された。

2.3 家庭科教員に期待する役割

家庭科教員に期待する役割に関するデータを分類した結果、【男性の場合】【女性の場合】の2つのテーマが見出された（表 3-16）。

家庭科教員が【男性の場合】、子ども達はもちろん、保護者や地域・家庭の意識変化につながり、非常に良い効果をもたらすと捉えており、男性家庭科教員・女性家庭科教員両方の結果と共通していた。しかし、教科指導以外で、「父親的役割」を期待し、家庭科教員が【女性の場合】は、「母親的役割」を期待していた。そして、保育分野の教授については、「(女性は)自分で体験しているから、女子生徒にとって、説得力がある」と語り、家庭科教員の女性は皆、出産・子育てを経験していることを前提にしていることや、女子の対応には女性の家庭科教員が望ましいと捉えていた。

「家庭科＝女性」イメージについて学校長は、看護師を例に挙げ、男性看護師が増えて、これまでのイメージを変えたことから、男性家庭科教員が増えれば家庭科のイメージが変わる可能性について言及すると共に、特に女性にとって、その効果があると指摘する発言が多くあった。学校長の多くが、家庭科教員に対する期待には、性差を前提に捉えているが、性別役割分業意識があるのは女性の方だと捉えていることが示された。

3. 高等学校の管理職によるインタビュー調査

高等学校の管理職に対し、小・中学校の学校長の質問紙調査の結果を基に、「男性家庭科教員が増えない要因」、「採用について」、「男性家庭科教員ならではの教育的効果」について、半構造化面接を用いて調査した。対象者の語りは「ゴシック体」で表し、高等学校の学校長には H2、副校長は H1 と表記した。

3.1 男性家庭科教員が増えない理由

「男性家庭科教員が増えない理由」について、小・中学校の学校長の調査結果で上位 3 つは、最も多かったのが「『家庭科＝女性』イメージがあるから」、次に「家庭科教員になりたい男子がそもそもいない」、「家庭科の授業が減少して採用人数が少ない」であった。

この順位について H2 から同意を得ることが出来た。調査項目について

て H1 は、「だいたい網羅されているんじゃないかしら。これ、全部だと思えますよ」との回答を得た。そして、順位の低かった「生活経験が少なくて家庭科が教えられない」に注目し、以下のように述べた。

「これって非常に大きいと思うの。男性も女性も。(家庭科は)『家庭のことだから簡単に教えられるわよ』って思われがちなんだけれども、実はとても難しくてね。レシピがあれば、お料理が上手にできるかと言えば、そんなことは全然なくて。(略) 子どもを育てるのに育児本があるからそれを読めばできるかっていうと、絶対、無理なのよ。だからね、非常に高い熟練の知識が必要だと、私は思っているのね。そういう意味で、家庭科の先生の意識と技術のレベルが(そこまで)行っていないから、教えたときにつままない授業になるのよ。そうすると、『家庭科なんか、別に』って(思われる)(H1)」

このように H1 は、家庭科が軽視される原因は、家庭科教員の見解と生活技術のレベルの低さであることを指摘した。さらに、誰かの犠牲の上に成り立つ「豊かさ」に疑問を持ち、広い視野で社会を捉える教員が少ないため、生徒にもそういった視点で生活と社会を結びつけて考えさせることが出来ないことや、教員養成校で、学生にそこまでの知識と実力をつけさせることができない現状を以下のように指摘した。

「(お金を出せばある程度生活できることは、)『経済の活性化になるんだ』って言うんだけど、『そういう安い製品を買くと、どこかの国が環境を悪くしていますよ』って。『そこまであなたたち、考えて生活しているの?』って言いたいんだけど、(略)『じゃあ、その

国々も豊かになり、私たちも豊かになるためには、どういった家庭生活を送ったらいいの?』って考えさせ、その技術までも伝えられる教員、これがないと私は思う。大学の4年間でその知識と技術をね、詰め込むっていうのは、とても無理(H1)」

このような背景から、今の家庭科は、「つまない授業」になり、生徒や社会から「こんな授業なんて要らないんじゃないの?」と思われてしまい、強いては家庭科教員自体が魅力的に思えないのではないかと語った。

H2もこれまでの家庭科教育を振り返り、「女性教員が女子に向けて家庭科を教えるというシステム」をつくっていると語った。男女共修になっても家庭科はそのようなシステムに「縛られちゃって」いるため、男性は踏み込みにくく、参入しても、これまでの女性目線の家庭科を教えることができず、限界を感じるのではないかと語った。

加えて、家庭科の授業で女性教員が語る体験談は、男子生徒にとって、授業の内容を深める参考資料ではなく、「家庭科=女性」イメージを強固にする作用になっている可能性があり、それが、男性家庭科教員が増えない要因ではないかと推測していた。

「女性の教員の場合、自分の実体験を話す場合がありますよね。(略)女性としての視点がずっと入っていきますよね。(略)(家庭科は)体験談をちりばめる教科だから、女性の体験を聞いていても、女子の方が入るかもしれないけれど、男子生徒にとってみると…なかなか入

らないんでしょうね。(略)(今の家庭科の内容が男子にとって)興味を持って先生になろうっていうようなものではないんですよ。やっぱり、実生活の延長みたいなものでしか、なっていないんじゃないのかな、っていう感じがして、仕様がななんですよね(H2)」

この H2 発言に対し筆者は、これまでの家庭科は、河村¹が言う「ちょっと主婦が頑張った程度(の授業)」なのか質問したところ、「そうです、そうです(H2)」と回答し、男子も共に学んでいることを「活かしてきれていない」と指摘した。しかし、今日、様々な形で人々の見解が変わり、社会も変わりつつあるのは、男女共修家庭科が実現した功績だとし、両性の平等を実現に向けた、さらなる発展のためには、生活者の一人である男性目線が必要であり、男性家庭科教員の存在は不可欠であると語った。

学校の中での家庭科教員の立ち位置について、H2は、「主流になっていない(H2)」と言い、学校運営上の面や生徒の指導面において、女性家庭科教員自身が積極的にリーダーシップを取りたがらず、「女ジェンダー」に縛られていると指摘した。

3.2 男性家庭科教員の採用

家庭科教員の採用において、能力があっても男性は不利かどうかについて、「はい」と回答した学校長はわずかであり、「採用する側の『家庭科=女性』イメージが払拭できるかが疑問。同じ力量なら女性を採用す

るのでは」というのが、その理由であった。

高等学校の管理職側にも、家庭科教員の採用において、能力があっても男性は不利かどうかを質問したところ、H1とH2とも、「能力があればどんどん男性を採用」と回答した。

そこで、「私立」の「女子校」である場合も、同じ意見なのかを聞いた。

H1は、小・中学校の学校長のインタビュー調査にあった、「若くてカッコ良い場合、女子生徒の憧れの的になり、授業が成り立たない可能性が、なくもない」と同様の回答だった。

「純粋に『教科を教える』っていうことだけであれば、（男性でも）全然難しくはないと思いますが、世の中っていろんな事件が起こりますよね。女子校だと、女子生徒は男性の先生にキャーキャー言いますよね。その辺できちんと教師っていう立場をわきまえ、教師と生徒の立場を線引きできる、そういう教員であれば、何の問題もないけれども、人間の心って、やっぱり、そうならない時ってあるわよね。そういうようなリスクを考えると、家庭科の男性だから、とかいう訳じゃなくて、男性教員そのものに対するちょっとの危険性っていうのは、正直言ってありますよ。だからと言って、採用しないわけではなくって。能力もあって、人間的にきちんとしていて魅力があるな、と感じれば、女子校の管理職であってもきちんと採用はします。その代わり、それ以外の危険が起こらないように危機管理意識は、見張っていますけどね（H1）」

生徒が異性の教員をアイドル化したり、からかいの対象にしたりする

ことについて、H1 自身もからかいの対象になったと語った。その中で、男子生徒からのスクール・セクシュアル・ハラスメント（以下、スクール・セクハラ）の被害にあった経験を語り、被害にあったとしても、「乗り越える」ことが「教員としてのスキル」であるかのように捉えていた。

「からかいの対象になりましたもん、前任校で。調理実習の後片付けに、コンドームにお水入れて、『先生、これなんだかわかるか？』って聞いて。わざわざ見せに来て。あと、『先生、俺に一発やらせろよ』とかね。言いに来たりしますよ。（略）それを乗り越えて教師になるんだけどね（H1）」

H2 は、自身が公立の学校長であるため、最初に「公立の」女子校の場合について考え、「採用は、学校じゃなくて県でやるから、配置の時に、校長先生が決めるので。それは、校長さんの度量が決めるのかなって。（略）ある意味、学校・学校によっての、置かれている状況によってだと思っんですよね。（略）女子校だから、絶対男性はダメだとか、そう言うのではないと思いますね」と語った。「私立の場合は異動がないでしょ？一旦決まったら、ずっといることになるから、そうするとやっぱり、大きな変化を望まない、っていうのが、女性側の方にあるのかもしれない」と推測した。

私立の女子校の場合について、これまで、生徒と教員との関係を心配するものが多かったが、H2 は公立と私立の人事異動の違いを挙げた。そして、変化を望まないのは女性の方だとする考えについては、小・中学校の学校長と共通していた。

3.3 男性家庭科教員の教育的効果と特徴

「男性家庭科教員ならではの教育的効果」について、小・中学校の学校長の調査結果で最も多かったのは、「男女に差はない」という回答だった。

この結果をどう思うか聞いたところ、H1 は、そうは思わないと否定した。

「(家庭科の) 学問領域が生活そのものなので。例えば数学的に 1 足す 1 は 2 ですよ、と言うのであれば男女に差がないけれども、(略) (家庭科は) はっきりした答えがない、それを学問にしている学問だから。だから教員も生活経験が教える上で非常に武器になるのであって、だから女性の立場から家庭を見た時と、男性の立場から家庭を見た時とでは、やっぱり違うと思うのね。一緒だと気持ちが悪い、逆に。違っても絶対、あるんだから (H1)」

具体的にどんな違いなのか確認したところ、前任校で家庭科教員として勤務した H1 は、生徒が全員席に着かず、授業が成り立たなかった経験から、小・中学校の学校長の語りと同様、生徒指導面において、男性家庭科教員に対し、悪いことをしたらビシッと叱る父親的役割を期待していた。

その他、H1 は、生徒の家庭科に対する姿勢について、社会だけではなく、生徒も他教科と比較して家庭科を軽視し、「息抜きの時間」だと捉

えていると、語った。

その状況を打開するためには男性が家庭科を教えるのが有効であり、伝統的な家庭科観だけでなく、「家庭科＝息抜きの時間」という差別意識をなくすことに繋がると、H1は期待していた。

一方H2は、H2個人の考えとして、「この中で言うなら、(小・中学校の学校長の結果と同様)『男女に差はない』ですね。教えることに、男の人でも女の人でも(差はない)」と、H1とは違う回答だった。H2は生物の教員として生物学的な性差があるという事実を踏まえた上で、多様な人間が存在することの重要性を語り、教育現場において多様な視点が重要である点については、H1との語りとはほぼ共通していた。

「学校っていうのは、生徒にとって見れば、一番直近な社会人な訳ですよ。社会人である人たちが、みんな一律の顔で授業してほしくないんですよ。100人いれば100人の先生の顔で良いかなって思うんですよ。もちろん、基本的なことはしっかり押さえてくれなきゃ困るんですよ。だけれども、生徒にとって見れば、『この先生の考え方には賛同できるけれども、この先生の考え方は、ちょっと違うかな?』っていう経験値が得られなくなってしまいますよね。(略)違いがあることによって、人間社会がうまくいくのであって、みんなが同じであつたら、逆に、そういう(違うと思う)人の逃げ場がなくなっちゃいますよね。(H2)」

次に、「男性家庭科教員の特徴」についての結果を示す。質問紙調査において、男性家庭科教員の特徴についても「性別による特徴はない」が最も多く、ポジティブイメージが上位にあがったが、「保育分野で女性の体を教えるのが困難」といったネガティブイメージが4位にあがっていた。

この結果について H1 は、前述した教育的効果の理由と一緒にと回答し、順位に関しても特に異存はなく、「経験が浅い」「技術面を教えるのが困難」という教員はそもそも雇わないと語り、整理整頓やチームワークを乱すことについても、性別ではなく個人の性質・問題だと捉えていた。男性家庭科教員は、「チームワークを乱す」存在ではなく、かえって、男性が入った方が「ふくらみのあるチームになる」可能性を述べた。

一方、H2 は、「保育の分野で女性の体を教えるのが困難」に着目し、自身の経験から、男性は「保育分野で女性の体を教えるのが困難」ではないことを主張すると共に、家庭科教育に情熱を持った男性が生徒のためにも増えて欲しいと語った。

「まあ確かに、最近ね、育メンパパなんかが増えていますが、(略) まだ保育の分野って、女性の体の部分もあるから、男性がちょっと置いて行かれているな～っていうイメージが、外からするとあたりるので。そのへんのところを男性の先生が若い子達を教える時に、受け取り方はどうなのかな？っていうのは、あるかもしれませんね。でも、考えてみれば、医学部だって男性の方が圧倒的に多いですよ。だから、そういう部分で男とか女とかで分けちゃいけないと思うんですよ。(略) 私なんか、生物の教員だったもんで、全然(抵抗なく)

女子校で教えてましたけどね。まったく、(男とか女とか) そんなこと、意識したことないですよ。生徒が平気でいろんなこと聞いてきますから。だから、伝えたいことをしっかりやっていくことですよね。性のことをやっていくと、どうしても生殖器のこととかもやりますよね。(略) 男性だから女性の分野の話ができないってことは全くないと、自分自身が実践者としてやっていてそう思うので。逆に、やらしいとかそんなことは、一切ないです。(略) これは伝えたいっていうのがあったし。もし、男性の家庭科教員がいてね、彼にアドバイスをするなら、『恥ずかしいかもしれないけれども、そんなに恥ずかしいことではない』と。『自分か伝えたいことをしっかり伝えなさい』って、『必ず生徒は付いてくるから』って言うでしょうね。授業って言うのは、正しいことを淡々とやっていることで成立するのかもしれないけれど、でも、果たしてどれだけ生徒に響いて、生徒の中に入っていけるのかっていうのは、疑問符が付きますよね。たとえ、教え方は下手であっても、熱い気持ちがあれば、『良くわかんなかったけど、授業を聞いていて、すごくうれしくなった』とかね。『ためになった気がした』とかね。そういうふうに思わせるって言うのがね、やっぱり、教員の大きな仕事だと言う気がするんですよね。ある意味、熱く家庭科を語れる人材がね、そういう男性教員がね、生徒のために増えて欲しいなって言うのはありますよね。(H2)」

V. 考察

1. 男性家庭科教員が増えない理由について

男性家庭科教員が増えない理由について、質問紙調査で最も多かったのは『「家庭科＝女性」イメージがある』であり、次に「授業時間が減少し、採用人数が少ない」と「家庭科教員になりたい男子が少ない」であり、「男性が入学できる家庭科教員養成校が少ない」、「生活経験が少ない」、「女性家庭科教員と良好な関係が築けない」という結果だったが、インタビュー調査で最も多く語られていたのは、【養成校の問題】であり、【男性家庭科教員の認知不足】を指摘していた。さらに、これらの「増えない理由」は、男性家庭科教員を採用した【前例・実績のなさ】が要因であり、前例があれば、男性教員が増えると示唆していた。

高等学校の管理職についても、ほぼ同意見だとの回答を得たが、管理職は、「生活経験が少なくて家庭科が教えられない」ことに注目し、これは非常に大きな問題であり、男性だけではなく、女性に対しても言えることだと語ると共に、教員によって、家庭科の内容に得意不得意があることも指摘した。不得意教科を教える場合、「つまらない授業」を展開し、家庭科を軽視する要因に繋がる可能性についても指摘した。男性家庭科教員のインタビュー調査からも、生徒や社会的にも家庭科に対する軽視があり、男性家庭科教員が増えない要因となっていた。藤田⁸²は、教員によって家庭科の学習内容に差があることを指摘している。家庭科を軽視し、「息抜きの時間」だと捉えられないようにするために、男性家庭科教員が増えない要因の一つと考えられる「家庭科の授業時間の減少」を解消することによって、授業内容の質を高めることが可能となり、「家事・育児」だけの家庭科教育から脱却することにつながると考えられる。

これまでの家庭科の授業は、女性家庭科教員による「女子向き家庭科」という「システム」になっており、しかも、男女共修以降も「縛られちゃって」いるため、男性家庭科教員のみならず、男子生徒も踏み込めない家庭科教育であることを指摘した。第一章において、男性が「男ジェンダー」に縛られていないことが重要なカギになっていることが明らかにされたが、同時に、女性も「女ジェンダー」からの解放が重要であることが確認された。

そして、管理職は、多くの家庭科教員が女性であるため、女性が語る体験談は、男子生徒にとって、授業の内容を深めるための参考資料というよりも、「家庭科＝女性」イメージを強固にする作用になっている可能性を指摘した。筆者は、女性が体験談を語ることが男子生徒にとって悪い影響を与えているとは考えていない。家庭科の授業で、どちらか一方の体験しか学べない、意見を知ることができないことが、問題であると考え。教員の体験談はどんなことでも、生徒は非常に関心をもって聞いてくれる。人生を豊かで主体的に生きるためには、たった1つの視点だけではなく、多様な角度から物事を考えることが重要であり、その大切さを理解できる教科は、家庭科なのである。だからこそ、男性家庭科教員がいないことは、生活者の一人である男性の視点が欠けていることに繋がるのではないだろうか。確かに、男性が日々の暮らしや生活に積極的に関わり始めた歴史は女性と比べれば浅いかもしれないが、企業で女性が働く時、「男性」に基準をあわせ、「男性並み」に働くことを要求されるように、家庭科で教える内容についても、「女性」に基準を合わせ、「女性目線＝生活者の視点」であるとしてきていたのかどうかについて、

検討する必要があると考えられる。

2. 男性家庭科教員の採用について

インタビュー調査の結果から、小・中学校の学校長には、「家庭科＝女性」といった見解があると示唆する結果を得た。しかし、だからといって、それが採用に影響するのかというと、そうでもなく、学校長の半数以上が、能力があれば男性でも採用されると答えており、また、学校長個人の考えとして、学校長の9割弱が、家庭科教員としての力量があれば、男性でも採用するとの回答を得た。このことから、公立学校の場合は、採用について、性別は関係がないと言える。この結果は、高等学校の管理職でも共通しているかどうか確認したところ、両者とも、同様の回答を得た。従って、校種に関係なく、基本的には、採用に関し、男性にも門戸が開かれていると言える。

一方、私立の女子校の場合については、伝統的な建学の精神の象徴として女性家庭科教員を示す場合があることや、授業が成り立たない可能性があること、また、人事異動がないため変化を望まない女性の見解があることが要因で、男性家庭科教員の採用に難色を示すのではないかと捉えていた。

私立の女子校が伝統を守る傾向について、これまで多くの女子大学が「良妻賢母教育」という建学の精神を掲げ、それを担ってきた歴史がある。女子差別撤廃条約以降、そのような言葉は表立って見られなくなったが、今でも「隠れたカリキュラム」として継続している可能性がある。

高等学校と大学では、教育政策や方針等の違いがあり、高等学校も共通しているとは言えないが、男性家庭科教員のインタビュー調査からもそれが伺える。このことから、その可能性は少なくない。

石川ら⁷⁹は、男性保育士の採用について、私立より公立の方が肯定的だったことを明らかにしているが、その理由については明らかにしていない。本調査の学校長は私立の女子校の学校長ではないため、想像の範囲内であるが、石川らの調査結果を鑑みると、私学の場合、男性の参入は困難である可能性が高いと推測される。

小・中学校の学校長の調査結果と同様、高等学校の管理職も教科が問題ではなく、男性であることが、学校運営上のリスクになると語った。管理職の語った「危機管理意識」とは、学校運営上のリスクとは、具体的にどんなことだろうか。文部科学省が公表している「おいせつ行為等に係る懲戒処分等事案の具体的な状況について」(対象は公立学校の小・中・高・特別支援学校)を見ると、2013年度(平成25年度)の統計では、被処分者は男性205名(100%)、女性0名であり、2010年度は、男性165名(98.2%)、女性3名(1.8%)だった。よって、男性教員がスクール・セクハラのリスクとなり、そのための危機管理であると考えられる。スクール・セクハラのは加害者は、圧倒的に男性教員であるが、生徒が加害者になる場合がある。女子校ルール研究会⁸³や、男子校ルール⁸⁴によれば、生徒による「セクハラは日常茶飯事」であるという。本調査でも、ひとりの管理職から、男子生徒からスクール・セクハラがあったことを語った。しかし、被害にあっても「乗り越える」ことが「教

員としてのスキル」であると語っていた。生徒が管理職に向けた発言は、明らかに性的嫌がらせであり、精神的暴力である。「乗り越える」という意味については語られなかったが、スクール・セクハラに耐えることが「教員としてのスキル」なのではなく、このような出来事を人権教育や他者理解のチャンスと捉え、これは暴力に値し、してはいけないことだと教えることが、教員としてのスキルであると考えられる。誰もが性暴力の加害者にならないために、生徒はもちろん、教員をはじめとする大人も、性的なことで人を不愉快にする言動は暴力に値することを学び、人権感覚を獲得することが極めて重要であり、このような教育的機会を保障することも、必要不可欠である。

3. 男性家庭科教員に対する見解とジェンダー観について

本調査の学校長は皆、男性家庭科教員との勤務経験はなかったため、男性家庭科教員の特徴は、想像の範囲内での回答であった。その上で、男性家庭科教員自身が認識している特徴は妥当かどうか、また、女性家庭科教員と差異があるかどうかについて考察する。

男性家庭科教員が認識している男性家庭科教員の特徴は、女性家庭科教員および学校長の結果と同様で、妥当であることが確認された。しかし、「保育分野で女性の体を教えるのが困難」について、「少しそう思う」「全くその通りだと思う」と回答した割合は、女性家庭科教員は4割以上だったことに対し、学校長は6割以上おり、女性家庭科教員と差異があった。そこで、学校長と女性家庭科教員の性差観を比較したところ、

女性家庭科教員の方がほんのわずか高い得点を示した程度で有意差は認められず、統計上では、学校長の性差観は低いことが明らかになった。

高等学校においても、男性家庭科教員の特徴は同じなのか聞いたところ、管理職は、最も多かった「性別による特徴はない」に注目し、家庭科という教科は、「教員が生活経験を教える・語ることが武器になるため、女性目線と男性目線で家庭をみた時は違う」という考えから、「性別による特徴はない」を否定した。もう一人の管理職は、「保育分野で女性の体を教えるのが困難」に注目し、自身の経験から、男性でも「保育分野で女性の体を教えるのが困難」であることを否定した。

小・中学校の学校長の調査結果の背景は、学校長が語ったように、男性家庭科教員の【前例・実績のなさ】が要因であると考えられる。男性教員が、家庭科もちろん、保健科でも女性の体についてきちんと教えられている実績や経験があれば、小・中学校の学校長の認識は変化し、H2のように、男性教員を指導あるいは励ます立場になると考えられる。

ネガティブイメージとされる「家庭(科)や生活に関する知識・経験が浅い」、「調理や被服等の技術面を教えるのが困難」について、「少しそう思う」と回答した割合は2割以上いた。そもそも家庭科教員になりたいと思う人は、家庭科に対して、例え、生活経験が浅くても興味関心を持っており、調理もしくは被服の実習が好きだから目指そうと思うのである。一部の学校長と女性家庭科教員のジェンダー意識は旧態依然のまま、**「男性」と言うだけで「家庭科は教えられない」と思っていることが示唆された。**男性家庭科教員に対する見解を変えるためには、やはり、

男性家庭科教員の増員が必要不可欠であると考えられる。

4. 家庭科教員に期待する役割について

学校長は女性教員と同様、男性家庭科教員という存在は、生徒だけではなく保護者に対しても、これまでの性に対する固定観念を変え、「『家庭科＝女性』イメージを変える」教育的効果がある存在だと捉えていた。さらに、学校を運営する立場から、教科指導以外の生徒指導面で、男性の場合は男子生徒の対応や父親的役割を、女性の場合は女子への対応や母親的役割を期待していた。まだまだ「女子の対応は女性教員が最適であるため、男性には困難だ」「子育て＝女性」と捉えていることから、一部の学校長は、未だにジェンダー・バイアスに捕らわれていると考えられる。

海外の先行研究でも、男性教員に対して父親代わりを期待されることを明らかにしており⁸⁵、こうした文化は性別によって期待される役割がある。学校文化の一つとして井谷⁸⁶は、体育科の教員は、「コワイ生徒指導の役割」を持っており、女性体育教員が少ない理由になっていると述べている。つまりこれは、教科とどちらか一方の性をセットにし、その性役割を期待する学校文化の中のジェンダーが存在し、ジェンダーの再生産が行われていると考えられる。「母親役割」は家庭科の教員であることや、「コワイ生徒指導の役割」は体育科の教員である必要は、全くない。教科とどちらか一方の性を固定化し、その役割を期待する学校文化をなくすためには、家庭科のみならず、技術、体育、音楽、保健と言った教

科や養護教諭も、両性ともにバランス良く存在することが重要なのである。

VI. まとめ

①小・中学校の学校長の質問紙調査の結果、学校長の男性家庭科教員が増えない主な理由は、「『家庭科＝女性』イメージがある」、「授業時間が減少し、採用人数が少ない」、「家庭科教員になりたい男子が少ない」、「男性が入学できる家庭科教員養成校が少ない」であった。一部の小・中学校の学校長には、伝統的な家庭科観を持っていると示唆する結果が得られたが、家庭科教員としての力量があれば、男性でも採用するとの回答を得た。

男性家庭科教員との勤務経験がある学校長はいなかったため、学校長が捉える男性家庭科教員に対する特徴は、想像の範囲内での回答ではあるが、男性教員と女性教員と、ほぼ共通していた。しかし、「保育分野で女性の体を教えるのが困難」について、「少しそう思う」「全くその通りだと思う」と回答した割合は、女性教員は4割以上だったことに対し、学校長は6割以上おり、女性教員と差異があった。そこで、学校長と女性教員の性差観を比較したところ、統計上では、学校長の性差観は低く、有意差は認められなかった。

②小・中学校の学校長のインタビュー調査の結果、男性家庭科教員が増えない主な理由は、【養成校の問題】、【男性家庭科教員の認知不足】であるため、男性も家庭科教員になれることを周知徹底することの重

要性が語られた。さらに、男性家庭科教員を採用した前例・実績があれば、男性家庭科教員が増えると推測していた。私立の女子校の採用の困難については、伝統的な建学の精神の象徴として女性家庭科教員を示す場合があること、授業が成り立たない可能性があることの2点が挙げられた。

家庭科教員に期待する役割は、教科指導以外の生徒指導面で、男性の場合は、男子生徒への対応や父親的役割を、女性の場合は、女子への対応や母親的役割を期待していたことから、一部の学校長のジェンダー・バイアスは強い可能性があることが伺える結果となった。

- ③小・中学校の学校長の結果は高等学校の場合でも妥当かどうかを検討するため、高等学校の管理職にインタビュー調査を行った結果、男性家庭科教員が増えない理由は、小・中学校の結果と共通した。しかし、「生活経験が少なくて家庭科が教えられない」ことに注目し、男性だけではなく、女性に対しても言えることで、生徒に広い視野を持たせることができる力量を持った家庭科教員が少なく、魅力的な家庭科の授業を構築していないこと、さらに、今の家庭科教育は、男性が踏み込めない教育内容、つまり、「女子向き家庭科」を継続している可能性があるかと推測していた。従って、この発言は、女性家庭科教員の質問紙調査において得られた、これまでの家庭科教育は「女子向き家庭科」を維持・継続している可能性を裏付けるものである、と考えられる。

男性家庭科教員の採用については、小・中学校の学校長の結果と同様、採用に性別は関係がないと語った。しかし、私立の女子校の場合、

伝統的な建学の精神の象徴として女性家庭科教員を示す場合があることや、授業が成り立たない可能性があることに加えて、人事異動がないため変化を望まない女性の見解があることが要因で、男性家庭科教員の採用に難色を示すのではないかと推測していた。

男性家庭科教員の特徴については、家庭科という教科は、教員が生活経験を教える・語ることが武器になるという理由から、小・中学校の学校長の結果で最も多かった「性別による特徴はない」を否定し、学校長自身の経験から、「保育分野で女性の体を教えるのが困難」という考えを否定した。

VII. 本研究の限界と今後の課題

今回、小・中学校の学校長の調査対象者は、20人（女性3人、男性17人）と少なかった。そのため、この結果を全国の学校長の傾向として一般化することは、困難である。

今後は、調査対象者の人数を増やし、再度、学校長の性差観を調査する必要があると考えられる。さらに、「私立」で「女子校」の採用については想像の範囲内であり、高等学校の学校長に至っては、調査対象者が2名である。調査対象者の人数を増やすと共に、公立・私立等も広げて調査を実施することが、今後の課題である。

終章

本研究の目的は、男性家庭科教員がなぜ増えないのかを、男性家庭科教員とその周辺の現状と課題を明らかにすることで把握し、真の「男女共修家庭科」の実現のための課題を検討することである。

この目的を達成するために、男性家庭科教員本人と、男性家庭科教員にとって身近な存在である同僚の女性家庭科教員と、教員の採用に係わる可能性のある学校長の3つの視点から分析を試みたものである。

終章では、これまでの調査結果から導き出した現状と課題を明らかにし、現行の家庭科教育について検討する。

I. 総括

ここでは、男性家庭科教員本人と女性家庭科教員、学校長からみた男性家庭科教員の現状を整理する。

①男性家庭科教員本人から見た現状

男性家庭科教員を対象に、2つの分析視角から、男性家庭科教員の現状を明らかにした。1つめは、他教科から家庭科に転科し、そのまま継続している教員と中断した男性教員との比較。2つめは、世代別による男性家庭科教員の比較である。その結果、男性家庭科教員が増えない要因は、採用者側に家庭科に対するジェンダー・バイアスがあること、そして、男性が入学可能な家庭科教員養成校が少ないことが挙げられた。現在、一定数の男性家庭科教員が存在しているのは、男性家庭科教員自

身が「男ジェンダー」に縛られていないこと、家庭科に対する意義を認識していることである。さらに、男性家庭科教員自身が、生徒の「家庭科＝女性」イメージを変え、多様な生き方のモデルになっていることを認識していることが、家庭科教員を継続する支えになっていることが、示唆された。

女性の同級生・家庭科教員との関係は世代によって変化し、課題はあるが、現在は良好な関係を築いている。このことから、女性の同級生・家庭科教員との関係は、男性家庭科教員が増えない要因になってはいないと考えられる。

②女性家庭科教員からみた男性家庭科教員の現状

女性家庭科教員を対象に質問紙調査を行ったところ、男性家庭科教員が増えない要因は、1 つめは、採用者側のジェンダー・バイアスが存在していること、2 つめは、そもそも家庭科教員になりたい男子が少なく、男性が入学可能な家庭科教員養成校が少ないこと、3 つめは、授業時間数の減少に伴う採用人数の減少である、と捉えていることが明らかになった。

女性家庭科教員も、男性家庭科教員に対し、生徒の「家庭科＝女性」イメージを変え、多様な生き方のモデルとして存在しているとの認識をもっており、男性家庭科教員との認識と共通していることが確認され、その多くが、男性が家庭科に参入するのを受け入れていた。しかし、ごく一部に根強いジェンダー・バイアスがあり、男性が家庭科に参入することを快く思っていないという事実が浮かび上がったことから、まだま

だ男性家庭科教員にとって、働きにくい環境であると考えられる。

女性家庭科教員の教育実践は、従来の「女子向き家庭科」を展開している可能性が高く、男子にとって興味がもてず、家庭科が好きな男子生徒が生まれにくいという現状が考えられる。従って、女性家庭科教員の教育実践は、「家庭科＝女性」イメージを継続している要因になっていることが明らかになった。

③学校長からみた男性家庭科教員の現状

次に、学校長を対象に、量的・質的調査を行ったところ、学校長からみる男性教員が増えない要因は、家庭科の授業時間数の減少に伴う採用人数の減少と、男性教員が採用された前例と実績のなさ、そして、現在も、従来の「女子向き家庭科」のままであるため、男性が踏み込めないことが挙げられた。

そして、学校長も、男性家庭科教員は生徒の「家庭科＝女性」イメージを変え、多様な生き方のモデルとして存在しているとの認識をもっていることが示されたが、一部に根強いジェンダー・バイアスがみられた。学校長のジェンダー・バイアスが直接、男性家庭科教員が増えない要因になっているとは言えないが、10年後の学校長のジェンダー・バイアスは、確実に変化していると考えられ、今後の変化が期待できることが示唆された。

Ⅱ．結語

男性家庭科教員がこれまで増えなかった主な要因は、①制度問題として、男性が入学できる家庭科養成校は限られていること。そして、②男性家庭科教員自身が「男ジェンダー」に囚われていること。③「女子向き家庭科」を継続する女性家庭科教員の教育実践があることである。そのため、④従来の家庭科観が払拭できず、家庭科に対する軽視が継続したことである。加えて、⑤教育政策上、家庭科の授業時間数は削減され、それに伴い、⑥採用人数そのものが減少し、男性が家庭科教員の免許を取得しても採用に結びつくことができていないのである。その結果、⑦多様な視点をもった授業展開と内容の充実が困難となり、家庭科のイメージは、従来のままという悪循環が存在することである。

これまで急速に男性教員が増えてこなかった直接の阻害要因は、国の教育政策によって、家庭科の授業時間数が削減され、それに伴い、家庭科教員の採用人数そのものが減少したという制度問題にあると考えられる。長澤ら⁸⁷と野中ら⁸⁸の研究によれば、家庭科の履修単位の減少とともに、専任教員のいない学校が多く、講師で補っている実態がある、との報告がなされており、筆者の考察を裏付ける結果を示している。

この解決策として最も重要なのは、「女子向け家庭科」から脱却するため、新しい家庭科の授業そのものの作り替えを行うこと、つまり、家庭科教育の革新が必要なのである。本当の意味での男女に開かれた新しい家庭科の授業実践を構築することにより、人々の意識改革が進み、ジェンダー平等に根差した社会が築かれ、誰もが人として豊かに生きることにつながるであろう。それだけではない。授業内容の充実が図れること

により家庭科への軽視が軽減され、多くの人々が、その重要性を認識するようになり、これまでの国の教育政策に影響を与え、家庭科の履修単位数が増え、この悪循環を断ち切ることができるのではないだろうか。それによって、男性が入学可能な家庭科教員養成校は増加し、制度問題が解消されると考えられる。

現在、数々の阻害要因が存在する中でも、わずかではあるが、男性家庭科教員として存在し続けている理由は、①男性の意識が変わり、家庭科教員が職業選択肢の一つになったこと、②加えて、男性自身がその存在意義を認識し、教えていて手応えを感じることに、③さらに、男性が家庭科に参入することに対する周囲の理解と受容増えつつあることが挙げられる。

Ⅲ. 今後の課題－家庭科教育の革新のために－

1. 家庭科の教育実践の検討

本研究の結果、家庭科の内容が「女子向き家庭科」を引きずったまま、従来の家庭科観を払拭できていないことが、男性家庭科教員が増えない最大の要因であると同時に、家庭科教育の革新が重要であることが明らかになった。

例え、男性家庭科教員が増えたとしても、家庭科教員が教える内容が家事・育児の延長で、誰でもできると思われる程度しか教えられないのであれば、家庭科はいつまでも軽視されたまま悪循環を断ち切ることは

不可能となり、かつてのイギリスのように、家庭科に対する批判が展開される可能性がある。実際、戦後日本の学校教育の歴史には、家庭科廃止論が湧いたことがあるからだ。

今後は、女性だけではなく、男性も含む現場の家庭科教員の教育実践を収集・検討を行い、性別によってどう違うのか、また、男性家庭科教員の実践から、新しい家庭科教育を実現するためのヒントを明らかにし、「新しい家庭科」とは何かを具体化することである。そして、男女共修家庭科にふさわしい真の家庭科教育の実践が図れるよう、家庭科教員養成や教員研修に役立つ指導案の提案や指導書等の開発に貢献したい。

2. 教育政策者側の家庭科観の検討

男性家庭科教員が急激に増えなかった直接の要因は、教育政策上、家庭科の授業時間数が削減され、それに伴い、採用人数も減少したという制度問題が挙げられる。

家庭科の時間数は、1989年改訂学習指導領の実施年である1992年以降は、小学校では5、6年をあわせて140時間、中学校では3年間105～122時間、高等学校では3年間で4単位(140時間。高等学校の標準時間は単位数で示される)が当てられた。ところが、1998年(高等学校は1999年)改訂、2002年(高等学校は2003年)実施以降、学習指導要領には、小学校では115時間、中学校では87.5時間、高等学校は、それまで全員4単位のものを履修していたのが、2単位と4単位の選択が可能であることが示され、小・中・高等学校全体の家庭科の時間数は削減さ

れたのである。日本家庭科教育学会は、特に中学校の技術・家庭科の授業時間数について、現在、2週に1時間、3学年になると学期に2～3回しか授業がない状況から時間数の増加を国に訴えており、少なくとも週に1時間以上確保できるよう、要望している。この状況を鶴田⁸⁹は、「家庭科は芸術科について、時間数のうえでは弱小教科」になったと指摘している。さらに、親は読み書きができるのに、国語は家庭で教えることができる、とは誰も言わないが、家庭科に関しては、学校で教えることの否定論が出てくることについて、こう指摘している。「近代学校が職業生活に焦点をあてて出発したこと、また、長い歴史のなかで従属的な位置にあった女性が生活文化を担ってきたことと関係している」と。

家庭科の授業時間数を削減するにあたり、中教審等ではどのようなことが議論されたのかを明らかにして、日本の教育政策側のねらいを把握すると共に、家庭科は今後、どのような教科として位置づけられようとしているのかについて検討していきたい。

3. 海外の教育課程における家庭科の位置づけの検討

次に、ジェンダー平等の立場からの新しい家庭科を構築するために、海外の教育課程における家庭科の位置づけを調査することが課題として挙げられる。

例えば、アメリカの場合⁹⁰、19世紀の後半から「野心的な主婦」たちによって、「ドメスティック・サイエンス」として出発し、1899年以後からは、「ホーム・エコノミックス」に変わり、職業教育として発展して

いった。しかし、20世紀半ばには、その活動は伝統的な女性の領域に限られていたために、当時の「ホーム・エコノミクス」は男子が寄りつかず、失速していったという歴史がある。近年では、広い概念としてのキャリア教育の一環として捉えられており、「総合制」「男女共学制」を基本とする中等学校で主に行われている。小学校では家庭科はなく、高等学校では、選択教科として位置づけている州が多いようである⁹¹。

イギリスの場合は、J.Purvis⁹²によると、1870年代の家庭科は、男子ではなく女子の教育として結びついていたこと、とりわけ労働者階級や能力的に低い女子に対してだったことを指摘している。そのため、家庭科は低く見られ、学校で教えるのではなく、家庭で教えられるべきだと批判されたという。しかし、1980年代以降から人間的成長を促す包括的な教育課程が打ち出され、5歳から16歳までのすべての子どもたちが履修する家庭科がスタートした。近年は、雇用と市場ニーズに適した教育へと転換し、「デザイン&テクノロジー」に含まれる「フード・テクノロジー」として家庭科は存在している⁹³。

スウェーデンの場合は、「だれでも、いつでも、どこでも、ただで」学習できるという基本原理を掲げ、1982年以降から男女共修が実施された。しかし、家庭科の履修は基礎学校のみで、高等学校には家庭科の科目が存在していない。だが、ジェンダー視点は学校教育の全体目標として述べられ、家事労働や保育、家族、性とセクシュアリティなどについて関連教科で学習を保障している。

各国の家庭科の歴史的背景は様々である。今後は海外の教育課程について調査を深め、日本のジェンダー平等に根ざした家庭科教育を構築す

るためのヒントを得ることが課題である。

謝辞

本論文の作成にあたりまして、調査にご理解をいただき、ご協力くださいました家庭科教員の皆様方、小学校・中学校・高等学校の副校長・学校長の皆様方に心より感謝を申し上げます。有難うございました。

宇都宮大学准教授 良香織先生には、貴重な時間を割いていただき、インタビュー調査のスーパーバイザーとしてご指導、ご助言くださいましたことを、心より感謝を申し上げます。

指導教官の女子栄養大学教授 橋本紀子先生には、大学院入学時より研究の「いろは」から丁寧にご指導くださり、また、修士論文とは異なるテーマで、男性家庭科教員という稀有な存在を研究対象に選んだ筆者を辛抱強くご指導くださいました。未熟な私が調査から論文執筆までを成し遂げることができたのは、何よりも、橋本先生の真摯であたたかい励ましと、適切にご指導のおかげです。心から感謝申し上げます。また、教育学研究室の皆様には、様々な面でご指導、ご指摘をくださり、そのおかげで前に進めることができました。有難うございました。

本研究を進めることができたのも、多くの皆様のご協力とご指導をいただけたのおかげです。皆様のご協力がなければ、この研究をまとめることはできませんでした。この場をおかりして、心より感謝いたします。

引用文献

- 1 河村美穂：新家庭科教師論，とことん家庭科明日につなげる授業実践，家庭科の授業を創る会編，p8-17，教育図書株式会社（東京）（2009）
- 2 文部科学省：第3節家庭分野，中学校学習指導要領解説技術・家庭編，p38-69，教育図書（東京），（2008）
- 3 文部科学省：第2節教科の目標，高等学校学習指導要領解説家庭編，p7，開隆堂，東京（2010）
- 4 田部井恵美子：第一章家庭科教育の意義，家庭科教育，田部井恵美子・池崎喜美恵・内野紀子・青木幸子著，p7-17，学文社（東京），（2005）
- 5 良香織：家庭科教育における性教育その可能性を探る，SEXUALITY 60，p68-75，エイデル研究所（東京），（2013）
- 6 鶴田敦子：家庭科が狙われている 検定不合格の裏に p42，p173-175，朝日新聞（東京），（2004）
- 7 梶原公子：第一章戦前との連続性—家庭科教育前史（1890~1945年），女性が甘ったれるわけ 「女の美德」という神話，p13-42，長崎出版（東京），（2010）
- 8 朴木佳緒留：第二章 ジェンダーと家庭科の深い関係—家庭科の歴史的理解，ジェンダー・エクイティを拓く家庭科，（斎藤弘子・鶴田敦子・朴木佳緒留・丸岡玲子・望月一枝・和田典子），p53-86，かもがわ出版（東京），（2000）
- 9 石川尚子：第二章家庭科のあゆみ，家庭科教育法—中・高等学校の授業づくり—（中間美砂子 編著），p13-32，健帛社（東京），（2004）
- 10 鶴田敦子：第4章国家政策を担ってきた家庭科，家庭科が狙われている 検定不合格の裏に p105-128，朝日新聞，東京（2004）
- 11 鶴田敦子：第1章教科書は時代を映す，家庭科が狙われている 検定不合格の裏に p18-42，朝日新聞，東京（2004）
- 12 家庭科の男女共修をすすめる会編：家庭科、男も女も こうして拓いた共修への道，p6-182，ドメス出版（東京），（1997）
- 13 「イクメン」育児を積極的に率先して行う男性、育児を楽しんで行う男性を意味する。2010年のユーキャン新語・流行語大賞（日本語俗語辞典より）
- 14 「弁当男子」自分で弁当を作って会社に持っていく男性のこと。より広義に「自分で弁当を作る男性」とする見解もある。弁当男子が話題になりだしたのは、2008年12月の初旬。（ウィキペディアより）
- 15 木村涼子：第1章ジェンダーの再生産と学校，学校文化とジェンダー，p25-44，勁草書房（東京），（2002）
- 16 亀田温子・館かおる：学校をジェンダーフリーに，p41-165 明石書店（東京），（2000）
- 17 笹原恵：男の子はいつも優先されている？学校の「かくれたカリキュ

-
- ラム」, ジェンダーで学ぶ教育,(天野正子・木村涼子編)p84-101,世界思想社(京都府), (2003)
- 18 松川誠一: 子どもの目から見た友達, 学校教育の中のジェンダー 子どもと教師の調査から(直井道子・村松康子編),p70-85 日本評論社(東京), (2009)
- 19 スー・アスキュー/キャロル・ロス:第二章教室のダイナミックス、第三章学校という組織構造の中での差別, : 男の子は泣かない 学校でつくられる男らしさとジェンダー差別解消プログラム (堀内かおる訳), p32-93 金子書房(東京), (1997) :Boys don't cry, boys and sexism in education,(Sue Askew, Carol Ross),(1988)
- 20 Carrie Paechter , Goldsmiths College: Power, Bodies and Identity: how different forms of physical education construct varying masculinities and feminities in secondary schools, *Sex Education*,3(1),p47-57(2003)
- 21 川合あさ子訳: ,マイラ&デイヴィッド・サドガー著:「女の子」は学校でつくられる,時事通信社(東京),(1996): *Failing at Fairness: How Our Schools Cheat Girls*, (Myra and David Sadker)
- 22 Clark, Ann and Trafford, *Boys into modern languages: An investigation of the discrepancy in attitudes and performance between boys and girls in modern languages*, *Gender and Education*, Vol.7, No.3, p.315-325 (1995)
- 23 Alloway, Nola and Gilbert:Boys and literacy : Lessons from Australia, *Gender and Education*, Vol.9, No.1, p.49-58(1997)
- 24 Geen, A. G.:Equal opportunities in the curriculum : The case of home economics, *Gender and Education*, Vol.1, No.2, p.139-153(1989)
- 25 田中陽子:VI家庭科教員の採用と配置,日本家庭科教育学会編,家庭科教育 50 年, pp201-204,建帛社(東京), (2000)
- 26 七里京子・小島郷子・今野智津子・堀内かおる・福留美奈子・綿引伴子・鶴田敦子:12 の都道府県調査からみる中学校家庭科教育の実施状況(1)―家庭科教員の実態―,日本家庭科教育学会誌 42(9),p17-22 , (1999)
- 27 麓博之・杉井潤子:男性家庭科教師の現状と教育的効果,奈良教育大学紀要,54(1), p193-200 (2005)
- 28 大竹美登利・鈴木貴子:都道府県の教育ジェンダー格差指数の算出の試み:家庭科男性教員比率との関わりで,東京学芸大学紀要 総合教育科学系 59, p417-425,(2008)
- 29 吉野真弓・深谷和子:男性家庭科教員の意義と役割―生徒のジェンダー形成とのかかわりで―,日本家庭科教育学会誌 44 (3) ,p242-251, (2001)

-
- 30 伊藤敦：男子教員で愛知県家庭科教員養成事業に参加して,家庭科教育 68(15),p77-80,(1994)
- 31 香村和正：高等学校の家庭科担当教員養成事業,月刊生徒指導 3, p104-109,(1995)
- 32 田中和江：男性家庭科教員に関する研究動向,教育学研究室紀要－〈教育とジェンダー〉研究－(10),p52-61,(2013)
- 33 津止登喜江:男子の家庭科教員養成に関する実態調査について,家庭科教育,67(1),pp34-37,(1993)
- 34 文部科学省HP：中学校・高等学校教員（家庭）の免許資格を取得することができる大
学,http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/daigaku/detail/1287064.htm より (2015)
- 35 田中和江：男性家庭科教員の割合と養成校の現状と変遷について－既存の統計調査から－,教育学研究室紀要－〈教育とジェンダー〉研究－(12),p3-11,(2015)
- 36 堀内かおる:第 6 章男性家庭科教師のライフヒストリー,第 7 章家庭科専攻男子学生のライフヒストリー,第 8 章家庭科を学ぶ・教える男性のジェンダーと自己形成,教科と教師のジェンダー文化－家庭科を学ぶ・教える女と男の現在－,p112-171 ドメス出版（東京）,（2001）
- 37 小高さほみ：第 5 章「男」が家庭科教師を目指す時－揺れ動くアイデンティティ－,第 6 章実践コミュニティとしての「家庭科教員をめざす男の会」の生成と発展,教師の成長と実践コミュニティ,p141-238,風間書房（東京）,（2010）
- 38 阿部静:ジェンダー視点による家庭科教育－家庭科教育に携わる男性教師の活躍をめぐる－,福島大学 98 年度演習・卒業研究要旨,(1999),
<http://myriel.jp/june/seminar/s98-abe.html>
- 39 倉盛三知代:家庭科の男女共修問題と教師の性差意識について,家庭科教育 pp48-52
- 40 佐藤誠紀：1990 年代における〈新しい家庭科〉の一考察－家庭科を学ぶ・教える男性に着目して－,日本家庭科教育学会誌 47（3）, p285-286,(2004)
- 41 多々納道子：島根県の実態からみた小学校家庭科担当方法の課題－とくに男子教員の場合について－,日本教科教育学会誌 16(4),p133-142 (1994)
- 42 松木侃：小学校家庭科教育における男子教員の諸問題について,日本家庭科教育学会誌（15）,p13-17(1974)
- 43 中西雪夫:男性家庭科教員になって,家庭科教育 63(2) p18-22 (1989)
- 44 鈴木敏子『家庭科の男性教員と家庭科の授業について語ろう』家教連 家庭科教育 279, p24-26 (2008)
- 45 山梨八重子：養護教諭の複数配置についての一考察－男性養護教諭を

-
- 求める男子の声がかけるものー,日本教育保健学会年報(19)
p41-52 (2011)
- 46山本京世：養護実習に男子学生を受け入れてー養護教諭の性別に関する本校生徒の意識調査結果からー,全国国立大学付属学校連盟養護教諭部会編研究集録(36),p24-27(2001)
- 47山邊穂嵩・飯野矢住代：男性養護教諭に対する生徒の意識調査,日本医学看護学教育学会誌(22),p56-60.(2013)
- 48津村直子・冨野由紀子・安西幸恵・川内あかり・横堀良男・山田玲子：男性養護教諭に対する意識調査ー男性養護教諭勤務校の生徒の意識ー,北海道教育大学紀要,教育科学編 61(2),p145-155(2011)
- 49 村上智明・玉井加菜子・笹嶋由美・芝木美沙子・横堀良男：男性養護教諭の実態および意識に関する調査,日本学校保健研究(46),p452-453 (2004)
- 50 大野泰子・永石喜代子・米田綾夏・寺田圭吾・小林壽子：養護教諭複数配置と男性養護教諭ー質問紙調査からの検討 第2報ー,鈴鹿短期大学紀要(28),p95-107(2008)
- 51 川又俊則：養護教諭とジェンダー(2)ーあるベテラン男性養護教諭のライフヒストリーを中心にー,平成 22・23 年度学術研究振興資金研究報告書, p39-55(2012)
- 52 松下昌子：男性養護教諭の出現が意味するものー大阪の男性養護教諭への聞き取りからー,女性学年報(3),p76-92(2012)
- 53 Williams L. Christine: The glass escalator, Hidden advantages for men in the "female" professions, Social Problems vol.39(3), p 253-267, (1992) Still a men's -
- 54 Evans J: Men in Nursing, issues of gender segregation and hidden advantage, Journal of Advanced Nursing(26),p226-231 (1997)
- 55 Sargent Paul : Real man or real teacher? : Contradictions in the lives of men elementary teachers. Men and Masculinities, Vol. 2,(4), p410-433,(2000)
- 56 Smith Janet : Male primary teachers, The experience of crossing-over into pink-collar work, Verlag Dr Muller Aktiengesellschaft & Co,KG,p2-3(2008)
- 57 橋本紀子、茂木輝順、井上恵美子、森岡真梨、良香織：男女共学制が戦後の日本人のジェンダー平等意識に与えた影響に関する調査研究,教育学研究室紀要ー〈教育とジェンダー〉研究ー,10, p27-51,(2013)
- 58 中津裕子：〈データ収集方法〉を決めよう,Start Up 質的看護研究,p52-53,学研メディカル秀潤社,東京 (2013)
- 59 野口美和子(監訳)：第12章質的研究における真実の探求、ナースのための質的研究入門 研究方法から論文作成まで ,p171-179,医学書院,東京(2000) : Qualitative Research in Nursing, (Holloway,I.

Wheeler,S.),(1996)

- 60 中津裕子：〈倫理的配慮の方法〉を決めよう,Start Up 質的看護研究,p73-89,学研メディカル秀潤社,東京 (2013)
- 61 井上えり子：「文検家事科」の研究 文部省教員検定試験家事科合格者のライフヒストリー,p229-260,学文社(東京), (2009)
- 62 中間真一・鷺尾梓：仕事と子育て 男たちのワークライフバランス,p30-42,幻冬舎ルネッサンス,東京, (2010)
- 63 多賀太：男らしさの社会学 揺らぐ男のライフコース,37-40,世界思想社,東京,(2006)
- 64 浅井春夫：男性形成論概説,日本の男はどこから来てどこへ行くのか(浅井春夫・伊藤悟・村瀬幸浩 編著),p16,十月社,東京, (2001)
- 65 武藤八重子：男女共学をむかえる高校家庭科教員の意識,福島大学教育実践研究紀要,21,p1-6(1992)
- 66 原田曜平：第3章女子力男子はなぜ急増したのか,女子力男子 女子力を身につけた男子が新しい市場を作り出す.p59-86,宝島社,東京 (2014)
- 67 北林司・萩原英子・鈴木珠水・福島成貴・小野寺綾・五十嵐裕・宮城英紀・町田烈：臨床で男性看護師が経験する女性看護師との差異,群馬パース大学紀要(5),p653-658(2007)
- 68 木村涼子：第五章〈教育と女性解放〉の理論,学校文化とジェンダー,p121-122,勁草書房 (東京), (2002)
- 69 重松清編著：増補新版 教育とはなんだ,p12,ちくま文庫, (2008)
- 70 村瀬幸浩：男性解体新書 柔らかな共生と性教育の革新のために,p1-2,8-18,大修館書店,東京,(1993)
- 71 “人間と性” 教育研究協議会：季刊セクシュアリティ,28,p11-12(2006)
- 72 “人間と性” 教育研究協議会：季刊セクシュアリティ,51,p6-15(2011)
- 73 山田正己：父性看護学の確立への提言,看護学雑誌,66,p1018-1021, (2002)
- 74 伊藤裕子：性差観スケール,心理測定尺度 I ,p158-162,(2007)
- 75 野津美加・卯野木健：看護職のダイバーシティ推慮 男性看護師の採用推進と男女の協力で看護の質の向上を目指す,師長主任業務実践 17(364), p17-21,(2012)
- 76 幸村直子・富野由紀子・安西幸恵・川内あかり・横堀良夫・山田玲子：男性養護教諭に対する意識調査－現職養護教諭、教育委員会の意識－,北海道教育大学紀要教育科学編 60(2),p41-60(2010)
- 77 貝沼純・斎藤美代・佐藤尚子・宍戸朋子・林正幸：女性看護師が男性看護師に期待する職務・役割に関する調査研究,福島県立医科大学看護学部紀要(10),p23-30,(2008)
- 78 増田貴生・政岡祐樹・奥野信行・小西邦明・俵浩也・玉田和美・福島佳織：男性看護師に新人教育で関わった女性看護師の性差を感じた経験,第42回(平成23年度)日本看護学会論文集看護教

-
- 育,p188-191,(2012)
- 79 石川昭義・西村重稀・矢籐誠慈郎・森俊之・青井夕貴：保育所長の職員採用に係る意識に関する研究,仁愛大学研究紀要人間生活学部(4) p30-38,(2012)
- 80 杉原里美：いま子どもたちは 家庭科男子 2:朝日新聞朝刊,p34,(2014)
- 81 倉持清美・伊藤葉子・堀内かおる：男子高校生徒の家庭科保育教育の課題,東京学芸大学紀要 総合教育科学系,62(2),p219-221(2001)
- 82 杉原里美：いま子どもたちは 家庭科男子 1,朝日新聞朝刊,p35,(2014)
- 83 女子校ルール研究会：女子校ルール,p32-33,p140-147,中経出版（東京）,(2013)
- 84 男子校ルール研究会：男子校ルール,p28,中経出版（東京）,(2013)
- 85 Jim Allan: The persistent fewness of men elementary teachers: Hypotheses from their experiences. (Paper presented at the annual meeting of the Midwest Sociological Society), ERIC Document ED4188064, p1-26(1997)
- 86 井谷恵子：女性体育教員を取り巻く状況,学校をジェンダー・フリーに(亀田温子・舘かおる 編著),p306-308,明石書店,東京(2000)
- 87 長澤由喜子・荒井紀子・鎌田浩子・亀井佑子・川邊淳子・川村めぐみ・斎藤美保子・新山みつ枝・鈴木真由子・中西雪夫・野中美津枝・綿引伴子：高等学校家庭科の履修単位数・教員配置にかかわる実態－全国高等学校家庭科指導主事 2009 年度調査を通して－,日本家庭科教育学会誌,54(3)p185-193(2011)
- 88 野中美津枝・荒井紀子・鎌田浩子・亀井佑子・川邊淳子・川村めぐみ・斎藤美保子・新山みつ枝・鈴木真由子・長津田喜子・中西雪夫・綿引伴子：高等学校家庭科の履修単位数をめぐる現状と課題－16 都道府県の教育課程調査を通して－,日本家庭科教育学会誌 54(3),p175-183 (2011)
- 89 鶴田敦子：第 6 章「生活者」の家庭科へ,家庭科が狙われている 検定不合格の裏に,p162-181 朝日新聞,東京 (2004)
- 90 ローラ・シャピロ：プロローグー家政学の誕生,エピローグー家政学はなぜ失速したか,家政学の間違い(種田幸子訳),p9-21,314-343 昌文社,東京 (1991)
- 91 青木幸子：第 11 章諸外国の家庭科教育,家庭科教育(田部井恵美子、池崎喜美恵、内野紀子、青木幸子著),p232-249 学分社,東京 (2005)
- 92 Purvis, J., Domestic Subjects Since 1870, in Goodson, I.(ed.), Social Histories of the Secondary Curriculum : Subjects for Study, p170(1985)
- 93 磯崎尚子：イギリスにおける家庭科教育の教科の本質に関する研究－歴史的な視座からの検討－,富山大学人間発達科学部紀要,3(2)p19-30 (2009)

图表



図0-1：本研究の概念図

表 1-1：男性家庭科教員のインタビューガイド

大項目	中項目	小項目	継続者	元・家庭科教員
属性	取得免許	教員免許取得を教えてください	○	○
	経験年数	教員としてのご経験年数を教えてください	○	○
		家庭科教員としての経験年数を教えてください	○	○
		教員になる前に何か仕事をしていたら、何をされていたのか教えてください	○	○
動機	動機	家庭科教員を目指したのはなぜですか	○	○
ジェンダー形成	家族構成	あなたが生まれ育った家族構成とご自身が思う、家族のジェンダー観を教えてください	○	○
	ジェンダーの学び	ジェンダーに関することについて、どんなことを学びましたか	○	○
家庭科教育	自分が受けた家庭科	これまで学んできた家庭科の思い出を教えてください	○	○
		家庭科教員養成校で「男性」として大変だったことはありましたかあった場合、どんなことでしたか	○	○
		家庭科教員養成に関しての要望はありますか	○	○
	教える立場からの家庭科	あなたは「家庭科」を通じて何を教えたいですか また、授業を作る上で、どんなことを工夫・配慮していますか（していましたか）	○	○
		あなたが家庭科を教えるにあたって、生徒や周囲の人の反応はどうですか	○	○
		何か悩みはありますか。あった場合、どんなことがありますか	○	○
		家庭科教員を辞めた理由を教えてください		○

表 1-2: 元・家庭科教員と継続者の比較「家庭科教員になった動機」

	A	B	F	I	J
インタビュー	第二世代	第二世代	第二世代	第三世代	第三世代
世代別	第二世代	第二世代	第二世代	第三世代	第三世代
取得教員免許	高校数学・家庭	高校理科・家庭・情報 / 中学理科	高校数学・家庭・情報	高校数学・情報・家庭 / 中学家庭・数学	高校国語・書道・家庭・情報 / 中学国語
継続 / 中断	中断	中断	中断	中断	中断
研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生
逃避	困難校から脱出するため。人生の転機をはかりたい。			勤務校から異動する手段として。	国語が嫌いになり、書道の免許も取得。心機一転したかった。
受動的		校長が推薦。なすがまま。			
男女平等への共感・風潮			戦前から繋がる男尊女卑を引きずった社会に嫌悪感があり、高校家庭科共修は実質的な男女平等への大きな一歩と感じた。家庭科の男女共修の意義に共感。		
未知への好奇心	家庭科という未知の世界への関心。	訳の分からないものへの好奇心と、自己の成長への期待。			わからないから面白そうだと思う、飛び込んだ。
前の教科に対する物足りなさ					
家庭科のJ重要性・可能性					
生育歴・家族の影響	母の手伝いをしたり、料理やお菓子作りを楽しんでいた。結婚前から家事をしていたため、抵抗はない。	父の行動は、戦前の封建的な部分を色濃く残しており、家事のほとんどは母が担い苦勞していた。結婚後、家事をするようになり、家庭科教員になるのもおもしろいかな? と思った。	子どもの生まれで家事をするようになり、「まあ、いいかな」と思った。	叔父・叔母の様子から、性別役割意識を染み込まれてきたと感じる。母は少し働いていたが、父は全く家のことはしない。	

インタビュー	C	D	E	G	K
世代別	第二世代	第二世代	第二世代	第二世代	第三世代
取得教員免許	高校地歴公民・家庭/中学社会・家庭	高校家庭・福祉・地歴公民/中学社会	高校社会・家庭	高校理科・家庭・情報/中学理科	高校数学・家庭/中学数学・家庭
継続/中断	継続	継続	継続	継続	継続
研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生
逃避					移動のチャンス。ちよつと気分を変えたい
受動的					
男女平等への共感・風潮		社会科の教員として、以前から「これからの男子は家事育児をしなければいけない」と考えていた。男女平等という社会的な流れ。	法学部出身で、もともと人権の問題に関心があった。	予備校時代に男女平等について書かれた書籍を読んでから、洗濯は自分でするようになる。大学時代は男女平等について学ぶサークルで活動。	
未知への好奇心				もうちよつと他の世界も見たい。	
前の教科に対する物足りなさ	社会科の授業では「抽象的」「上澄みだけ」「滑って行ってしまふ」と感じ、家庭科教員になる以前から現実の生活問題を例にしていた。		社会科の教員なら格好つける必要があるが、家庭科なら飾らなくてもいい。自分を出せ、何時間でもやれるのは家庭科だと思っていた。	生物の授業で「生物学上における性別の違いは大したことはない」と話していた。もう少し直接的に男女平等の話をしてほしい。	
家庭科の]重要性・可能性	具体的な原点である日常生活を勉強したい、生活する上で必要な事と思ひ、研修に応募		組合の中で「家庭科は面白い」と話題にあがる。「男女共修を進める会」の人たちとの交流から、家庭科に興味関心をもつ。共修以前から、家庭科教員になる手だてを校長に相談。		専門は数学だが、生態学やエコロジーにも関心があった。家庭科でその分野を取り入れることができると思った。
生育歴・家族の影響		立ち合い出産、第一子の誕生を経験し、家庭科の授業がしたい、男性が(家庭科を・日常のこと)を行う生き方を見せたい、と思うようになった。	挫折した経験から、人と違ったことをすれば自分が勝てることを学ぶ。そのため、家庭科の先生になることに全く抵抗がなかった。一番の転機は、結婚・出産により、妻は姓を変え、仕事を辞めたこと。		母や祖母の針仕事を見ていて被服系の方が得意。幼少期から家の手伝いをしていたから男が家庭科をやることに抵抗がない。

表1-3:元・家庭科教員と継続者の比較「中断した理由」

インタビュー世代別	A 第二世代 高校数学・家庭	B 第二世代 高校理科・家庭・情報・/中学理科	F 第二世代 高校数学・家庭・情報	I 第三世代 高校数学・情報・家庭 /中学家庭・数学	J 第三世代 高校国語・書道・家庭・情報 /中学国語
取得教員免許	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生
継続/中断	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生
受動的		自分の意志ではなく、異動先の学校による。	家庭科教員は、一時的なもの。家庭科のカリキュラムの変わり目でもあった。	いずれ戻ることが前提で家庭科教員になった。	
女性家庭科教員との関係	「これは家庭科ではない」「小学生以下レベル」と女性教員から批判され、認めてもらえなかつた。女性特有の「果作り本能」が、男の家庭科教員の受け入れを拒絶したのではないか。				研究会に入ると、「男だから」と役職を押しつけられたり、意見を求められたりして、負担
業務が大変		実習が大変。実習助手がいないため、自分の時間ない。	他教科と比べ、責任が重い。授業に穴をあけられない。授産を重ね、体力的にきつく、元の教科の方が楽だから。	テストや提出物の採点、複数教科を受け持つなど、多忙。他教科と比べ、家庭科は教材研究が大変。	部活動を受け持つと、片付けや準備に時間が取られる家庭科は他教科に比べ、負担。
他教科への異動		情報の教員免許取得を校長から希望された。	情報の教員免許取得の機会があった。	情報の教員免許取得せざるを得なかった。	情報の教員免許取得の機会があった。
家庭科への軽視	学校の中で「家庭科は要らない」という雰囲気や、家庭科教員が軽んじられていた				

表1-4: 元・家庭科教員と継続者の比較「継続した理由」

インタビュー世代別	C 第二世代	D 第二世代	G 第二世代	K 第三世代
取得教員免許	高校地歴公民・家庭/中学社会・家庭	高校家庭・福祉・地歴公民/中学社会	高校理科・家庭・情報/中学理科	高校数学・家庭/中学数学・家庭
継続/中断	継続	継続	継続	継続
研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生
家庭科が好き ・ やりがいがある	家庭科は、日常生活の問題を自分なりに考え、自立していくために大事な教科だと思っていた。 私の人生を支える一つの柱のように捉えていたから。	家庭科は、実生活に根付いている教科であり、まさに「扇の要」だと思っている	もう少し家庭科をやってみたかったから。 家庭科は問題意識を持つことが出来る科目。生活体験が減少している今の子ども達たちにとって、家庭科の持つ役割は重要だと思う。	元の教科に戻ろうとそもそもなかった。
担任を続けたい				次の年に異動が決まっていたので、もう一年担任をやりたいかった。

表1-5:元・家庭科教員と継続者の比較「生徒の反応と影響」

インタビュー 世代別	A 第二世代 高校数学・家庭	B 第二世代 高校理科・家庭・情報/ 学理科	F 第二世代 高校数学・家庭・情報	I 第三世代 高校数学・情報・家庭/ 学家庭・数学	C 第二世代 高校地歴公民・家庭/ 学社会・家庭	D 第二世代 高校家庭・福祉・地歴公 民/中学社会	G 第二世代 高校理科・家庭・情報・/ 中学理科	K 第三世代 高校数学・家庭/中学数 学・家庭
継続/中断 研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	継続 A大・研修生	継続 A大・研修生	継続 A大・研修生	継続 A大・研修生
驚き	最初は珍しかった。		珍しいと思った生徒もいる かもしれない。	驚くのは最初だけ。後は 普通。	最初のあいさつでは、手 作りのベストを着て見せ、 びっくりさせた。男性とい うだけでも、驚かれる。	その当時は「変わって いる」「物珍しい」という のあった。		
不安					今の勤務校では、大丈夫 なのかという声があった。			
受容	生徒は、自然に受け入 れ、授業も真面目に取り 組んでくれ、ゆとりをもっ て楽しくやれた。未だに、食 事に誘われたり、結婚式 に呼ばれたりしている。		シヨッキングな感じでは、 生徒は思ってたような様 子。 特に騒がれたり、興味 津々という様子ではな かった。	後は別に普通。 最初の頃はエプロン付け ていると「かわいい」と言 われた。	これまで違和感はない な。	中学校で、技術と家庭科 を両方受け持つ男性教員 がおり、男性家庭科教員 の存在は違和感を感じて いない。しかし、家庭科の 先生＝女性というイメージ は根深い。		あまり気にしていなかった せいか、男性でもいいん じゃないかという感じ。あ まり意識せずにとや やりました。
「家庭科」らしく ない		生徒から、「化学か家庭科 か、わからぬ」と言われ る。できる子は食いつく。					生徒から「理科っぽい」と 言われ、「家庭科は自然 科学だ」と言い返す。生活 科学という観点は、いつも ある。	
存在自体が教 材							男性の家庭科の教員がい るだけで、ひとつの教材に なると思っている。	

表1-6:元・家庭科教員と継続者の比較「女性家庭科教員との関係」

インタビュー世代別	A 第二世代	F 第二世代	I 第三世代	J 第三世代	C 第二世代	G 第二世代	K 第三世代
取得教員免許	高校数学・家庭	高校数学・家庭・情報	高校数学・情報・家庭 /中学家庭・数学	高校国語・書道・家庭・情報 /中学国語	高校地歴公民・家庭 /中学社会・家庭	高校理科・家庭・情報・中学理科	高校数学・家庭/中学数学・家庭
継続/中断	中断	中断	中断	中断	継続	継続	継続
研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生
拒否	「これは小学生以下レベルだ」「家庭科ではない」と批判された。犬猿の仲になり、持っていた家庭科観が崩れた。着任時、一通り勉強したと答えたが、「勉強と教えられることは違う」と言われた。家庭科の担任を持たせないよう、「裏工作」された。女性家庭科教員から認めてもらえなかったのは、女性特有の『巣作り本能』が男の家庭科教員の受け入れを拒絶したため、と分析。	家庭科の教員としてのプライドが高いベテランから、拒否反応があった。			あまり良くなかった。家庭科観や教育観の違いが原因、と分析。		
警戒				家庭科教員としての経験がないのにも関わらず、役員をすぐに押し付けられる。意見を求められる。			最初は、「男で家庭科をやるのは、変わり者に違いない」と思われていたため、すごく警戒された。
男性役割の押しつけ							
良好・受容		若い人は、逆に吸収をするような姿勢があった。	結構女の先生方は、男の先生に優しくしてくれた。わからないことはたくさんあつたから、何でも聞いた。丁寧に教えてくれた。			同僚の方に恵まれ、本当に協力しながら出来た。一緒に勤務していく中で「普通」に接してくれた。	女性家庭科教員の夫と知り合っていたことから、面倒をみてもらった。
男性側の気づかい			独身ではなかったが、家庭科準備室にいつも二人でいるのは嬉しかった。そこで、全然関係のない教科の先生を呼び、3人でいるようにした。				
気が合わない人もいる							少人数教科なので、教員の合う合わないというのは、結構あると思う。

表1-7:元・家庭科教員と継続者の比較「女性家庭科教員以外の周囲の反応」

インタビュイ世代別	A	B	F	I	J	C	E	G	K
取得教員免許	第二世代	第二世代	第二世代	第三世代	第三世代	第二世代	第二世代	第二世代	第三世代
継続/中断	中断	中断	中断	中断	中断	継続	継続	継続	継続
研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生
反対	当時通っていた稲古仲間から、「何だ、有名大学を出て家庭科かよ」と言われた。当時、男子校では家庭科軽視があった。			家庭科教員になることに反対する教員がいた。元の教科の教員から無視された。			母親から、「なぜ家庭科なんかになるの？」と言われた。		家庭科教員の性別ではなく、進学・男子校で、3年になって(家庭科の)4単位を取得したため、「男子なのに」というクレームが(保護者から)あった
笑いが起こる						朝会で校長が、私が研修に行く伝えたところ、みんなが爆笑した。しかし、私の人格を馬鹿にしたものはなかった。			
転校した理由				「なんでなったの？」と聞かれた。					
驚き				同様からなぜ?と思われた。	驚かれ、聞き直されたりする。			保護者からは今でも珍しがられる。確認される。	
受容・応援				羨望のまなざしみたいなのは、あった。			今は、逆に自慢している様子。	今はもう全く問題ない。今の勤務校は前任者も男性家庭科教員だったので珍しいくない。	
わからない									あまり気にしてなかった。私のところまでこなかった感じ。
広告塔		県の推薦でテレビ取材が来て放送された。共働き夫婦でもあるため、男女共同参画社会の広告になった。					男性の家庭科教員が珍しく、講演などを頼まれる。		

表1-8:元・家庭科教員と継続者の比較「人間関係以外の困難」

インタビュー 世代別	A		I		C		D		E		G		K	
	第二世代 高校数学・家庭	中断	第三世代 高校数学・情報・家庭 /中学家庭・数学	中断	第二世代 高校地歴公民・家庭 /中学社会・家庭	継続	第二世代 高校家庭・福祉・地歴公民 /中学社会	継続	第二世代 高校地歴公民・家庭	継続	第二世代 高校理科・家庭・情報 /中学理科	継続	第三世代 高校数学・家庭 /中学数学・家庭	継続
取得教員免許	継続/中断	研修生	継続/中断	研修生	継続/中断	研修生	継続/中断	研修生	継続/中断	研修生	継続/中断	研修生	継続/中断	研修生
特定領域の 教授			経験できない出産・母乳に関して 教えにくかった。											
実技の力不足	被服実習等、興味深く楽しい が、いつも居残り					被服実習の実技が大変で、劣 等感を抱いた。							裁縫など経験がなく、知らない ことがいっぱいいて、いっぱい怒 られ、指導された。	
学習期間の 短さ					1年間の研修はイントロダクショ ンという感じ。 座学より観察・実験を通して、 具体的に自分の生活を対象化 したり、世の中を見ていくことを もう少し学びたかった。								一年間しか研修がなかったた め、授業の深みが出せるか、 生徒に興味をもってもらえるか 不安だった。	
特にない													そんなに大変な思いはしなかつ た。	
女子向き 家庭科の 名残			選択科目の被服を男子が学ば ずとすると、型紙が少なく大変。 教員が型紙を起す必要があ る。											
助手がいない													実習助手がいないため、準備 をすべて自分ですることが大 変。	
ネットワークが ない						定時制勤務のため、会合には 欠席。家庭科教員同士と出会 う機会がない。							ネットワークがない。男性家庭 科教員の数が大事。	

表 1-9: 世代別による比較「動機」

	A		B		F		C		D	
	第二世代		第二世代		第二世代		第二世代		第二世代	
インタビュー 世代別 取得教員免 許	高校数学・家庭 中断	高校理科・家庭・情報・/中学理科 中断	高校数学・家庭・情報	高校地歴公民・家庭/中学社会科・家庭 継続	高校家庭・福祉・地歴公民/中学社会 継続					
継続/中断 研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生					A大・研修生
逃避	困難校から脱出したい。バツイチの生活を变えたい。転職を探していた。給料をもらいながらゆったりできる。									
受動的	当時勤務していた校長から、家庭科教員養成の研修生の推薦を受けた。動機は不純、なすがまま。									
男女平等への共感・風潮			戦前から繋がる男尊女卑を引きずった社会に嫌悪感があり、高校家庭科共修は実質的な男女平等への大きな一歩と感じた。家庭科の男女共修の意義に共感。							家庭科教員の募集時、男女共同参画社会が叫ばれていた。 男女共同参画社会に興味関心があった。
未知への好奇心	家庭科という未知の世界への関心。		訳の分からないものへの好奇心と、自己の成長への期待。							
前の教科に対する物足りなさ										社会科の授業では「抽象的」「上澄みだけ」「滑って行ってしまふ」と感じ、家庭科教員になる以前から現実の生活問題を例にしていた。
家庭科の重要性・可能性	母の手伝いをしたり、料理やお菓子作りを楽しんでいた。 結婚前から家事をしていたため、抵抗はない。									具体的な原点である日常生活を勉強したい、生活する上で必要な事と思い、研修に応募
生育歴・家族の影響										父の行動は、戦前の封建的な部分を色濃く残しており、家事のほとんどは母が担い苦勞していた。 結婚後、家事をするようになり、家庭科教員になるのもおもしろいかな?と思った。
男性家庭科教員の可能性										
教員になる手段										

	E 第二世代	G 第二世代	I 第三世代	J 第三世代	L 第三世代
インタビュー 世代別	第二世代	第二世代	第三世代	第三世代	第三世代
取得教員免許	高校地歴公民・家庭	高校理科・家庭・情報・/中学理科	高校数学・情報・家庭/中学校家庭・数学	高校国語・書道・家庭・情報/中学国語	高校地歴公民・家庭/中学校社会・家庭
継続/中断	継続	継続	中断	中断	中断
研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	B大・科目等履修生
逃避		もうちょっと他の世界も見たい、研修生になると女子大に行ける。週休2日、夏季・冬期休暇もある。	勤務校から異動する手段として。	国語が嫌いになり、書道の免許も取得。心機一転したかった。	
受動的					家庭科の有資格者を作るため、勤務校の指示で。
男女平等への共感・風潮		予備校時代に男女平等について書かれた書籍を読んだから、洗濯は自分でするようになる。大学時代は男女平等について勉強するサークルで活動。			
未知への好奇心				わからないから面白そうだと思う、飛び込んだ。	新しいことをやってみるのも面白いかな。抵抗はなかった。
前の教科に対する物足りなさ	社会科の教員の時から、自分の生き方と理念が一致できない唖っぽさを感じていた。	生物の授業で「生物学上における性別の違いは大したことはない」と話していた。もう少し直接的に男女平等の話をしたいと思った。			
家庭科の重要性・可能性	組合の中で「家庭科は面白い」と話題にあがる。「男女共修を進める会」の人たちとの交流から、家庭科に興味関心をもつ。共修以前から、家庭科教員になる手だてを校長に相談。社会科の教員なら格好つける必要があるが、家庭科の教員なら飾らなくてもいい、と思った。法学部出身で、もともと人権の問題に関心があった。		子どもが生まれ、家事をするようになったから。	叔父・叔母の様子から、性別役割意識を染み込まされてきた感じている。母は少し働いていたが、父は全く家のことはしない。	母親は、専業主婦黄金時代に働いていた。
生育歴・家族の影響	病気でスポーツ選手の夢を断念、高校受験の失敗、といった経験から、人と違ったことをすれば自分を守れることを学ぶ。そのため、家庭科の先生になることに全く抵抗がなかった。一番の転機は、結婚・出産により、妻は姓を変え、仕事を辞めたこと。				
男性家庭科教員の可能性					
教員になる手段					

インタビュイ 世代別	P		Q		R		S		T	
	第四世代 幼稚園2種/小学校/高校家庭・理科/中学家庭・理科		第四世代 高校家庭/中学家庭/二種・特別支援		第五世代 高校家庭/中学家庭		第五世代 高校家庭・情報/中学家庭		第五世代 高校家庭/中学家庭	
取得教員免許										
継続/中断										
研修生										
逃避										
受動的										
男女平等への共感・風潮						高校時代は男女共修スタート時。男女平等について教科書に示されていたが、家庭では違うことに興味持ち始める。				
未知への好奇心										
前の教科に対する物足りなさ										
家庭科の重要性・可能性										高校の時に個性的な家庭科教員と出会い、家庭科に興味をもつ。勉強したことが実践的に活かせる、やりがいのある科目だと思った。
生育歴・家族の影響	父親から「ピアノは男がするものではない」と言われて習えなかった。小学校のクラブ活動では手芸クラブに入部。以前から折り紙を始め、作ることに興味があった。家庭科の先生などは、自分が好きなことを受け入れてくれた。	育った家は少なくともジェンダーフリーではない。しかし、「男だから女だから」と言われた記憶はそれほどない。	父親が帰って来て、何も無いというのが結構嫌だった。			褒められた経験があり、家庭科が好き。母親の影響で縫ったりするのが好き			同級生や先生に褒められた。子どもの時から裁縫や料理が得意だった	
男性家庭科教員の可能性										
教員になる手段	教員になる手段として、まだ男女共修以前だったので、中学時代の先生に複免で家庭科教員を薦められた。	教員になる手段として、第二候補の家庭科を薦められた。	料理が好きで家庭科の先生を目指す。もともと人と関わる職業を探していた。空手部を指導したい思いがあった。			情報の知識や裁縫の技術の両方活かせる家庭科の先生になりたいと思うようになった。			第一希望の夢が破れて、以前から興味があった家庭科教員に進路変更した。	

インタビュー 世代別	U 第五世代 高校家庭/中学家庭	V 第五世代 (専修)高校家庭/中学家庭/小学校/図書館教諭	W 第五世代 高校家庭/中学家庭	X 第六世代 高校家庭/中学家庭	Y 第六世代 高校家庭/中学家庭
取得教員免許 継続/中断 研修生	高校家庭/中学家庭	高校家庭/中学家庭/小学校/図書館教諭	高校家庭/中学家庭	高校家庭/中学家庭	高校家庭/中学家庭
逃避					
受動的				服飾関係で就活したが不採用に終わり、4月に1年契約の教員募集があった。1年後、空きが出て採用。	
男女平等への 共感・風潮	メディアも両親も「これからは男女平等」と言っていたが、行動と相違があり違和感を感じた。				以前から性別役割分業観に疑問をもっている。小学生の時は男子より女子と遊んでいた。
未知への 好奇心					
前の教科に 対する 物足りなさ					
家庭科の 重要性・ 可能性	家庭科を学んだところ、家庭科の重要性や面白さを知った。	家庭科を学んだところ、家庭科の重要性や面白さを知った。	家庭科を学んだところ、家庭科の重要性や面白さを知った。	中学生の時から服飾に興味があり、高校卒業後は服の勉強がしたいと思っていた。	中学生の時から服飾に興味があり、高校卒業後は服の勉強がしたいと思っていた。
生育歴・家族 の影響	両親共働きだが、家事は主に母親。妹は「女の子なんだから」と手伝いをし、進路にも影響があった。男はちゃんとした学歴を持ちなさいと、父親からよく言われた。料理が好きだった。	家族や親せきから、「長男だから家を継ぐ」と言われて育った。	以前より何か作ることが好きだった。父親がミシンを踏んでいたので、服を直すのは父の仕事。週末に作る父親の料理は凝ったものが多かった。	中学生の時から服飾に興味があり、高校卒業後は服の勉強がしたいと思っていた。「男なんだから～」と言われたことは全くない。	アニメや通っていた保育園で男性保育士の存在を知った。それを愛だと思わなかった。今思えば非常にプラスの経験。衣類の手入れや料理もする。女子より料理が出来たので楽しかった。「男だから～しなさい」と言われたことはない。
男性家庭科 教員の可能 性	男性が家庭科を教えることは、子ども達の意識を変えるのに影響があると思った。	大学時代に周囲から「女性的」と言われたことをきっかけに、自分のジェンダー観について悩んだ。その経験から、「多様な子がいても良い」ということを生徒に伝えたい。	男女共修になっても、家庭科＝女子という意識は変わらない。しかし、自分が家庭科の教師になることで、男性もこれまで女性の領域だった事も好きなのだ、ということを伝えたい。	親から大学進学を望まれ、被服の勉強ができる共学の大学を探す。入学後、家庭科の教員免許取得可能を知り、「男の家庭科の先生がいたらカッコいいかな、珍しいかな」と思い、取得。	教育実習が楽しかった。男が家庭科を教えることで生徒の反応がとも良く、家庭科の教員を決めた。心。
教員になる 手段	中学校から教師を志望していた。	最初は社会科で小学校の教師を目指していた。大学受験の際、合格できそうな家庭科に変更。	社会人になり、教員になるなら、被服のことを学ばなければならぬ、若いうちの方がいいと考え、進路変更した。		最初は保育士志望だったが、家庭科教員に進路を変更。

表1-10: 世代別による比較「生徒の反応と影響」

インタビュー 世代別	A 第二世代 高校数学・家庭 中断 A大・研修生	B 第二世代 高校理科・家庭・情報・/中学理科 中断 A大・研修生	F 第二世代 高校数学・家庭・情報 中断 A大・研修生	C 第二世代 高校地歴公民・家庭/中学社会・家 庭 継続 A大・研修生	D 第二世代 高校家庭・福祉・地歴公民/中学社 会 継続 A大・研修生	G 第二世代 高校理科・家庭・情報・/中学理科 継続 A大・研修生
驚き	最初は珍しかった。		珍しいと思った生徒もいるかもしれ ない。		これまで最初の授業の時には手作 りの服を着て見せたところ、「わへ、 すごい」という反響があった。 男性の家庭科教員だけで、驚かれ た。	その当時は「変わった」「物珍し い」というのはあった。
認識がない						
不安・不信・拒絶				今の勤務校では、大丈夫なのかと いう声があった。		
わからない						
受容	授業も真面目に取り組んでくれた。 生徒は、男性である家庭科教員の 自分を自然に受け入れてくれた。 拒絶することはなかった。		シヨッキングな感じでは、生徒は思っ てなかった様子。特に騒がれたり、 興味津々という様子ではなかった。	これまで違和感はなかった。		中学校で、技術と家庭科を両方受け 持つ男性教員がおり、男性家庭科 教員の存在は違和感を感じていな い。しかし、家庭科の先生＝女性と いうイメージは根深い。
「家庭科」らしく ない		生徒から、「化学か、家庭科かわか らない」と言う。できる子は食いつく。				生徒から「理科っぽい」と言われる。 「家庭科は自然科学だ」と言い返 す。生活科学という観点は、いつも 持っている。
職業選択の質問						
性別役割の強化						
多様な生き方の モデル・理解者						男性の家庭科の教員がいるだけ で、ひとつの教材になると思ってい る。

インタビュー 世代別	I		L		K		H		M		N	
	第三世代 高校数学・情報・家庭/中学家庭・数 学 中断 A大・研修生		第三世代 高校地歴公民・家庭/中学社会・家 庭 中断 B大・科目等履修生		第三世代 高校数学・家庭/中学数学・家庭 継続 A大・研修生		第三世代 高校英語・家庭/中学英語・家庭 継続 B大・科目等履修生		第四世代 高校家庭(専修)・地歴公民/中学社 会・家庭		第四世代 高校英語・家庭/中学英語・家庭	
取得教員免許 継続/中断 研修生	驚くのは最初だけ。		未だに驚かれる。その反応が面白 いと思う。		A大・研修生		B大・科目等履修生		勤務した中学校で、技術が女性、家 庭科が自身だったので、着任式の 時に生徒がかなり動揺した。		まず驚かれる	
驚き												
認識がない									生徒に、M氏が家庭科教員であると いう認識がない。			
不安・不信・拒絶											「教えられるの?」と言われる。	
わからない	よく分からない。											
受容	後は別に普通。 最初の頃はエプロン付けていると 「かわいい」と言われた。		後は全然。		あまり気にしていなかったせい、か、 男性でもいいんじゃない?という感 じ。前任者のやり方と違うことに戸惑 うことはあるが、性別で戸惑ってい る様子ではない。				生徒は、家庭科教員の性別よりも、 モチベーションを上げてくれる事を重 視していると思う。		子ども達の方が案外、すんなり受け 入れられていると感じる。生徒の教 名は、中学の時、男性家庭科教員 に教えてもらった経験がある。	
「家庭科」らしく ない												
職業選択の質問												
性別役割の強化												
多様な生き方の モデル・理解者							男の子が、性別を理由に「できない」 と言い訳することができなくさせる。 僕には性別役割意識がない。それ が授業で活かされていると思う。家 庭科を教える立場として、性別では なく人として見ることを、体感的に もっていることが強みだと思ってい る。				生徒から、性的マイノリティであるこ とを打ち明け、「先生は家庭科で男 の先生だから、分かってもらえるの では」と言ってくれた。	

インタビュー 世代別	O 第四世代	P 第四世代	Q 第四世代	R 第五世代	S 第五世代	T 第五世代
取得教員免許 継続/中断 研修生	高校家庭/中学家庭/小学校	幼稚園2種/小学校/高校家庭・理科 /中学家庭・理科	高校家庭/中学家庭/二種・特別支援	高校家庭/中学家庭	高校家庭・情報/中学家庭	高校家庭/中学家庭
驚き	驚かれるのは一回だけ		驚かれる。			着任式で校長から紹介された瞬間、みんなから驚かれた。
認識がない	最初は「自習監督」って言われた時期があった。					まだまだ自習監督に思われる。
不安・不信・拒絶		裏付きのスカートを教えていた際、女子生徒から「違和感がある」「男の人が教えるのか？」と言われた。「穿いたことないですよね？」と聞かれたので「ない」と答えた。		10年前は、「どうせできない」と思われていた		
わからない						
受容	後は何にも(反応は)ない。今は男性家庭科教員の存在に抵抗はない、と感じる。	保育で出産のあたりを教えた際、女子高生は嫌がるかと不安があったが、全然そんなことはなかった。「男性家庭科教員が珍しい」ということを、いま知った、という子もいる。	年々驚かれなくなってきた実感がある。4月の初めと学年末に前後比較の調査をしたところ、家庭科の教員は男性でもかまわない、の割合が増えた、という結果を得た。	最近、できないだろうと思われていない。		今の勤務校は、前任者が男性だったもので、それはない。
「家庭科」らしくない						
職業選択の質問					家庭科というより、「なぜスポーツ選手なのに家庭科の先生やっているのか」など言われる。	
性別役割の強化						
多様な生き方のモデル・理解者			授業後に男子生徒が、家庭科が好きだと言ってくれた。男性の僕が家庭科の内容を教えることで、生徒は「家庭科＝女ではない」という認識を持たせ、結構、ジェンダーフリーに繋がると感じる。 女の先生が男女平等について語るのと、男の人が男女平等について語るのとは、受け止め方が違うと思う。	女性家庭科教員が男女平等やジェンダーについて話すと、男子生徒は「理想論」に感じると思う。実際にやってくる男の人が目の前にいるので納得してくれる。		教え子(男性)が家庭科の先生になつたことが一番うれしい。男性家庭科教員が教えることによって、意識が変わったうれしい。

インタビュー 世代別	U		V		W		X		Y	
	第五世代 高校家庭/中学家庭	第五世代 専修・高校家庭/中学家庭/ 図書館教諭	第五世代 高校家庭/中学家庭	第五世代 高校家庭/中学家庭	第五世代 高校家庭/中学家庭	第六世代 高校家庭/中学家庭	第六世代 高校家庭/中学家庭	第六世代 高校家庭/中学家庭	第六世代 高校家庭/中学家庭	第六世代 高校家庭/中学家庭
継続/中断 研修生										
驚き	最初は驚かれる。 師範調理をするだけで歓声がおき る。		驚かれる。							最初は驚かれた。
認識がない		「先生、教室間違っているんじゃない の？」と言われた。								今の勤務校では、最初はクラスが間 違うと言われた。
不安・不信・拒絶			違和感の目で見られる。							女子高生から、「私より上手かったら 嫌」「男が料理するなんて、女子とし てはヤダっ」と言われた。
わからない										どうなのか、わからない。むしろこち らが聞きたいところ。もう、珍しさは ない。
受容										珍しいが故に生徒の心を掴み、非常 に授業がやりやすかった。
「家庭科」らしく ない										
職業選択の質問										
性別役割の強化	男性家庭科教員と結婚すると「家事 しなくて良い」と思う女子生徒がい る。									
多様な生き方の モデル・理解者	「オトメン」「草食系男子」という言葉 が流行った際、僕もそうなのか聞か れた。 男子生徒が「自分も家庭科の先生 になりたい」と言ってくれた。 生徒が「男性も(家庭科で行う内容 が)出来て当たり前」という感算を もってくれる。男が教えている時点 で「男だからできない」は通用しな い。									唯一、自分は、男の家庭科の先生 である立場を売るのは、ジェンダー のところ。

表1-11:世代別による比較「女性の家庭科教員養成時の同級生と家庭科教員との関係・反応」

インタビュー	A	F	C	D	G	I
世代別	第二世代		第二世代		第三世代	
取得教員免許	高校数学・家庭	高校数学・家庭・情報	高校地理公民・家庭/中学社会・家庭	高校家庭・福祉・地理公民/中学社会	高校理科・家庭・情報・/中学理科	高校数学・情報・家庭/中学家庭・数学
継続/中断	中断	中断	継続	継続	継続	中断
研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生
拒否	これは小学生以下レベルだ「家庭科ではない」と批判された。犬猿の仲になり、人間学として志してきた家庭科観が崩れた。着任時、「何か教えられませんか」と質問されたので一通り勉強したと答えたが、「勉強と教えられことは違います」と言われた。3年目、家庭科の担任を持つことに反対する家庭科教員は、違う学科の先生に担任をお願いする「裏工作」があった。女性家庭科教員から認めてもらえなかったのは、女性特有の『巢作り本能』が男の家庭科教員の受け入れを拒絶したため、と分析。	ベテラン教員は家庭科教員としてのプライドのため、研修生に対して拒否反応があった。	あまり良くなかった。家庭科観や教育観が違いが原因、と分析。			
警戒					最初は、「男で家庭科をやるのは、変わり者に達しない」と思われていたため、すごく警戒された。	
男性役割の押しつけ						
疎外感				定時勤務のため、会合には欠席。家庭科教員同士と出会う機会がない。		
良好・受容		若い人は、逆に吸収をするような姿勢があった。			同僚の方に恵まれ、本当に協力しながら出来た。知人だったので、安心された。一緒に勤務していく中で「普通」に接してくれた。	結構女の先生方は、男の先生に優しくしてくれた。わからないことはたくさんあったから、何でも聞いた。丁寧に教えてくれた。
男性側の苦手意識・気づかい						独身ではなかったがまだお互い若く、家庭科準備室にいつも二人いるのは嫌だった。そこで、全然関係のない教科の先生を呼び、3人でいることにした。
女性でもできない						
気が合わない人もいる					少数教科なので、教員の合う合わないというのは、結構あると思う。	

インタビュー	J	K	H	M	N	O
世代別	第三世代	第三世代	第三世代	第四世代	第四世代	第四世代
取得教員免許	高校国語・書道・家庭・情報/中学国語	高校数学・家庭/中学数学・家庭	高校英語・家庭/中学英語・家庭	高校家庭(専修)・地歴公民/中学社会・家庭	高校英語・家庭/中学英語・家庭	高校家庭/中学家庭/小学校
継続/中断	中断	継続	継続			
研修生	A大・研修生	A大・研修生	B大・科目等履修生			
拒否						若い人に伝えたいという思いから、「まだまだ何もできない」と叱られることがある。知らないことがあると、「そんなことも知らないの?！」と言われる。これまで仕事を回してもらったり励まされることもあったが、一緒に勤務すると違う。
警戒						一年目は何処までできるのか常に試され、見られている気がして、正直辛かった。
男性役割の押しつけ	家庭科教員としての経験がないのにも関わらず、役員をすぐに押し付けられる。意見を求められる。			調理実習では足を引っ張り、被服実習では採寸が出来なかった。女子の集団に入っていくのが辛かった。彼女らも、腫れ物にさわると、仲間作りが得意じゃない。同僚の女の先生は怖くて聞けない。相談できる人がいないのは辛い。		今まで家庭科教員は学校に一人だったので、複数家庭科教員が配置する学校に勤務して初めて、女性の世界に入ったと感じた。
疎外感				励まされた経験が多かった。男性家庭科教員が必要だとOGが言ってくれた。みんな教えあえないがやらせていたので、苦勞したとか大変だった事はなかった。学生の時、一人だったら肩身が狭いと不安に思っていたが、男性が他にもいた。		養成時は、仲間みたくないな感じ。
良好・受容		女性家庭科教員の夫と知り合いだったことなどから、面倒をみてもらった。				
男性側の苦手意識・気づかい						
女性でもできない			家庭科の免許を取りに来る人は手縫いができるだろうと思い、一生懸命練習した。周りを見たら、僕より下手な人だらけ。女の人もできない人はい			
気が合わない人もいる						

インタビュー 世代別	P		Q		R		S		T		U	
	第四世代		第四世代		第五世代		第五世代		第五世代		第五世代	
取得教員免許 継続/中断 研修生	幼稚園2種/小学校/高校家庭・理科/ 中学校家庭・理科		高校家庭/中学家庭/二種・特別支援		高校家庭/中学家庭		高校家庭・情報/中学家庭		高校家庭/中学家庭		高校家庭/中学家庭	
拒否												
警戒	教科主任の先生から、「当分は変えない でやってください」「男だからって、できな い事はないわよね」と言われた。											
男性役割の 押しつけ	家庭科部会等に行くと、経験がなくとも何 か発言を求められたり、役員を押しつけ られたりする。										男性目線での意見を求められることもある。 男女一緒に学ぶことは、これはこれで良 かった。	
疎外感			大学入学後の教ヶ月は女子集団に入っ ていくことがきつく、疎外感があった									
良好・受容	特に関係は悪くなかったと思う。		養成時、積極的に同級生に話しかけ、本 当に仲良くなつた。今でもつながりがあ る。今の勤務校は家庭科の教員は僕ひと り。しかし、教科のことで困った事があれ ば相談できる人が多くいるので、孤独感 は感じない。		学生時代、男とか関係なく、普通のクラス の雰囲気。変な目もなかった。		プライベートで遊ぶ友達はいなかったが、 女子集団の中でも気にしない。学校で初 めての男子だったので、先生はやさし かった。勤務校に2人家庭科教員がおり、 いろいろ教えてくれて勉強になる。有り難 い。		女の子から特別視されることも珍しがら れることもなかった。いろいろな面倒を見て いただいた。多分、悪く思われていな いと思う。		大変だなんて、人間関係的には、そんな にない。とても大切に扱ってくれている。 女性の先生にも、何か授業のこととかで 困ったことがあれば、いつでも相談してい る。	
男性側の 苦手意識・ 気づかい									一番苦手なのは女性家庭科教員。ずっと 少数で戦っているのでプライドが非常に 高く、頭が上がらない。別に嫌なわけ はない。			
女性でも できない												
気が合わない 人もいる												

インタビュー	V	W	X	Y
世代別	第五世代	第五世代	第六世代	第六世代
取得教員免許	専修・高校家庭/中学家庭/小学校/図書館教諭	高校家庭/中学家庭	高校家庭/中学家庭	高校家庭/中学家庭
継続/中断				
研修生				
拒否				
警戒				
男性役割の押しつけ	「男の人」で「珍しい」から家庭科の研究会に呼ばれる。ゼミの代表者決める時、男子がやるといふ暗黙の空気のものがあつた。			
疎外感	大学では、常に単独行動だと情報収集しにくい。疎外感に近いものがあつた。			
良好・受容	ゼミに入ってからには女性の同級生と一緒に「家庭科」についての相談は、大学の同期（女性）。同性ではない。		どの先生も相談に乗ってくれる。	男性が家庭科を目指す事に、大学の先輩が好感を持ってくれた。応援やサポートもあるが、特別扱いされる感じでもない。同級生は、異性がいても気にしていない。
男性側の苦手意識・気づかい				
女性でもできない				
気が合わない人もいる				

表1-12: 世代別による比較「女性の家庭科教員養成時の同級生の同僚・周囲の反応」

インタビュー	A	B	F	C	E	G	H	I
世代別	第二世代	第二世代	第二世代	第二世代	第二世代	第二世代	第三世代	第三世代
取得教員免許	高校数学・家庭 中断 A大・研修生	高校理科・家庭・情報・ 中学理科 中断 A大・研修生	高校数学・家庭・情報 中断 A大・研修生	高校地歴公民・家庭 /中学社会・家庭 継続 A大・研修生	高校地歴公民・家庭 継続 A大・研修生	高校理科・家庭・情報・ 中学理科 継続 A大・研修生	高校英語・家庭/中学英 語・家庭 継続 B大・科目等履修生	高校数学・情報・家庭 /中学家庭・数学 中断 A大・研修生
継続/中断 研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	中断 A大・研修生	継続 A大・研修生	継続 A大・研修生	継続 A大・研修生	継続 B大・科目等履修生	中断 A大・研修生
反対	当時通っていた稽古仲間から、「何だ、有名大学を出て家庭科かよ」と言われた。 当時、男子校では家庭科軽視があった。				母親から、「なぜ家庭科なんかになるの?」と言われた。			家庭科教員になることに反対する教員がいた。元の教科の教員から無視された。
笑いが起こる				職員集会で校長が、私が家庭科教員養成の研修に行くを発表すると、みんなが爆笑した。しかし、私の人格を馬鹿にして、ではない。				
職業選択の 質問			同僚からなぜ?と思われた。					なぜなったのか聞かれた。
驚き						保護者からは今でも珍しがられる。確認される。		
受容・応援			羨望のまなざしもあった。		今は、逆に自慢している様子。	今ももう全く問題ない。今の勤務校は前任者も男性家庭科教員だったので珍しくない。	昔は、男が家庭科を選ぶこと自体が有り得なかつた。男も家庭科が選択肢の一つになったと感じる。	妻は家庭科教員免許を保持していたので賛成してくれた。
わからない								
認識がない								
広告塔		県の推薦でテレビ取材が来て放送された。男女共同参画社会の広告になった。			男性の家庭科教員が珍しく、講演などを頼まれる。			

インタビュー	J	K	L	N	O	P	Q	R
世代別	第三世代	第三世代	第三世代	第四世代	第四世代	第四世代	第四世代	第五世代
取得教員免許	高校国語・書道・家庭・情報 / 中学国語 / 中断	高校数学・家庭 / 中学数学・家庭 / 中断	高校地理公民・家庭 / 中学社会・家庭 / 中断	高校英語・家庭 / 中学英語・家庭	高校家庭 / 中学校	幼稚園 / 小学校 / 高校 / 家庭・理科 / 中学家庭・理科	高校家庭 / 中学家庭 / 二種・特別支援	高校家庭 / 中学家庭
継続 / 中断	中断	継続	中断					
研修生	A大・研修生	A大・研修生	B大・科目等履修生					
反対		男女共修直後の年。進学・男子校の最終学年で、4単位の家庭科を履修することに「男子に家庭科」というクレームが保護者から出た。		母親は、自分が家庭科教員であることを認めていない、と感じる。父親は、男が家庭科をやるのが考えられない様子。大人の方が頭が固い。		父親は、家で家庭科の復習することにも快く思っていないかった様子。	同級生に家庭科の教員になると言ったら心配された。	男性でも家庭科の教員になれることを知らなかった親は反対した。男でもなれることを母親に説明。
笑いが起こる								
職業選択の質問					4、5年前まで、なぜ家庭科なのかよく聞かれた。			
驚き	驚かれ、聞き直されたりする。		生徒の保護者が驚く。	家庭科の教員であると話す、未だにどこでも驚かれる。		ものすごく珍しがられる。	職員も驚かれた。	
受容・応援				今はなぜ家庭科が聞く人もいない。			両親が大学卒ではないため、大学進学に喜んでくれた。家庭科への反対はない。	大学に合格し、家庭科の教員になることを容認してくれた。
わからない		あまり気にしてなかった。私のところまでこなかった感じ。				母親は反対も賛成もなかった		
認識がない				保護者に家庭科の教員であることを認識されない。				
広告塔								新採用される3月末ぐらいに、男性の家庭科教員であることで電話取材があった。情報元は県教委。

インタビュー	S 第五世代	T 第五世代	U 第五世代	V 第五世代	W 第五世代	X 第六世代
世代別	高校家庭・情報/中学家庭	高校家庭/中学家庭	高校家庭/中学家庭	専修・高校家庭/中学家庭/小学校/図書館教諭	高校家庭/中学家庭	高校家庭/中学家庭
取得教員免許						
継続/中断 研修生						
反対	家庭科の先生や別の先生に、「家庭科の先生になるにはどうしたらいいんですか」って聞きに行ったら、「男の人はなれないよ」と言われた。中には、「ホント、家庭科教えられるの？」って嫌な感じで言う人もいた。					大学進学の際に、勉強について行けるか心配された。
笑いが起こる			「男なのに家庭科」と笑われた。			
職業選択の 質問		家庭科の教員になった理由を聞かれる。		何度も家庭科の教員になった理由を説明するのが面倒。他の科目だったら、そんなことはなかっただろうと思う。		
驚き	珍しがられる。「男性なのにすごい」と言う人もいる。		珍しがられた。	「男の人のために珍しい」と言われた。なぜ男だと珍しいのか悩んだ。		珍しがられる。
受容・応援					母親からの反対はない。	家庭科教員になることに反対されたことは今まで一度もない。父親は堅い仕事に就いてほしかったので、賛成だったと思う。
わからない						
認識がない						
広告塔						

表1-13: 世代別による比較「人間関係以外の困難」

インタビュー 世代別	A先生 第三世代		C 第三世代		D 第三世代		E 第三世代		G 第三世代		I 第三世代		L 第三世代		H 第三世代		K 第三世代		
	高校数学・家庭	中断	高校地歴公民・家庭/ 中学社会・家庭	継続	高校家庭・福祉・地歴公 民/中学社会	継続	高校社会・家庭	継続	高校理科・家庭・情報・ 中学理科	継続	A大・研修生	高校数学・情報・家庭 /中学家庭・数学	中断	高校地歴公民・家庭 /中学社会・家庭	継続	高校英語・家庭 /中学英語・家庭	継続	高校数学・家庭 /中学数学・家庭	
継続/中断 研修生	A大・研修生	中断	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	A大・研修生	中断	B大・科目等履修生	B大・科目等履修生	B大・科目等履修生	A大・研修生	A大・研修生	
特定領域の教授												経験できない出産・母乳 に関して教えにくかつ た。							
実技力の不足	被服実習等は楽しい が、いつも居残り。			被服実習の実技が大変 で、劣等感を抱いた。														裁縫など経験がなく、知 らないことがいっぱい で、いっぱい怒られ、指 導された。	
学習期間の 短さ			1年間の研修はイントロ ダクションという感じ。座 学より観察・実験を通し て、具体的に自分の生 活を対象化したり、世の 中を見ていくことをもう 少し学びたかった。						一年間しか研修がな かったため、授業の深 みが出せるか、生徒に 興味をもってもらえるか 不安だった。										
施設不足																			男子トイレの場所がどこ か分からない、少ない。
採用																			
特にない									そんなに大変な思いは しなかった。					なかったですね。教科と して慣れていなくて大変 だという事はあった。					やっている当時は、あま り意識していない。
女子向き 家庭科の 名残												選択の被服を男子が学 ぼうとすると、型紙が少 ないので大変。教員があ 型紙を起こす必要があ る。							
助手が いない									実習助手がいなかった ため、準備をすべて自分 がすることが大変。										
男性が 少ない								ネットワークがない。男 性家庭科教員の増員が 大事。											

インタビュー 世代別	M 第四世代		O 第四世代		P 第四世代		S 第五世代		T 第五世代		U 第五世代		W 第五世代		Y 第六世代	
	高校家庭(専修)・地歴 公民 /中学社会・家庭	高校家庭/中学校 /小学校	高校家庭/中学校 /小学校	幼稚園2種/小学校/高 校家庭・理科/中学校家 庭・理科	高校家庭/中学校 /中学校	高校家庭・情報 /中学家庭	高校家庭/中学校	高校家庭/中学校	高校家庭/中学校	高校家庭/中学校	高校家庭/中学校	高校家庭/中学校	高校家庭/中学校	高校家庭/中学校	高校家庭/中学校	高校家庭/中学校
取得教員免許																
継続/中断																
研修生																
特定領域の教 授																
実技力の不足																
学習期間の 短さ																
施設不足																
採用																
特にな い																
女子向き 家庭科の 名残																
助手が いない																
男性が 少ない																

表 2-1：女性家庭科教員・調査枠組み

大項目	中項目	小項目	質問項目
属性	年齢	年齢	1-1
	家庭科教員としての経歴	教員歴	1-3
		取得免許の種類	1-4
	出身大学	在籍した学部	1-5
		共学・女子大	1-6
	勤務校について	勤務形態	1-2
		学科・共学か別学	1-7
		担当領域	1-8
	女性家庭科教員の意識と実態	男性家庭科教員との経験	一緒に働いた経験
男性と一緒に学んだ経験			1-6
男性家庭科教員に対する意識		男性家庭科教員の特徴	【3】
男子生徒との関わり		男子生徒に対する興味関心を引くための工夫	4-2
		家庭科教員を目指す男子生徒の有無	4-3
生徒の家庭科観		性別による学習意欲の差の有無	4-1
ジェンダー観		ジェンダー・セクシュアリティの学びの有無	1-9
		男性が家庭科の領域に入る事への居心地悪さ	2-3
		性別による家庭科の領域・分野の有無	4-5
		性役割尺度	【5】
家庭科教育の現状	ジェンダー視点から見る家庭科に対するイメージ	家庭科が好きな男子への評判	4-4
		採用時、性別は問われるか	2-2
	家庭科教育の課題	男性家庭科教員が増えない要因	2-4

【女性家庭科教員】質問紙調査の結果

表2-2 調査対象者の年齢 年代別区分 (n=389)

	n	%	平均年齢
20代	35	9.0	50
30代	42	10.8	
40代	153	39.3	
50代	116	29.8	
60代	43	11.1	

表2-3 調査対象者の教員歴 (n=434)

	n	%
1年目	14	4.1
2～5年目	38	11.1
6～10年目	33	9.6
11～20年目	142	41.4
21～30年目	116	33.8

表2-4 調査対象者の出身学部 (n=433)

	n	%
家政学部	290	67.0
教育学部	68	15.7
その他の学部	75	17.3

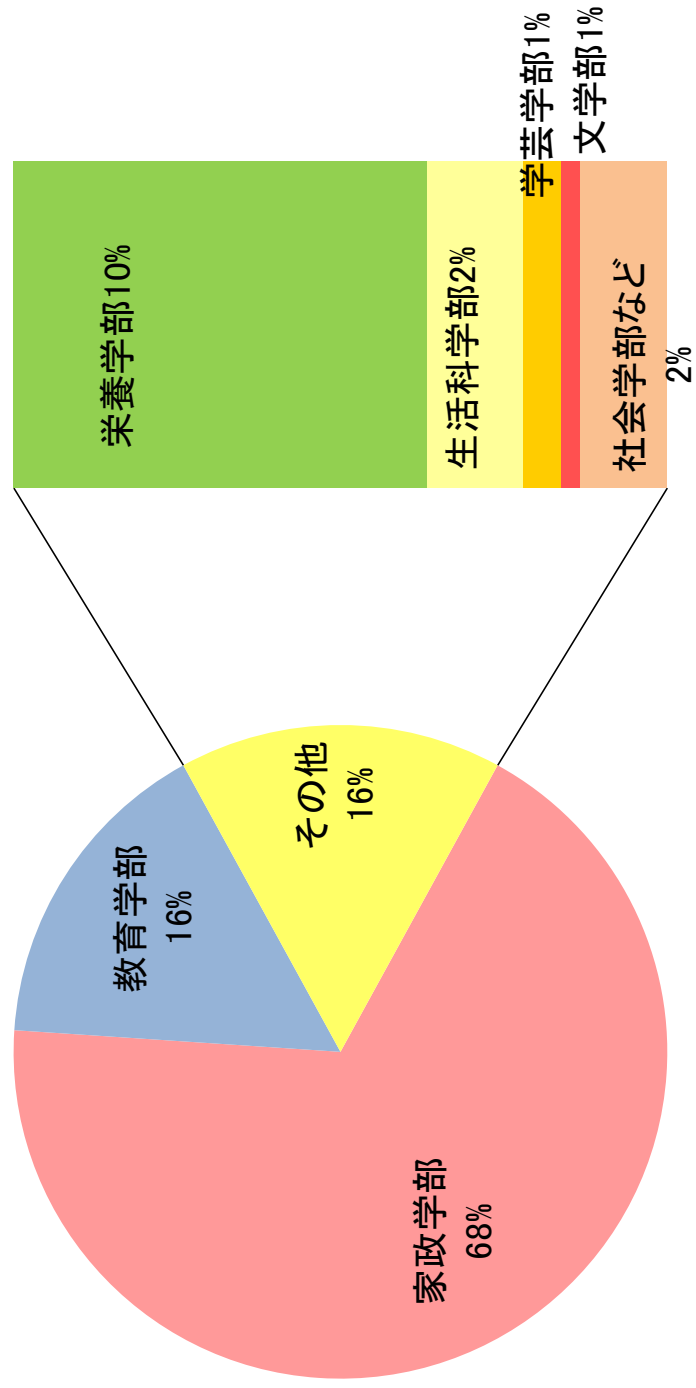


図2-1：出身学部

表2-5 調査対象者の勤務形態 (n=434)

	n	%
正規採用	360	82.9
臨時採用	24	5.5
非常勤	50	11.5

表2-6 勤務校（複数回答）

	n	%	
校種別	国立	2	0.5
	公立	283	66.0
	市立	12	2.8
	私立	137	31.9
学科	普通科	322	74.0
	専門学科	98	22.7
	総合学科	37	8.6
	通信制	7	1.6
	定時制	9	2.1
	共学・別学	共学	354
女子校		52	12.4
男子校		17	4.1

表2-7 教えている科目（複数回答）

	n	%
家庭基礎	264	60.8
家庭総合	170	39.2
フードデザイン	130	30.0
子どもの発達と保育	98	22.6
課題研究	42	9.7
服飾文化	25	5.8
生活産業	15	3.5
生活と福祉	11	2.5
リビングデザイン	5	1.2
生活デザイン（生活技術）	4	0.9
消費生活	4	0.9
その他	125	28.8

表2-8 出身大学は共学か女子大か (n=433)

	n	%
共学	84	19.4
女子大	349	80.6

表2-9 男子生徒と学んだ経験 (n=432)

	n	%
ある	67	15.5
ない	365	84.5

表2-10 男性教員と一緒に勤務した経験 (n=432)

	n	%
ある	92	21.7
ない	331	78.3

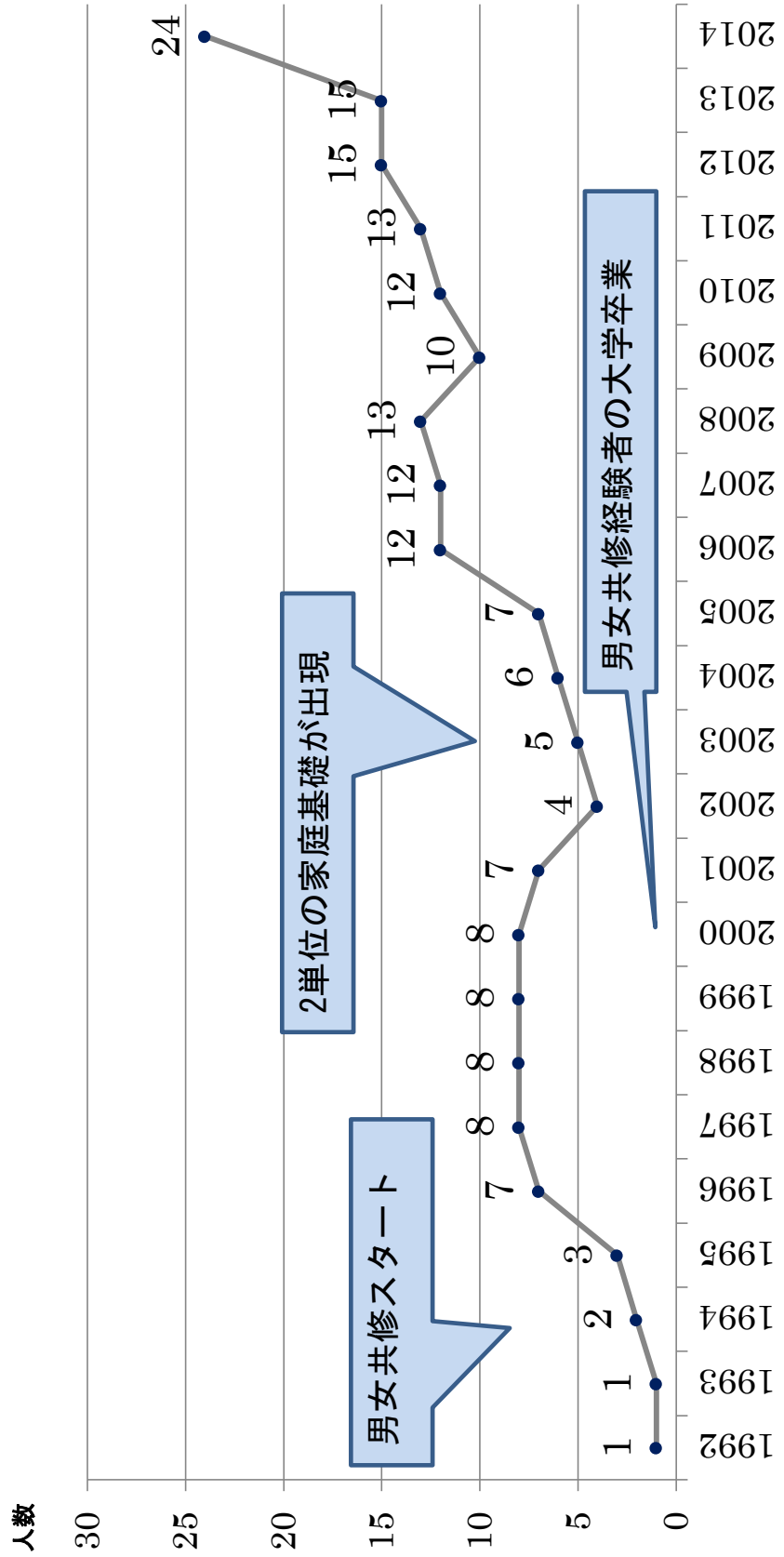


図 2-2：男性家庭科教員と一緒に勤務した経験のある女性家庭科教員の人数

表2-11 男性は能力があっても採用されにくいと思うかどうか (n=423)

	n	%
はい	36	8.5
いいえ	274	64.8
わからない	113	26.7

表2-12 男性が採用されにくい理由 (自由記述・複数回答)

	n
採用する側の問題	13
男性は生活経験が少ない	8
家庭科=女子のイメージ	8
女子生徒の採寸	2
女子校だから	2
採用試験に通らない	1
男性教員から聴いた	1
今は有利では?	1
時期尚早	1
保護者が不安をもつ	1

表2-13 男性家庭科教員が増えない要因 (複数回答)

	n	%
家庭科教員になりたい男子が少ない	227	66.1
男性が学べる教員養成校が少ない	224	58.2
採用人数が少ない	236	56.3
「家庭科=女性」のイメージ	158	37.7
わからない	9	2.1
その他	19	4.5

表2-14 男性教員が参入することに居心地が悪いと感じるか (n=414)

	n	%
はい	14	3.4
いいえ	400	96.6

表2-15 男性の参入が居心地が悪いと「男子と一緒に学んだ経験」、「一緒に勤務した経験」の関連

		一緒に学んだ		一緒に勤務した		
		ある	ない	ある	ない	
男性の参入が 居心地悪い	はい	n	1	13	5	9
		%	7.1%	92.9%	1.2%	2.2%
	いいえ	n	65	333	81	318
		%	16.3%	83.7%	19.6%	77.0%
Fisherの直接法		$\chi^2(1)=0.849$ $p=0.708(n.s.)$		$\chi^2(1)=1.949$ $p=0.163(n.s.)$		

表2-16 男性の参入が居心地が悪いと「年代別」との関係

			20代	30代	40代	50代	60代	計 n=372
男性の参入が 居心地悪い	はい	n	1	2	6	3	1	13
		%	5.0%	2.7%	4.8%	0.0%	2.9%	3.5%
	いいえ	n	41	63	120	120	15	359
		%	95.0%	97.3%	95.2%	100.0%	97.1%	96.5%
			$\chi^2(4)=1.555$	p=0.817(n. s.)	(p<0.05*, p<0.01**, p<0.001***)			

表2-17 居心地が悪い×性差観の t 検定

		N	平均値	標準偏差	t 値	d f	p 値
男性の参入が 居心地悪い	はい	14	2.1763	0.49485	2.669	412	0.008 **
	いいえ	400	1.8241	0.48491			
(p<0.05*, p<0.01**, p<0.001***)							

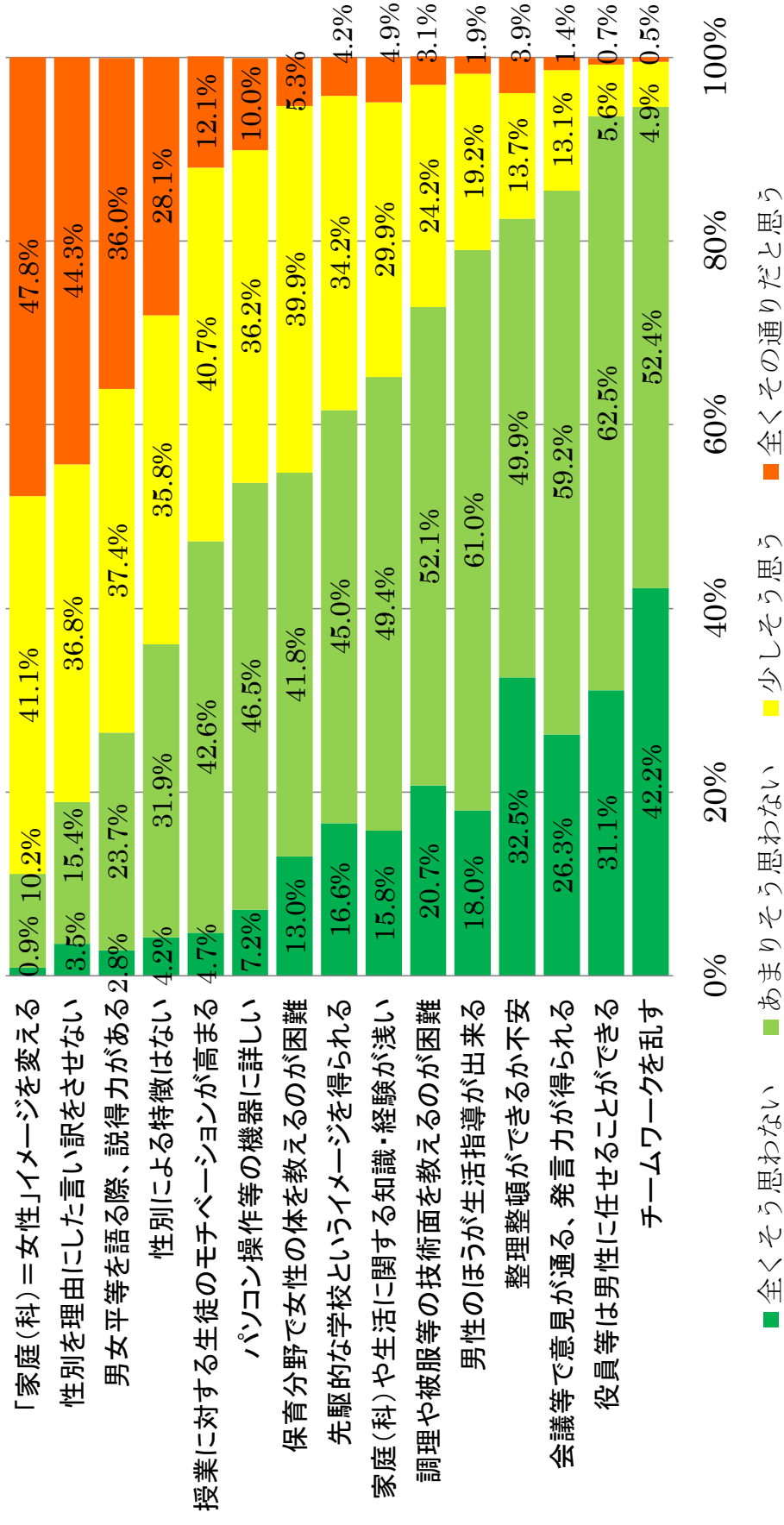


図2-3：女性家庭科教員が思う男性家庭科教員の特徴

表2-18 男性家庭科教員に対する女性教員の意識についての因子分析

	因子負荷量			共通性
	第一因子	第二因子	第三因子	
	伝統的な 男性主 導型因 子	ネガティ ブイメー ジ因子	ポジティ ブイメー ジ因子	
男性の方が役員を任せられる	0.967	-0.074	-0.131	0.833
男性の方が意見が通る、発言が得られる	0.655	0.102	0.049	0.504
男性の方が生活指導ができる	0.514	0.031	0.181	0.363
調理や被服等の技術面について教えることが難しい	-0.065	0.818	0.021	0.650
家庭(科)や生活についての知識や経験が浅い	-0.089	0.806	0.094	0.628
実習室や準備室等の整理整頓ができるか不安	-0.002	0.712	-0.071	0.596
保育分野において、女性の体について教えることが難しい	0.165	0.477	-0.133	0.283
家庭科教員同士のチームワークを乱す	0.073	0.471	0.014	0.424
男子生徒にとって、「男だから」という言い訳ができない	-0.065	0.138	0.798	0.616
男女平等などについて語る際、説得力がある	0.080	0.028	0.689	0.505
「家庭(科)＝女性」という生徒の意識を変えることができる	-0.040	-0.095	0.601	0.385
授業に対する生徒のモチベーションが高まる	0.105	-0.090	0.561	0.388
初期の固有値	3.054	2.604	1.507	
回転前の固有値	2.383	2.035	1.423	
回転前の寄与値	19.854	16.955	11.862	
回転後の固有値	1.900	2.456	1.954	
下位尺度得点	1.9033	2.0505	3.0586	
信頼係数(α)	0.746	0.787	0.756	

抽出方法: 一般化された最小2乗 回転法: kaiserの正規化を伴うオブリミン法

表2-19 女性家庭科教員の性差観に影響する要因についての重回帰分析(ステップワイズ法)

	回帰係数	標準偏差 誤差	標準化 回帰係数	t値	p	信頼係数の95.0% 信頼区間	
						下限	上限
定数	1.253	0.157		8.015	0.000	0.947	1.564
男性家庭科教員に対する ネガティブイメージ因子	0.215	0.045	0.243	4.783	0.000	0.127	0.304
男性家庭科教員が増えない理由 女性イメージを持っている	0.154	0.050	0.156	3.097	0.002	0.056	0.253
性別によって重要な領域があると思う	0.326	0.086	0.189	3.809	0.000	0.158	0.495
男性家庭科教員に対する 伝統的な男性主導型因子	0.151	0.046	0.165	3.288	0.001	0.061	0.241
勤務校は私立	0.156	0.054	0.144	2.87	0.004	0.049	0.263
年齢	-0.006	0.002	-0.121	-2.399	0.017	-0.010	-0.001
男子生徒から「家庭科の教員になりたい」と言われた経験がある	-0.139	0.060	-0.115	-2.33	0.020	-0.257	-0.022

n=310 調整済みR²=0.265

表2-20 20代×50代による性差観の多重比較法 (tukey)

	N	平均値	標準偏差
20代	44	2.0200	0.4425
30代	67	1.8563	0.4432
40代	131	1.8343	0.4940
50代	129	1.7870	0.5142
60代	18	1.7998	0.4665

20代×50代 $p=0.049$ ($p<0.05^*$, $p<0.01^{**}$, $p<0.001^{***}$)

その他の組み合わせは有意差なし

表2-21 生徒の性差による学習意欲 (n=418)

	n	%
違いはない	337	80.6
男子が積極的	7	1.7
女子が積極的	74	17.7

表2-22 性別による重要な分野・領域があるか (n=399)

	n	%
ある	44	11.0
ない	355	89.0

表2-23 男子生徒に対する工夫の有無 (n=397)

	n	%
工夫している	171	43.1
工夫しない	226	56.9

表2-24 男子生徒に対する工夫 (自由記述)

	n
実習・実験	43
「性別に関係ない、生活的自立の時代」と言う	35
具体例・身近な例を出す	17
科学的・理論的に説明	17
家事・育児に積極的な男性モデルを提示	11
スポーツ栄養学を取り入れる	10
男子視点や意見を取り入れる	8
褒めたり励ましたりする	5
家庭科ができるとカッコいい・モテる	5
PC・DVDなどを使用	3

表2-25 男子に対する工夫×性差観のt検定

	N	平均値	標準偏差	t 値	d f	p 値
している	171	1.95	0.445	4.266	395	0.000 ***
していない	226	1.75	0.5			

($p<0.05^*$, $p<0.01^{**}$, $p<0.001^{***}$)

表2-26 男子生徒から家庭科の教員になりたいと言われた経験の有無 (n=414)

	n	%
経験ある	82	19.8
経験ない	332	80.2

表2-27 男子に対する工夫×男子から家庭科の先生になりたいと言われた経験の χ^2 検定

		男性に対する工夫	
		はい	いいえ
男子から家庭科の先生になりたいと言われた	はい	n 40 % 49.4%	n 41 % 50.6%
	いいえ	n 131 % 41.6%	n 184 % 58.4%
Peason	$\chi^2(1)=1.596$	p=0.206 (n. s.)	

表2-28 家庭科が好きな男子は変わっていると聞いた頻度 (n=423)

	n	%
よく聞く	8	1.9
たまに聞く	129	30.5
聞かない	286	67.6

表3-1: 学校長の調査枠組み

大項目	中項目	小項目	質問項目
属性	年齢	年齢	4-1
	教員歴	教員歴	4-2
	性別	性別	4-3
	勤務校について	学校種	4-4
		男女共学別	4-4
専門教科	専門教科	4-5	
男性家庭科教員について	男性家庭科教員との経験	一緒に働いた経験	1-1
		教育的効果	1-2
	男性家庭科教員に対する意識	男性家庭科教員が増えない要因	1-3 1-4
		採用について	1-4 1-5
男性家庭科教員のイメージ	【2】		
性差観 学校長の	学校長のジェンダー観	性差観尺度	【3】

【学校長】質問紙調査の結果

表3-2 年代 (n=19)

	n	%
60代以上	1	5.3
59～55歳	14	73.7
54～50歳	4	21.0
平均	56歳	

表3-3 性別 (n=19)

	n	%
女性	3	15.8
男性	16	84.2

表3-4 教員歴 (n=19)

	n	%	平均
30～35年	11	57.9	34
36～40年	8	42.1	

表3-5 勤務校

	n	%
国立	0	0
公立	11	55.0
市立	9	45.0
私立	0	0
男子校	1	6.7
女子校	0	0.0
共学校	14	93.3
小学校	12	63.2
中学校	7	36.8

表3-6 担当教科 (n=18)

	n
小学校全科	4
数学・算数	3
社会	3
国語	2
保健体育	2
音楽	2
理科	1
美術	1

表3-7 男性教員と一緒に勤務した経験 (n=20)

	n	%
はい	0	0
いいえ	20	100

表3-8 男性は採用されにくいと思う (n=18)

	n	%
はい	2	11.1
いいえ	10	55.6
わからない	6	33.3

表3-9 力量があれば男性でも採用する (n=19)

	n	%
採用する	17	89.5
採用しない	1	5.6
わからない	1	5.6

表3-10 力量があれば男性でも採用する理由 (自由記述)

	n
力量・指導力・教育愛があれば	11
男性視点の授業が可能	1
男女平等に繋がる	1
男女共生の視点から	1
敬遠する必要はない	1

表3-11 男性家庭科教員が増えない要因（複数回答）

	n	%
「家庭科＝女性」のイメージ	13	26.0
採用人数が少ない	12	24.0
家庭科教員になりたい男子が少ない	12	24.0
男性が学べる教員養成校が少ない	9	18.0
生活経験がない	1	2.0
女性家庭科教員と良好な関係が築けない	1	2.0
わからない	1	2.0
その他	1	2.0

表3-12 男性家庭科教員ならではの教育的効果（自由記述・複数回答） n = 10

	n
男女に差はない	5
男子への影響・理解	3
食に関する意識を高める	1
授業規律の確保	1
男子の関心が高まる	1
性別役割意識がなくなる	1
差別意識がなくなる	1

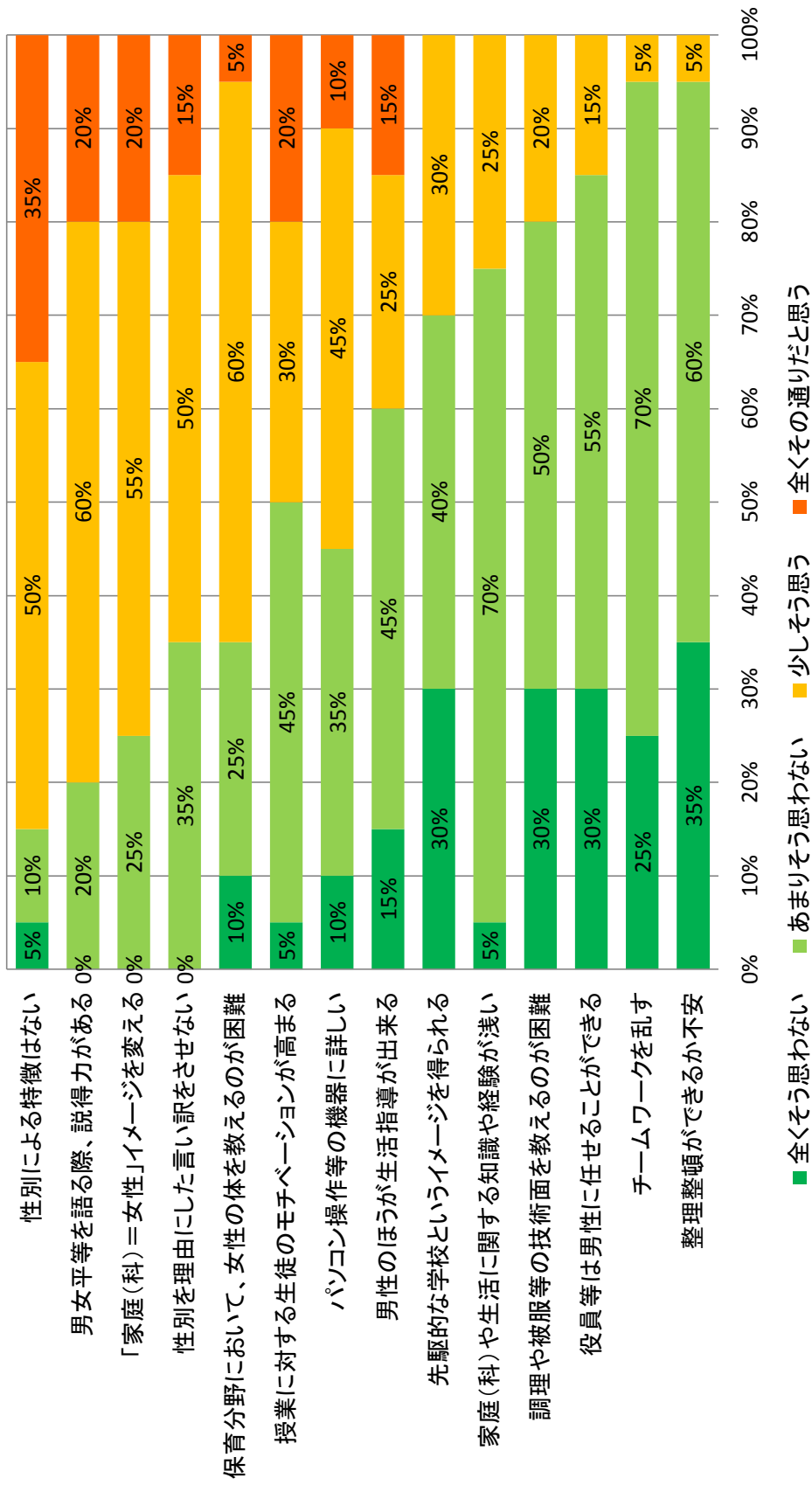


図3-1：学校長が思う男性家庭科教員の特徴

表3-13 学校長と女性教員×性差観のt検定

	N	平均値	標準偏差	t 値	d f	p 値
女性教員	434	1.8405	0.48964	0.201	452	0.840
学校長	20	1.8178	0.5624			

($p < 0.05^*$, $p < 0.01^{**}$, $p < 0.001^{***}$)

表3-14 【小・中学校の学校長】 男性家庭科教員が増えない要因

インタビュー	JH3	P1	JH1	JH2	P2
年度生まれ	20	30	31	33	34
教科	社会	保健体育	社会	小学校全科・社会	美術
教員歴	38年	36年	33年	34年	36年
学校種	小・中学校	小学校	中学校	中学校	小学校
養成校の問題	養成機関の考え方や伝統が男性が増えない原因になっている。今後は変わらざるを得ない。門戸を開いていければ、今の男の子は抵抗なく、どんどん参画してくる。	男性が家庭科の免許を取れる場がない。取得可能な私立大学が増えれば、当然増える。これまで、男性が家庭科教員免許を取得可能な女子大があることを知らなかった。	(男性が入学できる家庭科教員養成校の) 固知の方法が足りない。母数が多ければ、良い方がいるはず。	国立でも募集人数が少ないから、男子が少ない。男性も家庭科の教員免許を取得できる場があっても少ない、PRが足りない。男の子で頑張っている子が受けて受かっていく事実を作る。それには、母数が ^{必要} 増えれば増える。	女子大でも男性が学べる場を知らない。PRが足りない。
男性家庭科教員に対する認知不足			もっと男性も家庭科の先生になれることをPRする必要がある。		・家庭科の教員になりたい男性をこれまで見たことも聞いたこともない。男性も家庭科の教員になれることを知らない。
志望する男性が少ない				家庭科教員を志望する男子が少ない。	
授業時間の減少		技術・家庭科は授業数が限られており、資格を取ってもなれないイメージが強い。		授業時間が少ない技術教科は、教員の数が少なくて済む現状がある。	
伝統的な家庭科観	「男は外・女は家」「男尊女卑」というような考え方・意識が払拭しきれない。特に年齢の高い方に根強い。	「家庭科＝女性」だった歴史の流れ。		「家庭科＝女性」イメージがあるのは事実。これまでの過去の経験値。	
前例・実績のなさ			・男性家庭科教員採用の実績・前例が少なく、「あえて男性を入れなくても」「危険領域・不安領域に踏み込まなくても良い」といった考え方があるのでは。	・男性の採用が増えないのは、過去に前例がないから。「卵が先か～」ではないが、男性が増えれば、変わる。	・男性家庭科教員の具体的事例があるかと、説得力があるのでは。
今後二期待	これから10年間ぐらいの中で、大きく変わる。40代以下の人は、性別に捕らわれないような家庭教師をする。共働きで頑張っている家庭では、お互いにフォローし合うっていうのは、自然にできている。				

表3-15 【小・中学校の学校長】男性家庭科教員の採用

インタビュイ	JH3	P1	JH1	JH2	P2
年度生まれ	20	30	31	33	34
教員歴	社会 38年	保健体育 36年	社会 33年	小学校全科・社会 34年	美術 36年
学校種	小・中学校	小学校	中学校	中学校	小学校
受け入れる側の意識	<p>・採用側は年齢的に高い方が中心であるため、これまでのイメージや、意識の上での抵抗感って言うのは、まだある。(特にインタビュアークーらしいの世代は)</p> <p>・「女子校だから」という固定観念がある。</p> <p>・女の先生側にも「家庭科＝女子」というイメージがある。</p> <p>・生徒は、男性であることに気にするのとは最初だけ。</p>	<p>・男性でもいい。それこそ、逆セクハラでは。</p> <p>・若くてカッコ良い場合、女子生徒の憧れの的になり、授業が成り立ち立たない可能性が、なくもない。</p> <p>・他教科と同様、家庭科の内容を考えなくても性別に問題ない。</p>	<p>・採用側の意識が変わらないと、受からない。変わる必要がある。</p>	<p>・学校の建学の精神と校訓から、その象徴として「家庭科教員は女性」という趣旨があるのでは。</p> <p>・一般的な建学の精神の学校なら、女子校でも教員の性別は、全然関係ないと思う。</p>	<p>・教員採用試験で採点する人が、性別によるバイアスを持たないような工夫が必要。</p> <p>・力があれば男女の差は関係ないと思っっている人が大多数。</p>
力量があれば問題ない・抵抗ない	<p>・教員の意識は抵抗しないのでは。</p> <p>・制度的や男女共同参画社会が徐々に普及してきた。男性家庭科教員の参入が進んでいい。</p>	<p>・女性も社会進出しているなら、男性も家庭進出すべき。固定概念や既成概念にあまりこだわらない考え方だから。</p> <p>・(力量があり、採用試験が通れば)子ども、進出していった方がいい。</p> <p>・不安材料があっても、いくらでも方法があり、クリアにできる。</p>	<p>・学習指導要領で決まっている話をするのだから、男女の差はない。</p> <p>・必死でやっている人は、くだらないことを考えていない。</p> <p>・子どもにとっても、社会を変えていく上で、性別・年齢・経験値など様々な人がいるほうがバランスが良い。</p>	<p>・男性家庭科教員も悪くはない、と思っただ。性別は関係ない。</p> <p>・「女性同士なら」の部分はあるが、カバーはできる。</p>	<p>・男性家庭科教員も悪くはない、と思っただ。性別は関係ない。</p> <p>・「女性同士なら」の部分はあるが、カバーはできる。</p>
他の職業と同じ・比較	<p>・男性の養護教諭もパティエもいる。結局は一緒。変なところで分けていく。</p>	<p>・調理師・デザイナーなどの他職種にも、女性・男性がいる。</p>	<p>・これまで女性の職業だった業種に男性が増えている。</p> <p>・男性の養護教諭よりも、家庭科教員の方が「大丈夫さ」のハードルが低いので、採用しやすいのでは。</p>	<p>・今では男性の保育士が当然で、それに伴い女性イメージがなくなつた。</p> <p>・宮大工もトラックの運転手も、女性が増えている。</p>	<p>・今では男性の保育士が当然で、それに伴い女性イメージがなくなつた。</p> <p>・宮大工もトラックの運転手も、女性が増えている。</p>

表3-16 【小・中学校の学校長】家庭科教員に期待する役割

インタビュイ	JH3	P1	JH1	JH2	P2
年度生まれ	20	30	31	33	34
教科	社会	保健体育	社会	小学校全科・社会	美術
教員歴	38年	36年	33年	34年	36年
学校種	小・中学校	小学校	中学校	中学校	小学校
生徒への影響		<ul style="list-style-type: none"> 教育的効果はあると思う。 思春期の子ども達とのコミュニケーションが取れる。 		<ul style="list-style-type: none"> 子ども達にとって、職業選択の幅が広がる。固定観念をもたなくなり、非常に良い。 	<ul style="list-style-type: none"> 実技教科は、子どもの見えないところが見られる。生徒指導面で特に良い。 職業の選択の幅が広がる。 男女が協力しあう時代。そのため、男性も子育てのことを教えるのは良い。
男性の場合	<ul style="list-style-type: none"> 家庭、社会のあり方を変えていく突破口・出発点になる。 男性女性のあり方、意識を変える力になる。 学校そのものが変わる。 			<ul style="list-style-type: none"> 保護者に対しても、固定観念を持たない、視点が広がる。 	<ul style="list-style-type: none"> 特色のある学校という事でトピックになる。
家庭科のイメージを変える		<ul style="list-style-type: none"> 「看護婦」から「看護師」に名称が変わり、男性看護師が増えた。男性家庭科教員も増えれば、「家庭科＝女性」イメージが変わる。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭・地域の(特に女性)「家庭(科)＝女性」イメージを払拭する良いきっかけになる。 		<ul style="list-style-type: none"> 「家庭科＝女性」イメージが薄れる。特に女子。
母親的役割		<ul style="list-style-type: none"> 学校が荒れていた当時、問題を抱えた生徒は、家庭科・音楽の女の先生に話を聞いてもらいたいに行った。他教科の男性教員よりやさしいから、安心して話を聞いてもらえると、と思われていた。 			<ul style="list-style-type: none"> 「お母さん」のような存在は多様な家族にとって重要。
女子の対応					<ul style="list-style-type: none"> 保育分野は自分で体験しているから、女子生徒にとって、説得力がある。 女子生徒に注意したり、触れることができるが、男性だと難しい。

資料

【資料：女性家庭科教員対象・質問紙調査票】

女性家庭科教員 各位

女子栄養大学大学院 博士後期課程 2年
田中和江
指導教員 女子栄養大学 教授 橋本紀子

質問紙調査へのご協力をお願い

家庭科の男女共修が実現して約20年が経過し、学校教育の場における両性の平等が実現いたしました。しかし、男性家庭科教員の割合をみると、1%にも満たない現状があります。

これまで、男性保育士や男性看護師の研究は様々ある一方、男性家庭科教員については、個人のライフヒストリー研究や、生徒に対する教育効果についての調査しかなく、なぜ男性家庭科教員が増員しないのかの調査や、女性教員から見た男性家庭科教員に関する調査等を行っておりません。

そこで今回、女性家庭科教員の皆様に、女性の視点からみた、これまでの男性家庭科教員の現状と男性家庭科教員に対する意識についてお聞きし、家庭科教育の更なる確立と発展の一助にしたいと考えております。

下記の記入上の注意をお読みいただいた上で、ご回答くださいますようお願い申し上げます。

【記入上の注意】

- この調査に参加しないことによって不利益が生じることはありません。
- 回答は、濃い黒鉛筆（BまたはHB）、または黒や青のボールペンで記入してください。
- 質問紙には、名前を書かないでください。ここで答えたことは、すべて統計的に処理され、個人が特定されることはありません。したがって、ありのままを答えてくださるようお願いいたします。
- 答えにくいところは、回答せずにご提出いただいてもかまいません。
- この調査を通して得られたデータは厳重に保管いたします。また、調査結果を、報告書、学会発表、学会誌等に公表する際は、個人・学校が特定されるような方法での発表は一切いたしません。
- 質問紙のご提出をもちまして、本調査へのご協力に同意していただけたこととさせていただきます。
- 記入後は、返信用封筒（切手不要）に入れ、2014年 8月 31日までに投函くださいますようお願い申し上げます。

何か、ご不明な点等ございましたら、下記の連絡先まで、お気軽にお問合せください。

連絡先：女子栄養大学大学院 教育学研究室
博士後期課程 田中 和江
049-282-3600 tkb121@eiyo.ac.jp

【2】男性家庭科教員についてお聞きします

2-1	あなたは、男性家庭科教員と一緒に働いたことがありますか？(非常勤・臨採も含む)	1:はい 2:いいえ
	「はい」と答えた方にお聞きします。それは、いつ頃ですか？	西暦・昭和/平成 年
2-2	家庭科教員の採用において、能力があっても男性だと言うことで不利になることがあると思いますか？	1:はい 2:いいえ 3:わからない
	「はい」と答えた方にお聞きします。その理由を具体的に教えてください	自由記述
2-3	あなたは、家庭科の領域に男性家庭科教員が参入することに対し、心地悪さを感じますか？	1:はい 2:いいえ
	「はい」と答えた方にお聞きします。それはなぜですか？	自由記述
2-4	男性家庭科教員が増えない要因は何だと思いますか？(複数回答可)	1:家庭科の授業が減り、そもそも採用人数が少ない 2:「家庭科＝女性」のイメージがあるから 3:そもそも家庭科教員になりたい男子が少ない 4:男性が学べる家庭科教員養成校が少ない 5:わからない 6:その他 ()

【3】以下の文は、男性家庭科教員の特徴について書かれています。5段階の中から、あなたのお気持ちに一番近いものを1つだけ選び、○をつけてください。

		わ な い	全 く そ う 思 わ な い	あ ま り そ う 思 わ な い	う	少 し そ う 思 う	り だ と 思 う	全 く そ の 通 り
1	「家庭(科)＝女性」という生徒の意識を変えることができる	1	2	3	4			
2	授業に対する生徒のモチベーションが高まる	1	2	3	4			
3	男子生徒にとって、「男だから」という言い訳ができない	1	2	3	4			
4	男女平等などについて語る際、説得力がある	1	2	3	4			
5	パソコン操作等の機器に詳しい	1	2	3	4			
6	男性のほうが生活指導が出来る	1	2	3	4			
7	役員等は男性に任せることができる	1	2	3	4			
8	会議等で意見が通る、発言力が得られる	1	2	3	4			
9	先駆的な学校であるというイメージを得ることが出来る	1	2	3	4			
10	家庭(科)や生活についての知識や経験が浅い	1	2	3	4			
11	調理や被服等の技術面について教えることが難しい	1	2	3	4			
12	保育分野において、女性の体について教えることが難しい	1	2	3	4			
13	実習室や準備室等の整理整頓ができるか不安	1	2	3	4			
14	家庭科教員同士のチームワークを乱す	1	2	3	4			
15	男性家庭科教員だからといって、性別による特徴はない	1	2	3	4			
その他、何か特徴があったら、お書きください								

【4】あなたの考えや経験についてお聞きします

4-1	あなたは、生徒の性別によって家庭科の学習意欲に違いがあると感じますか？	1: 違いはない 2: 男子の方が積極的 3: 女子の方が積極的
4-2	男子生徒に対し、あなたは家庭科に興味をもたせるための工夫を何かしていますか？	1: はい 2: いいえ
	「はい」と答えた方にお聞きします。 例えばどんなことですか？	自由記述
4-3	あなたは、男子生徒から「家庭科の先生になりたい」と言われたことがありますか？	1: はい 2: いいえ
4-4	あなたは、家庭科が好きな男性・男子は「女性的だ」「変わっている」といった意見を聞きますか？	1: よく聞く 2: たまに聞く 3: 聞いたことがない
4-5	あなたは、生徒の性別によって重要な家庭科の領域・分野があると思いますか？	1: はい 2: いいえ
	「はい」と答えた方にお聞きします *「いいえ」の方は【5】へお進みください	
	男子生徒 に必要なと思われる領域・分野は何ですか？①衣生活、②食生活、③住生活、④消費者教育、⑤環境、⑥家族・家庭生活の中から 3つまで選び、その理由 を教えてください	
	①衣生活 ②食生活 ③住生活 ④消費者教育 ⑤環境 ⑥家族・家庭生活	
	その理由を教えてください	
	女子生徒 に必要なと思われる領域・分野は何ですか？①衣生活、②食生活、③住生活、④消費者教育、⑤環境、⑥家族・家庭生活の中から 3つまで選び、その理由 を教えてください	
①衣生活 ②食生活 ③住生活 ④消費者教育 ⑤環境 ⑥家族・家庭生活		
その理由を教えてください		

【5】あなたの考え・思いについてお聞きします。世間では、女性と男性の違いについて、様々なことが言われています。以下の文について、あなたはどのように思われますか。4段階の中から、あなたのお気持ちに一番近いものを1つだけ選び、○をつけてください。

		そう 思わない	ど ち ら か と い う と そ う 思 わ な い	ど ち ら か と い う と そ う 思 う	そ う 思 う
1	男性は女性に比べ、人を使うのが上手である	1	2	3	4
2	女性が入れたお茶は、やはりおいしい	1	2	3	4
3	子どもを他人に預けてまで、母親が働くことはない	1	2	3	4
4	女性は男性に比べ、臆病だ	1	2	3	4
5	男性の性欲は、概して女性に比べて強い	1	2	3	4
6	家庭のこまごまとした管理は、女性でなくては、と思う	1	2	3	4
7	女性の優れた思想家は、あまり出ない	1	2	3	4
8	女性は、体力や精神力の点でパイロットなど人命をあずかる仕事には向いていない	1	2	3	4
9	体力において男性が勝る以上、社会のあらゆる場で男性が優位な地位を占めるのは、やむを得ない	1	2	3	4
10	男性と女性は、本質的に違う	1	2	3	4
11	セックスにおいて男性がリードするのは当然である	1	2	3	4
12	女性は視野が狭い	1	2	3	4
13	中学になると、男の子の成績の方が伸びる	1	2	3	4
14	一家の生計を支えられないような経済力のない男性は、男として失格である	1	2	3	4
15	女性は月経があるので、精神的に不安定である	1	2	3	4

		そう 思わない	ど ち ら か と い う と そ う 思 わ な い	ど ち ら か と い う と そ う 思 う	そう 思う
16	女性は何かにつけて責任を回避しがちである	1	2	3	4
17	たくましい精悍な体つきは、男の魅力として重要である	1	2	3	4
18	人前では、妻は夫を立てた方が良い	1	2	3	4
19	男はむやみに弱音を吐くものではない	1	2	3	4
20	男は背が高くなければ、と思う	1	2	3	4
21	理論的思考は、男性の方が優れている	1	2	3	4
22	最終的に頼りになるのは、やはり男性である	1	2	3	4
23	女性は男性に比べ、感情的である	1	2	3	4
24	子育ては、やはり母親でなくては、と思う	1	2	3	4
25	女性は男性に比べ、手先が器用である	1	2	3	4
26	女性は出産をする可能性があるため、男性と仕事の上で互角に並ぶのは無理である	1	2	3	4
27	冒険心やロマンは、男性の究極のよりどころである	1	2	3	4
28	女性が人前でタバコを吸うのは好ましくない	1	2	3	4
29	子どものことより自分のことを優先して考えるような女性は、母親になるべきではない	1	2	3	4
30	男性は女性に比べ、攻撃的である	1	2	3	4

お疲れ様でした。ご協力ありがとうございました。

【資料：学校長対象・質問紙調査票および半構造化面接法による調査依頼書】
学校長 各位

女子栄養大学大学院 博士後期課程3年
田中和江
指導教員 女子栄養大学 教授 橋本紀子

質問紙調査へのご協力のお願い

現在、家庭科の男女共修が実現して約20年が経過し、学校教育の場における両性の平等が実現いたしました。しかし、男性家庭科教員の割合をみると、1%にも満たない現状があります。

これまで、男性保育士や男性看護師の研究は様々ある一方、男性家庭科教員については、個人のライフヒストリー研究や、生徒に対する教育効果についての調査しかなく、女性教員から見た男性家庭科教員に関する調査はもちろん、なぜ男性家庭科教員が増員しないのかの調査や採用に関する調査は行われておりません。

そこで今回、学校の運営に携わる皆様に、これまでの男性家庭科教員に対する意識や男性家庭科教員の採用についてお聞きし、家庭科教育の更なる確立と発展の一助にしたいと考えております。

下記の記入上の注意をお読みいただいた上で、ご回答くださいますようお願い申し上げます。

【記入上の注意】

- この調査に参加しないことによって不利益が生じることはありません。
- 回答は、濃い黒鉛筆（BまたはHB）、または黒や青のボールペンで記入してください。
- 質問紙には、名前を書かないでください。ここで答えたことは、すべて統計的に処理され、個人が特定されることはありません。したがって、ありのままを答えてくださるようお願いいたします。
- 答えにくいところは、回答せずにご提出いただいてもかまいません。
- この調査を通して得られたデータは厳重に保管いたします。また、調査結果を、報告書、学会発表、学会誌等に公表する際は、個人・学校が特定されるような方法での発表は一切いたしません。
- 質問紙のご提出をもちまして、本調査へのご協力に同意していただけたこととさせていただきます。
- 記入後は、返信用封筒（切手不要）に入れ、2015年 月 日までに投函くださいますようお願い申し上げます。

何か、ご不明な点等ございましたら、下記の連絡先まで、お気軽にお問合せください。

連絡先：女子栄養大学大学院 教育学研究室
博士後期課程 田中 和江
049-282-3600 tkb121@eiyo.ac.jp

男性家庭科教員に関する調査

【1】男性家庭科教員についてお聞きします

1-1	男性の家庭科教員と一緒に勤務したご経験はありますか？	1:はい 2:いいえ
	「はい」と答えた方にお聞きします。 それは、いつ頃ですか？	西暦・昭和/平成 年
	「はい」と答えた方にお聞きします。 男性家庭科教員ならではの教育的効果は、ありましたか？	1:はい 2:いいえ
1-2	男性家庭科教員ならではの教育的効果は、 どんなことがありますか(あると思いますか)？	自由記述
1-3	男性家庭科教員が増えない要因は何だと思 いますか？(複数回答可)	1: 家庭科の授業が減り、そもそも採用人数が 少ない 2: 「家庭科＝女性」のイメージがあるから 3: そもそも家庭科教員になりたい男子が少ない 4: 男性が学べる家庭科教員養成校が少ない 5: 生活経験が少なくて家庭科が教えられない 6: 採用されても女性家庭科教員との良好な関 係が結べない 7: わからない 8: その他(自由記述)
1-4	家庭科教員の採用において、能力があっても 男性だと言うことで不利になることがあると 思いますか？	1:はい 2:いいえ 3:わからない
	「はい」と答えた方にお聞きします。 その理由を具体的に教えてください	自由記述
1-5	学校長個人のお考えとして、家庭科教員として の力量があれば男性の家庭科教員を 採用したいですか？	1:はい 2:いいえ 3:わからない
	その理由を具体的に教えてください	自由記述

【2】以下の文は、これまで男性・女性家庭科教員の調査から得られた「男性家庭科教員の特徴」が書かれています。4段階の中から、先生のお気持ちに一番近いものを1つだけ選び、○をつけてください。

		全くそう 思わない	あまりそう 思わない	ややそう 思う	とてもそう 思う
1	「家庭(科)＝女性」という生徒の意識を変えることができる	1	2	3	4
2	授業に対する男子生徒のモチベーションが高まる	1	2	3	4
3	男子生徒にとって、「男だから」という言い訳ができない	1	2	3	4
4	男女平等などについて語る際、説得力がある	1	2	3	4
5	パソコン操作等の機器に詳しい	1	2	3	4
6	男性家庭科教員のほうが生活指導が出来る	1	2	3	4
7	役員等は男性の方が任せることができる	1	2	3	4
8	先駆的な学校であるというイメージを得ることが出来る	1	2	3	4
9	家庭(科)や生活についての知識や経験が浅い	1	2	3	4
10	調理や被服等の技術面について教えることが難しい	1	2	3	4
11	保育分野において、子育てや女性の体について教えることが難しい	1	2	3	4
12	実習室や準備室等の管理や整理整頓ができるか不安	1	2	3	4
13	女性家庭科教員との良好な関係を築けない	1	2	3	4
14	男性家庭科教員だからといって、性別による特徴はない	1	2	3	4
その他、何か特徴があったら、お書きください					

【3】先生の考え・思いについてお聞きします。世間では、男女の違いについて、様々なことが言われています。以下の文について、学校長個人としては、どう思われますか。4段階の中から、お気持ちに一番近いものを1つだけ選び、○をつけてください。

		そう 思わない	どちらか と いう ところ を 思 わ な い	ど ち ら か と い う と そ う 思 う	そう 思 う
1	男性は女性に比べ、人を使うのが上手である	1	2	3	4
2	女性が入れたお茶は、やはりおいしい	1	2	3	4
3	子どもを他人に預けてまで、母親が働くことはない	1	2	3	4
4	女性は男性に比べ、臆病だ	1	2	3	4
5	男性の性欲は、概して女性に比べて強い	1	2	3	4
6	家庭のこまごまとした管理は、女性でなくては、と思う	1	2	3	4
7	女性の優れた思想家は、あまり出ない	1	2	3	4
8	女性は、体力や精神力の点でパイロットなど人命をあずかる仕事には向いていない	1	2	3	4
9	体力において男性が勝る以上、社会のあらゆる場で男性が優位な地位を占めるのは、やむを得ない	1	2	3	4
10	男性と女性は、本質的に違う	1	2	3	4
11	セックスにおいて男性がリードするのは当然である	1	2	3	4
12	女性は視野が狭い	1	2	3	4
13	中学になると、男の子の成績の方が伸びる	1	2	3	4
14	一家の生計を支えられないような経済力のない男性は、男として失格である	1	2	3	4
15	女性は月経があるので、精神的に不安定である	1	2	3	4

		そう 思わない	どちらか かたがた 思わない	どちらか かたがた 思う	そう 思う
16	女性は何かにつけて責任を回避しがちである	1	2	3	4
17	たくましい精悍な体つきは、男の魅力として重要である	1	2	3	4
18	人前では、妻は夫を立てた方が良い	1	2	3	4
19	男はむやみに弱音を吐くものではない	1	2	3	4
20	男は背が高くなければ、と思う	1	2	3	4
21	理論的思考は、男性の方が優れている	1	2	3	4
22	最終的に頼りになるのは、やはり男性である	1	2	3	4
23	女性は男性に比べ、感情的である	1	2	3	4
24	子育ては、やはり母親でなくては、と思う	1	2	3	4
25	女性は男性に比べ、手先が器用である	1	2	3	4
26	女性は出産をする可能性があるため、男性と仕事の上で互角に並ぶのは無理である	1	2	3	4
27	冒険心やロマンは、男性の究極のよりどころである	1	2	3	4
28	女性が人前でタバコを吸うのは好ましくない	1	2	3	4
29	子どものことより自分のことを優先して考えるような女性は、母親になるべきではない	1	2	3	4
30	男性は女性に比べ、攻撃的である	1	2	3	4

【4】最後に先生ご自身についてお聞きします

4-1	何年度生まれか教えてください	昭和	年度生まれ
4-2	教員歴を教えてください (臨採も含めます)		年目
4-3	性別を教えてください	1:女性	2:男性 3:その他
4-4	現在の勤務校について教えてください	1:国立	2:公立 3:市立 4:私立
		1:小学校	2:中学校 3:高等学校
		1:男子校	2:女子校 3:共学校
4-5	専門教科を教えてください	科目名	

ご協力くださり、本当にありがとうございました。

【5】男性家庭科教員に関して、何かありましたら教えてください。

もし、インタビュー調査にご協力いただけるようでしたら、お名前とご連絡先を教えてください。

お名前：

ご連絡先：

お電話：